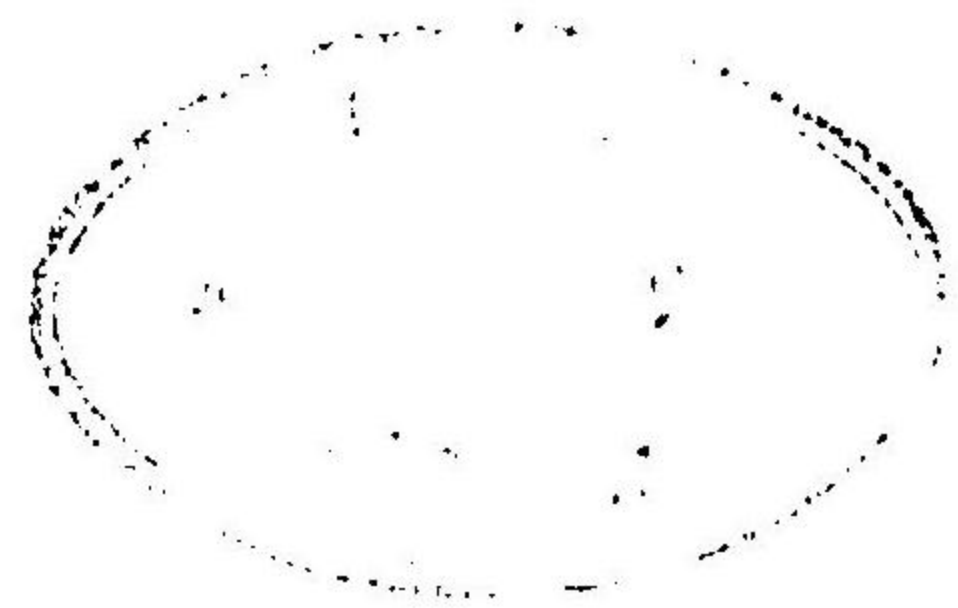


17
356



117-356

新嘉坡



はしがき

この著は明治三十九年から四十二年九月に至る間に於て僕が新聞雑誌等に出した論文を集めたもので、かの「半獣主義」の續篇と見てもいい。ただ前著から神秘的な口述は取り去つてしまひたいのであることだけを断つて置く。且、早稲田文學、新小説等の記者が僕の論文をここに再録する許可を與へられたのを感謝す。

明治四十一年十月

著者 巖

目次

目	次
日本古代思想より近代の表象主義を論ず	一
佛蘭西の表象詩派	四一
メレジユスキの『トルストイ論』を読む	九〇
藤岡博士の『新体詩論』	一〇九
自然主義的表象詩論	一三四
イブセン論私見	一四四
早稲田文學並に時事新報の記者に答ふ	一五五
駁論	一六四
駁論々論	一六六
自然主義雜言	一八八
諸家の自然主義論を評す	二〇三

文界私議(一).....	二〇四
同 (二).....	二〇六
同 (三).....	二〇六
國家人生論—加藤博士を論ず.....	二〇四
文界私議(四).....	二〇九
同 (五).....	二〇六
同 (六).....	二〇五
彫金界の過去及現在.....	二〇九
文界私議(七).....	二〇二
『基督の自然主義』(海老名氏)を評す.....	二〇〇
文界私議(八).....	二〇六
『自然主義の理論的根據』(中島徳藏氏)を評す.....	二〇二
刹那主義と生慾.....	二〇七

早稻田文學の詩論.....	二〇三
肉靈合致の事實.....	二〇一
肉靈合致—自我獨存.....	二〇〇
自殺論—遠藤博士を駁す.....	一九八
文界私議(九).....	一九七
新審美學の建設—田中喜一氏に與ふ.....	一九四
文界私議(一〇).....	一九九
新聞記者並に法律家に注意す.....	一九八
表象と暗示—新自然主義の結論.....	一九五
附言—島村抱月氏に答ふ.....	一九〇

新自然主義

岩野泡鳴

日本古代思想近代より表象主義を論ず

Prends l'Elegance et l'ords lui son con !

(英辭學を捉へて、その頭を絞めよ！) — Paul Verlaine.

(一)

日本古代思想近代表象主義

(1)

ニルヴーナ(涅槃)といふ考へは、僕等東洋人には、親密でもあるし、また厭氣に思はれるやうになつて居る。儒教と佛教とは、僕等に、殆ど同時代に這入つて來たのだが、前者は重に政治的社會的方面に影響があつたので、僕等の根本思想にはどちらかと云へば、後者の方が深く這入り込んで居る。何かと云ふと、直ぐ解脱となり、斷念となり、死となる。

死と云つても、武士道の切腹は、未來の念に殆ど關係がないから、また男らしい所がある。心中となると、全くこの涅槃的思想に迷はされて居るのである。相戀ふる男女が、その配偶があるにしろ、ないにしろ、またその不自由があるにしろ、ないにしろ、萬難を排してどこまでも添ひ遂げてこそ、その戀は生きて居るのである。それに、何ぞや、現世の苦を避けて、別に楽しい世界があると信ずる。その信は既に消極的であつて、よしんば他界があるにしても、耶蘇教の所謂「天使は娶らず、嫁がす」位の事であつて、中性的絶滅の靈域かも知れない。そんな状態は自然の生々を主とする僕等には無用である。

解脱を教へ、涅槃を説くものは、歸するところ、何の與ふところもない——若しありとすれば、覺めてこんなものかと驚ろく一時の氣休めであつて、僕等に死んだ後までも意識があれば、その意識を有する靈體は、じだんだを踏んで、世の宗教家なる虚言者を罵倒するだらう。科學的思想を有する人々が、宗教を愚者の器であると云ひ爲すのは、此點からであらう。然し、宗教なるものを宗教家の手にかけるから、味噌の味噌臭きものとなつて、それがやがて棺桶の臭ひに變はつてしまふのであつて——故大西博士が、まだ實際の

苦悶に落ち入らない時、確か六合雜誌で「わが國の古代には宗教がないと云つた、その宗教がない宗教は、古代からわが國にあつたのは事實で、之には決して消極的思想は伴つて居ない。古代の日本人は非常に死を忌み嫌つて、穢れの一つとした。これは宗教がないと云ふ人から見れば、たゞ僕等の祖先が希臘の様に現世的光明を愛して、暗黒界を恐れて居たに過ぎないことにならう。然し、この問題はそんな單純なことで止むべきものではない。

佛蘭西表象派の詩人パウルゼルレンが、諸方を漂泊し、罪を犯して囚徒となり、また貧困のうちに死の床に苦吟しながらも、なほ且生をこひねがつたのは、其主義と性情の上から、決して未練ではなかつた。僕等の祖先は、渠の様に鋭敏な頭腦と感覺とを以つて働かなかつたかも知れないが、生を愛する念は、非常なエネルギーを以つて、活躍して居たのである。古事記を見れば直ぐ分るが、岐美兩尊の國生み、神生みは愚かなこと、咳も尿も、尿も涙も、皆それ／＼神となつた。伊邪那岐尊が橋の小門で袂被ひし給ひし時は、その汚物は皆神となつた。宇氣比の時、大神の嚙んだ物、須佐之男の吐き出した物、また神とな

つた。『生む』『生れる』といふことはどこまでも祖先の觀念にはつき纏つて居て、之と反對に、死又は廢滅といふ念はなかつたかのように見える。伊邪那美が『一日に千頭絞り殺さな』と云へば、伊邪那岐は『一日に千五百産屋立てな』とある。迦具土神を斬つた時でも、その血と肢體とはそれぞれ神となつた。斬つた者の眼前に、その心中の悔悟と生慾とが諸神を現じなければ満足が出来なかつたのである。僕等の祖先は實に熱烈な生慾を持つて居た。この生慾を最も強く代表したものが、大和民族の首長となつたのである。

だから、わが國の『神』といふ觀念は、無雜作に偶像教（一神教も亦一種のそれだ）の神とその性質を混同すると大間違ひが生ずる。且、本居宣長でさへ、神は即ち人間であると云つて平氣であつた。人の外形に依らないで、生慾の出現する力を見て、神といふ觀念が發達して來たのである。最強最高の活力を受け繼いだ天皇が『あきつ神』と稱せられて未たのは、希臘聖教に於ける露西亞皇帝、天主教に於ける羅馬法皇、聖公會に於ける英國王の様に、人爲假定の唯一神に對する代理者であるとは違つて、神その物なる人間の代表者であるのだ。乃ち、わが國の皇帝が代表する神道は、實に最も痛切な人間神教であつたの

である。この考へから云ふと、かの人麿が歌つた雷山の句は無限の威力を以つて居たと云はなければならぬ。

おほ君は、神にしませば、あま雲の

雷山にいほりせるかも。

無定見の技巧家輩には、之を山を歌ふために面白く云ひまはしたに過ぎないと云ふものがあるかも知れないが、たゞア韻と濁音とが甘く急所に當つて居るといふだけでは、到底この莊嚴な歌の背景と餘韻とを解し得たとは受け取れないのである。

(二)

生慾の發展が宗教の形式を受けてから、預言者やうの者が出來た。『神がゝり』とは乃ちそれである。パーシヴルローエルと云ふ人が、亞細亞協會事項の中に『秘密神道』を紹介して居るが、それにも、神がゝり（ポゼッション）の歴史を、第一に岩戸開らきに於ける天宇受賣命、第二に崇神天皇諸神尋問の時に於ける倭迹々日百襲命、第三に伊勢齋宮建立

に於ける倭姫命、第四に三韓征伐に於ける神功皇后としてある。わが國の預言者は、ヘブライ民族のそれとは違つて、國家を救はうとするよりは、寧ろその熱烈な生慾を帝國主義的に外部に發展しようとしたところに、大きい價值があるのだとは、僕が『大日本建國史』を評した時に云つて置いた。だから、百襲命や、孝謙女帝の時の和氣清麿などよりも、神后や豊太閤の方がわが民族の大人物であると思つて加へた譯である。豊公の如きに至つては、大和民族全體の活力が神が、りしたので、殆ど計り知れない程のエネルギーが發現して居たのである。この神が、りといふ（宗教としての）秘密は、佛教と合してから、賢實が起した兩部、乃ち、修驗道となるし、また空海の眞言、最澄の天台、降つて日蓮の題目となつた。消極的思想が僕等に這入つて來たのは、この時からである。

生を愛するのは必ずしも光明的ではない。光明の裏には暗黒がある、この世に生存するのは苦痛である。たゞ幾多の苦痛を受けてもなほ生きて居たいと努力するところに、人間の威力が出て來るので——之は近代的思想だといふものもあるだらうが、古事記や日本書記を讀むと、黄泉比良阪を始め、至る所に暗鬱たる背景が備つて居るのを見ても、僕等の

祖先は、たゞぼんやりした太平の民ではなく、自然の悲哀と苦痛とを充分に感得して居たのが分る。殊に、須佐之男命が根堅洲國にやはられて、そこに戀する件の如き（こは僕の友人畫題として深い意味を顯はさうとして居るが）蛇の室屋に寝かされ、また大野の中に焼かれかけ、御頭に吳公が涌くまでも辛抱して、遂におほ神五十猛の御髪を室の椽に結び、五百引石を室の戸に取り塞へて、その娘須世理比賣を背負つて逃げ出すと、持つて居た天詔琴が樹に觸れて蕪き鳴つた。その蕪き鳴つたといふ聲を想像しても、如何にその神経が鋭敏であつて、威力のある人間が如何に活躍して居たかが分るではないか？僕はベックリンの畫を愛して居るが、その筆力と確固たる意識の現はれて居るところを取るので、一方には、人間を除いた自然界に何だか深い意味がありさうに逃げて行く傾向があつて、その『死の島』でも、『聖き森』でも、『海の別荘』でも、人間なる物をあまり小さく感じさせるのは、まだ最近の理想でもなからうし、之と同時に、また、わが國古代の思想に及ばざること違しと云はなければならぬ。これは、涅槃といふ考への有無から來るのだ。

物には限りがないから、一つの物に解脱をすると、また跡の物に迷ふ筈で——數量的で

(三)

網島梁川氏の『金子筑水君の宗教的真理を讀む』を讀んで見たが、そのうちに、筑水氏の經驗的事實は宗教的真理の因だと云ふを難じて、『寧ろ縁也、媒也、觸發の機會也。而して是くの如き神秘的實在（矢張り絶對無限になる譯だ）は、惟り情意の觸接抱合を許すべくして、理知の分析追隨を許さず』と云つてある。知力だけでは到底物の輪廓ばかりを渡るに過ぎないから、直觀する必要があることと僕も云つて置いたが、『半獸主義』、知力よりも更らに『饒かなる』情意を以つてしたところで、『所詮絶對的のものならずとするも少くとも絶對的のものと信せらるゝ』真理が平等だとか、神秘的だとか云はれたとて、『依然としてこゝに一種の不確實と不安とを感ぜざるを得ざる』は、氏が筑水氏の歸納的論法を評するのと對した違ひはなからうと思はれる。知れ切つて架空的な實在を豫想して居るからである。その架空的であるのを看破する能力（これは、苟も近代生活の渦中に這入つて居るものには、必らず備つて居る力）をどこか心中の片隅へ封じて置かなければ、氏の云ひ方に

に味ひがある『悟入的飛躍』は出來ないのである。梁川氏も亦ロマンチックな證明、否、判斷に落ちて居る。氏の様な行き方では（少し云ふのは失禮かも知れぬが、議論の上だから仕方がない）、到底、氏の所謂『最後の權威』は、昔は知らず、これからは出て來ないだらう。

近代人の神経は段々と鋭敏になつて來た。情意を寛容しない哲學はもう早くから倒れてしまつたが、今度はまた、反對に、情意の熱誠ばかりで知熱がないなら、宗教も文學も成り立たなくなつて來た。人間の一部分たる熱情（パッション）よりも、人間その物の熱想（パッションノート）でなければ、満足が出來なくなつて來たのだ。かうなると、バイロンや、更らに進んでロセチ等のロマンチック主義は倒れてもいゝが、自然主義から這入つた深い表象文藝が最も必要になつて來る。哲學や宗教は、その性質から云つて到底この境に入ることは出來ないのである。試ろみに阿彌陀經を讀んで見給へ、阿彌陀經はロマンチック主義の形式を備へた表象詩だ。十萬億土を過ぐれば極樂がある、七重の四寶、七寶の池、曼陀羅華の雨、奇妙雜色の鳥、百千微妙の樂、光明無量壽命無量の阿彌陀佛、如何にも結構な

如何にも有難いところへ手を引いて行つて、不退轉の阿耨多羅三藐三菩提を得させて下さると思つてさてこゝはと氣が付いて見ると、矢張り元の穢土、十萬億土こなたである。架空な物はいつまでも架空である。僕は今一言梁川氏に云つて置きたいが、『世の漫然として宗教即詩也と斷言する』は、如何にも考へ物であるが、また世の漫然として宗教（家でなくとも）でなければ、詩に根據を與へるものがない様に云ひ爲すのも『淺見者流』である。「詩人必らずしも宗教家たらず、而かも宗教家は同時に詩人の資を併せ有す」と云はれるその詩人は、たゞこの阿彌陀經的詩人に限ると思つて貰ひたい。乃ち、わが國では、謠曲作家の様な物で、百番が千番になつても、文學としては、架空の一つ形式を繰り返して居るに過ぎない。

(四)

島村抱月氏が曾て智識と形式とに「囚はれたる文藝」を吊らはれたが、それは形式的智識に據つてクラシックな作物を非難したので、根據の薄弱なロマンチック主義を喚起しようとする

るのではあるまい。また、わが國古代の人間の様に、全心全體が赤く燃えて居る自然主義的思想（知力も這入つて居るのは無論）を忘れて居るのではあるまい。かう云ふ思想は、西洋では、近代になつて、表象的傾向と相待つて、古來燦然として輝いて居た宗教の金箔を振ひ落してしまつた。たゞにそればかりではない、文藝中の獅子身中の虫とも云ふべき美學——冷語を以つてすれば、文藝上の信仰個條——も、どんなにシルレルやヘーゲルの見解が面白くあらうが、どんなにハルトマンの假象論が新説であらうが、そんな理屈で満足が出来なくなつて來た。それには、ニイチエの思想やワグネルの樂劇が、非常な影響を及ぼしたのであつて、丁度これと前後して、佛蘭西にゾラ、露西亞にトルストイ、那威にイブセンなどが出て來て、自然主義的表象の傾向の文藝を鼓吹した。たとへば、イブセンの『人形の家』を見ても、ノラと云ふ女は、何の假定もなく、何の形式にも依らないで、その全心全體が活動して居るではないか？ゾラは、佛蘭西の科學的ロマンチック時代に出たのであるから、フラウベルが形式藝術を現實の苦から免れる道だとばかり考へたと同様、今度は靈魂を以つて、神経液で、もあるかの様に取り扱つた缺點があるので、權威を夢見

て居る宗教家輩に、まだ嘴を入れさす餘地を残して居るが、トルストイやイブセンの作物になると、人間の自然としての神経がすつとセンシチヴ(敏感)に働いて居るので、兎角信條を以つて來たがるもの等の追跡を許さないと、ころまで這入り込んで居るのだ。

然し、主義といふものは、竹を立ち割つた様に、さうはツきりと區劃の附くものでないから、自然主義が佛蘭西近代の表象主義を結了するまでには、ロマンチク主義や病的現象も入りまじつて居るデカダン時代を經過したのだ。この種の思想が如何に病的と云はれても必要である事に就ては、僕、早稲田文學(三十九年九月號)に於て、トルストイを論ずる際に云つて置いたが、近頃、岡倉氏の英文著「茶道の卷」(The Book of Tea)を見ると「デカダンの詩人等は——いつにてもデカダンの世がないことはない——物質主義に反して、或範圍で、また茶道に道を開いた」と云つてある。氏としては面白いではないか？兎に角宗教の金箔が剥げてしまふと、もう、神とか絶對とか云ふ虚偽の物に由つて安心が出来ないから、自然に不安と煩悶とが攻めかけて來て、利休が茶道に這入つた様に、人間の神経が過敏にならざるを得ない。だから、クラウフォールドは、その『歐洲文學の研究』に於て、「デ

カダン時代には、人の藝術心が不權衡になるのは、その道念の通りだ」と稱し、シモンズが、その『文學に於ける表象主義派の運動』に於て、デカダン運動なるものは、『たゞ文學の大道を逸脱して居たのだらう』と道つたが、これは局部だけを見た解釋であつて、これから生じた、シモンズの所謂「もつと嚴肅」の表象主義にも、不權衡と逸脱との個處はある、また、あつてもかまはないのである。

Je suis l'empire à la fin de la decadence. (われはデカダン終末の領なり)

と叫んで、世の慣習を脱し得ない有識者輩を野蠻人と罵つたゼルレインを初め、マラルメも、メタリンクも、皆この潮流の渦中から生れて來たのである。

それには、米國の不運兒、酒亂酒狂の詩人、アラソポの影響がなきにあらずだ(米國の詩人又は思索家で、歐洲大陸に勢力を及ぼしたものは、超絶哲學に於けるエマソンと海軍評論に於ける大佐マハンを除けば、恐らくポー程の者はなからう)。渠はロマンチク肌の詩人で、随分短話と論文とを書いたが、詩は餘り多くない上に、『レーヴン』(大鴉)といふ作の外には、對して感服する程のものはない。然しこのレーヴンが大西洋を渡つて英國に來

た時、かのビーアールビーの運動者等は非常に刺撃を受けたさうで、畫家詩人ロセチの傑作『ザブレセドダモセル』(さきはふ乙女)は、これから出たといふことが、その兄弟の近著『サムレミニセンシス』(追想録)の中に書いてある。詩人身づからもホールケインに向つて、『僕が見たには、ポーは地上の戀人の憂ひを處理するのに、充分出来るだけの事をしてあつた、だから僕は決心して、その事情をひっくり返し、天上の愛人のあこがれを述べたのだ』と云つた。然し、ラファエル前派の運動は、古いロマンチック主義が新しい方面を持つて來たといふだけであつて——『さきはふ乙女』を讀んでも、架空の中世的形式を取り除けば餘すところの生命は何程もないでないか？たゞ芭蕉翁が『路傍の木樅』に注意した如く、最も小さい、最も關係のない物をも靈化したり、言葉の色と香とを以つて、最も説明し難い物の親和力を説明または捕捉したりした手ぎはは、アリンゴレンと云ふ人がスクリブナ雑誌で云つた様に、佛蘭西の哲理的基礎のある新詩派乃ち表象主義派に技巧上の類似點を與へた。然し思考上では、この英國の純美派者流とは殆ど關係がないので——『若し表象主義が來るべき文學として失敗したなら、それは哲理的背景の缺乏に由るだらう』といふゾ

ラの觀察も間違つて居て、寧ろ哲理的ではあつたが、わが國古代人とは違つて、自然的表象主義で行かなかつたのが失敗になつてしまつたのだ。

それは跡から分かることとして、ポーが、或ラム酒店で泥酔の結果、人事不省となつて病院へつれて行かれ、『自分の最親友が最上のことをして呉れるなら、ピストルを以つて自分の腦髓を打ち抜いて呉れろ』と云つて死んでしまつた、その時までも渠はその名聲の既に佛蘭西に廣ろまつて居たのを知らなかつたのである。惡魔主義派のボードレイルは、その短話を譯したし、表象主義派のマラルメは、自分が巴里の一學校の英語教師であつたからでもあらうが、レーヴンやその他の詩を佛譯したのが、マラルメ自身の名をも一緒に擧げたわけになつて居る。兎に角、ポーの死後二十年以上経つてから、その詩の敏感的な方面がデカダン隆盛の勢に随分内容的影響があつたらしい。ゴレンは渠を稱して、『佛蘭西表象派中で、渠が本國では持たなかつた王座と家族的肘掛椅子とを與へられた者』と云つた。

(五)

マックスノルダウの著『デジエネレーション』(病衰)には、新思潮を代表する文人詩才に、何やかやの理由を付けて、狂人呼ばはりをしてある。ロセチやエルレインに對する同音狂、トルストイに對する疑問狂、ワグネルに對する反叛狂、スキンプン、イブセン、ニイチエに對する自我狂などを證明して、著者身づから常識狂、病名狂に落入つて居るのを知らないのは、餘程面白いところだ。自分では充分分つて居ながら、反動的に攻撃して居るのだから、攻撃されて居る種類に屬する人々でも随分益するところがあるのである。その中に叙してあるのを見ても知れることだが、拾八世紀の人心を支配して居た佛蘭西百科學者派の勢力に對して起つたロマンチク主義が、先づ獨逸の文界を動かし、同國當時の國民的、精神的屈辱の状態を、バルテイル並にナポレオンから脱して、中世時代の盛んな状態に歸さうとしたのが初めて——それから一時代後れて、この主義がユゴー、デューマ、ゴーチエ、ミュッセ等に依つて、佛蘭西に這入つたが、前者の愛國的中世主義とは違つて、誇張、

怪異、時代の遠隔などの技巧的撰擇から、文藝復興の時代に向つた。

ところが、英國の新ロマンチク派——ラファエル前派——は、ノルダウに従へば、獨逸の同主義派の孫、佛蘭西同主義派の子であるが、その性質は更らに變化し、同じ中世主義を採りながらも、英國固有の宗教熱を加味して、實際生活の煩雜苦惱の状態に對し、別に安閑として餘裕のあるを示めすかの様な態度を以つて、慾情と信神とを一つにした様な姿が現はれたのである。これは、この派の導師とも云へるダンテガブリエルロセチの作を見れば、最も明かに分ることである。表象的また神秘的な點は既にこの派に於て見えて居たのだ。これと同じ様な現象が、また佛蘭西に現はれた。これが乃ちエルレイン一派の表象主義であつて、技巧上並に中世復歸の點に於ては、大變類似して居るのであるが、その内容に於ては大いに相違して居るところがある。科學的勢力を脱しようとして、直ちに消極的または架空的な宗教に飛び込むのは、詩人としてはまだ用意の充分でないところがあるのを豫め云つて置く。佛蘭西には、當時、寫實主義——云ひ換へれば、自然主義——が盛んであつて、前世紀の百科學者等が理論ばかりで萬事を解釋しようとした様に、今度は科學

を以つて人生を解剖しようとした。ゾラの如き、またホイスマンズの前半生の如き、孰れもこの方面に向つて居たのだ。表象派はこれの反動であつた。ところが、かの根據のない唯理派に對するには、根據のないロマンチック主義でもよかつたが、この手答へある科學派に對しては、また手答へのある主義を持たせなければならぬ。エルレインやマラルメは、乃ち心的科學を含んで居る、或はそれに同化して居る、表象詩を以つてしようとしたのである。詩を以つて哲學的サイコロジイの體現と見爲した。

自然の外形を讚美する詩はタムソンで亡んだ、自然を宗教心の奴隸にした歌はツルツラルスで充分だ。夢を夢として見たのはロセチである、戀を戀として歌つたのはポーである。然かし、わが國古代の神々の様に、宇宙と人生とを一刹那の心的妙用に觀取した様な詩歌は、どの國にもあるまいか？戀と夢と宗教と自然とが、ネビユラの様に、眼前に融和して活現する詩歌は、どこにもなからうか？分業は人間縮少の基である、分化は人生墮落の初めである。わが國の祖先の様に、一刹那に活現する生命を呼吸するには、どうしても自然主義的表象主義に行かなければならない。自然主義を心理的に深くすれば、その儘表

象主義になるのが當然であらう（ただ避くべきは表象専門の行き方である。この道筋を進んだのは、乃ち、エルレインで——マラルメは渠に次いで、之を研究的に妙用したのである。學問をたゞ學問として研究するものは、物識りにはなれよう、然したゞ普通の興味を覺えるのが絶頂であらうが、若し一人——たとへば、植物學者——があつて、自分がその研究する植物になつてしまつてこそ、初めて本統の興味が出来るのだ。心的科學を通過して表象主義に住して居るものは、ノルダウが何と云はうが、自分が既に心的科學となつて居るのだから、従つてその問題たる神經が人よりも鋭敏になつて、神とか、絶對とか、無限とか云ふ、すべて普通人が見て以つて無上の本尊とするものを、その根底から腐蝕さしてしまふので——別にそんな架空虚偽沒神經の概念を立て、わざとらしい安心を求めないでも、不安のままに人生自然の活動に堪へられるのである。

茲で直ぐエルレインやマラルメの表象詩を論じて置くべき筈だが、紙數に限りがあるから、別に題を改めてやることにする。實に渠等と平行するには、古への宗教的狂熱家と同じ勇猛直進を要するのであつて、世の宗教的または哲學的習慣に拘泥したり、引ッ張ら

れたりして居るものには、到底、落後者を生ずるのである。ホイスマンズやメタリンクは乃ちその仲間だ。僕は之からホイスマンズの辿つた路を語つて、佛蘭西表象派の末路は如何になつて居るかを示めさう。然し、こゝに注意して置きたいのは、自然派と云ふのと同然主義派と云ふのとは、非常な相違があることだ。わが國の評家中、これが區別の分つて居るものは少い様だ。前者はその心的状態に於てまだ自覺して居ない、然し後者になると、その根底から心理的自覺を有して居るので、それが燃えて來ると、自然に表象的活動の呼吸が感じられる様になる筈である。薄田泣菫氏の詩は、古語復活と句調の整頓とに於て特色が認められるが、或評家の様に之を自然主義派の範圍内に數へ入れるには、まだく遠いところがあるのだ。

(六)

エルレイン並にマラルメが死んでから、殆ど十年、表象派の餘勢は、今やホイスマンズとメタリンクとに依つて支へられて居るが、後者の神秘思想は段々佛蘭西に勢力を失つて

來た様子だし、また、渠はその實白耳義の詩人であるし、中澤臨川氏が『七人』に於て、上田氏が『明星』に於て既に詳しい紹介をしたし、僕も『半獸主義』に於て可なりの評論をして置いたから、こゝに特別な論評は加へまい。前者は小説家である、後者は劇詩家兼評論家である。ジョリスカルルホイスマンズは、かの伶俐なゾラがマウパッサンよりも天才だと見て居た小説家で、渠の自然主義は、田山花袋氏が云はれた通り（早稻田文學）極端な寫實主義に入り、それからまた深刻な表象主義（？）に轉じたのだ。渠は、クラウフォールドの云つた通り、『峻刻な描寫力』を以つて居た。ノルダウは渠を以つてゾラの狂信家から轉じて、ポードレイル一派のデアボリズム（悪魔主義）を模擬する様になつた者と見爲したが、ゾラには平明皮相で、たゞその要點を目錄的に枚舉するに過ぎなかつたものが、ホイスマンズには、魔的淫逸の分子を含んで居るにしても、物靈兩方面が一時に把握されて居る。渠は身を自分の主題に合體せしめ、自分がその雰圍氣を呼吸して、自然の特性の一點一劃をも見免さなかつた。渠には、驚くべき技倆があつて、その精神を紙面に浪費し、おのれの氣質の特色を評價し、その最も捉へ難い情緒を捉へて、之を後になつて、また文學の用に

供する餘地を與へなかつた。『渠がその作中人物と同一だといふ觀念が強烈であつたので、その人稱代名詞は、たゞ出版の曉になつて、入れ代へられて小説的姓名になつたのだと、僕等は殆ど信じられる。』

ホイスマンズの生涯の悲惨は、超自然の事物又は觀念を實際に渴望したのと、物質的存在の慘狀を破碎しようとしたのと同じ原因して居た。渠は神秘家でなかつたが、靈眼のある、また深い同情のある、神秘主義の研究家であつた。渠の精神は純粹に消極的な信條とは和解の出來なかつて——スキデンボルグ、その他の神秘的宗教家は、殆ど皆消極的と云つていゝ——渠には、進取的冥想が最も高い最も完全な目的實現であつて、その爲めに人間が作られた譯だ。渠の自作中に云つた通り、『眞實な作物、正確な條目、實質的神經的言語の寫實主義も緊要だが、等しく又緊要なのは、靈魂の好採掘者となることで、神秘的なものを心的病弊を以つて説明しようとしなさいことだ。』乃ち、『靈的自然主義』が必要であると云つたのだ。『アンルート』(途中)はこの主義を靈魂(渠には、良心)に適用したので、『ラカテドラル』(大教室)では、それが一層深く刻まれて居て、その時渠は純粹の表象主義者(?)となつたと云はれるのだ。シモンズも云つた通り、小説は娛樂的でなくつて心理學的なものとなつたのは、バンジヤマンコンスタン(千八百三十年死去)の發見だが、心理學を心靈の暗所までも突き込んで、世界の燃ゆるが如き胸壁を微光の様に見せしめることを發見したのは、ホイスマンズの『アンルート』で——『ラカテドラル』の内容は、田山上田兩氏の紹介を見よ)になると、更らに進んで、石柱の技術、植物の成長、獸類の無意識的生活が心靈と同じ法則に従ひ、表象を経て、靈的存在を攝取して居る。

クラツフォルドも云つたが、『ラカテドラル』の興味は純粹な主觀的で、メタリンクの劇にも時々ある様に、動作と云ふ程のものもない、事件と云ふ程のものもない、性格建造もあるかなしである。こんな外形的貧弱な状態を以つて、而も一種の發想と技巧とが發展するのは、劇に於てはメタリンク、小説に於てはホイスマンズだ。人生に於ける眞の悲劇は、表面的冒險や成功の止んでから初めて始まるのであつて、夢想家や神秘家の沈黙秘包の生涯は普通の活動家には拒絶されるだらうが、こゝにその魔力と價値とを有し來たるのである。眞正藝術の興へる幻影、實は最も根柢ある自然、を五官の力が鈍い、兎角表面的現實に

極的で而も熱烈痛快な點がない。

僕はこの點を淺見卑識な文人敎家に注意して置きたいのだ。兎角、世人はそこまで満足してしまふ。今日の見神、見佛、悔悟、解脱を説くものは、成功と實業とを云爲して購讀者を釣る刊行物と同様、かの薄志弱行、たゞ小成に満足しようとする、半可通の青年輩に御を興へるに過ぎない。さすが、トルストイは皮相ながらも、自分がデカダンの創作をやつたところがあるだけに、この退歩的形勢を看破して、マラルメ以來朽ち行く表象主義を罵倒したのであらう。クラウフォールドの如きは、今や佛蘭西の文界は、所謂デカダン派が實際の衰頹をして、別派の潮流が向いて來たと云つて居る。僕もさう思ふが、僕にはそれが所謂衰頹の一府衰頹なるものであるが、渠は之を『カンソリック信仰の復活』として、之に謳歌して居る。成程、表象派の二殿將とも云ふべきホイスマンズとメクリンクとは、いづれも十三世紀の信仰に歸つたり、またそれから出て來たりして居る。前者は表象的唯心論に入つて、架空的な『神』を持ち出したし、後者は神秘的必然論からして、生動すべき沈黙のうち、乾枯な『死』と『運命』とを見せびらかして居る。寫實主義が科學の淺薄な獨斷に自滅

した如く、表象主義は身づから宗教の形式を襲ふ様になつて、倒れて行つたと見てよからう。エルレインやマラルメに依つて、折角發展しようとした肉靈不二の藝術的妙境は、今や佛蘭西の文學界を去つて却つて露西亞に飛んで行き、メレジコウスキ一派の思想に居候となつてしまつた。

(七)

こゝに斷つて置くが、神や運命を拒絶すると、直ぐ却つて淺薄な見解を有して居るものと貶稱して、高尚ぶる人がある。然し、これは豊富な藝術的生命の何たるかを知つて居ないもの等の偏見であるから、そんなことで僕に當るのは御免だ。シモンズも云つたが、『エルレインには、物それ自身の嗜好か悔恨かばかりがすべての物であつて、運命を默想したり、問題的慰藉を求めたりする餘地は存じて居なかつた。』これは強ち内容の欠乏した『藝術の爲めの藝術』主義ではない。存在の一刹那に於て萬事を攝取する、僕の所謂『刹那主義』の好模範であつたのだ。幽玄も、深遠も、雄大も、熱烈も、すべてこゝを根據として出て來なけ

れば、^{△△△△△△△△}確實な幻像的生命は捕捉出來ないのである。だから、エルレインは、その信じた神がよしんば無いと分つても、決して失望しない立場に立つて居たが、ホイスマンズには、それがどうしても一種の形式の中へ這入つて居なければ満足が出來なかつた。生々活動の表象主義を、無残や、立ち所に打ち殺してしまつたのだ。田山氏が『ラカテドラル』を評して、『他まで象徴的叙述を恣にせるを以つて、不可解の處頗る多く、その印象を明に受くる能はず』と云はれたのは、氏の様に峻刻な歸納的研究を積まうとする人には尤もな云ひ方で——然し、表象的なのが悪いのではない、自然主義を以つて貫くべきその表象を、中途にして、ロマンチックな描法に轉じたのが悪いのである。無神経又は鈍神経にならうとする理想主義は、僕、之を採用しないのである。耶蘇教傳來の慣習が、文藝の最深最大の發展を害するのは、メタリンクに於ても同じことである。

耶蘇教から脱却して來た人でなければ分らないことだが、苟も人生の苦悶に觸れて、而もなほ宗教信者としてその苦悶を脱却するには、エマソンの様に先づユニテリアン思想に出るか、それではなければ、ホイスマンズの様子に古いカソリック信仰に戻るかの二道である。前者

には威嚴のある歴史もなければ、人を壓迫する形式もない。後者には、宏大な教堂もあるし、また嚴しい順序と儀式とがある。多少、空想的趣味を以つて居るものは、後者の道を取るのが多い。現にケーベル教授が新教から天主教に轉じたのも、それであらう。ホイスマンズには、神聖な石堂は石を刻んだ詩であつた。渠の見たゴチック建築は、最も純粹な、最も高尚な發想法を以つて、人間の神性渴望を石に刻み込んだものであつた。この意味から云ふ表象主義は、人の書いた聖書を天啓だと信ずる様なもので、矢ッ張り、自然主義を知らないカライルの表象詩に過ぎない。そんなのなら、各時代にそれ／＼表象がある。釋迦の教は印度古代の表象である、ソークラテースの教説は希臘詭辯學者の大表象である、イムマヌエルカントの哲學は拾八世紀獨斷派の最大表象である。すべて自己覺醒以前の影響と成り行きとを代表する意味なら、幽暗なゴチック殿堂は中世紀魂の表象で、ホイスマンズの『大教堂』は作者自身の舊行の表象である。すべてその中には、渠等の奥義と稱し、また生命と稱する物は、(別に態々設けてある譯だから)却つて這入つて居ないのだから、そんな表象が建設され、完成された暁には、僕等はたゞその形を見るばかりであつて、自然その物の生命に

は接することが出来ない。自己覺醒その物を描かないで、死んだ自己、乃ち、神又は運命なる物を表象して居るからである。

神といふ概念があると、どうしても自然に對する熱度が薄くなる。實際生活で云へば、毎日の仕事は他日或神報を得る手段に過ぎない。だから、一つの過ちがあると、それを懺悔する形式までが起つて來た。神も知らない、道德も知らない實業家ほど、現代に於て自己の仕事に一生懸命なものはあるまい。丁度西行や芭蕉が自己の詩に^{あこがれて}、草鞋掛けで諸方を行脚した勢だ。耶蘇教徒が實業界に飛び込んで、失敗することが多いのは、教訓的詩人が詩を牛馬視する様に、事業その物を手段視するづうづうしさからである。詩で云へば、同じ虹を見ても、ヘンリッヴンゲイク(これは佛蘭西表象派を真似たゞけだが)の『遙かに聴くは音楽にして、色みな歌ふなり』その原文は次回の論文に出づ)と云ふ様な云ひ方もあるのに、ヲルツヲルスの様な詩人はこと更らに不朽不死を感じるなど歌つた。それは、たゞ屁理屈ではないまでも、鈍感で材料が得られないところから、そんな方へ頭を持つて行つたに過ぎない。また、耶蘇が『野の百合は如何にして長^{また}つかを思へ、勞^{つと}めず、紡が

ざる也』と云つたまでは詩的だが、『神は……斯くよそはせ給へり』と付け加へたのは蛇足である。佛蘭西中世紀の遺物にして、散文韻文交互體の戀愛物語『アウカサンとニコレト』は、之を英譯したアンドリュウラングも云つてる通り、『純情と諧謔との魔力ある混成詩』だが、非常に固定したコンエンションがあるので、丁度ホメーロスの叙事詩に『Os eph'ra』(斯く語りければ)といふ語が何度も出て來て、何となく叙事の道筋に威嚴を持つかの様に、アウカサンが馬を驅りて羊牧ふものらのそばに行き、『よき兒等よ、神、汝等と共にあらん』Fair boys, God be with you.) など云ふと、一種の詩味があるかの様に歌つて居る。これは宗教が詩を殘害する適例である。然し、僕は神を否定しても、必ずしも唯物論を唱へる譯ではない。若し神と神の力とがあるものなら、それは自分以外ではないと云ふのだ。ニーチニから出て來た思想は、宗教的慣習を破り、偏見を破り、僭越を破つて、非常に人間なる物を偉大にした。然し、その偉大はエルレインの行き方と同様、刹那的に獲得されるのである。わが國古代の神々が、神から生れて神となり、また自分が神を生んだと同前、眞正な自然主義の表象は、いつも生きゝして、永久に形式を拵へない

表象でなければならぬ。

假定のない表象は乃ちその物身づから生々苦悶する表象である。自分が自分を喰ひ殺す刹那の感想である。肉も、靈も、情緒も、思想も、渾然として目前に活現し、自然の外に天を許さない危機である。この自然の機をゆるめれば、メタリックの所謂沈黙を経て、死と運命とが出て来ようし、また、中澤臨川氏が新古文林で「ツルゲーネフの哲學觀の根本概念」と云つた、冷かなる威力と永久と自足がある自然も出来よう。然し、そんな消極的思想をすべて吸収した後では、人生は、癩病人が腫物を搔いて、その痛がゆいところに非常な痛恨と快樂とがある様なものだ。深刻な現世主義は、真正な表象主義の立脚地である。いつも生き／＼して居たわが國の古代人もこの立ち場に立つて居たし、マラルメやエルレインの詩も此状態を現はさうとした。僕の『半獸主義』は、乃ち、それである。或は之が宗教にならないとは斷言しないが、世人は、桑木博士が『哲學雜誌』で云つた哲學と哲學思想との違ひがある如く、宗教と宗教心との違ひがあるのに、之を混同して居る。天地不可解を叫んで煩悶するのも宗教心であるし、その煩悶を熱刻して更に深い煩悶を現するの

も宗教心である、これわが國の古代にもあつた、またデカダン藝術にもあつた。たゞ宗教家の所謂宗教とならなかつたのは、寧ろ幸ひであつたのだ。かういふ藝術をトルストイなどは背徳不健全と云つて攻撃したが、それでは、その精神や身體が不健全な宗教家が、神を證し、基督を説くのは、このデカダン派の藝術とどれ程の高下があらう？ 數歩を譲つて云つても、宗教家は宗教を以て宗教心を説き、藝術家は藝術を以つて宗教心を現はす。然し、藝術は宗教よりも自由で、而も偏見の附いて來ないのは事實である。今一つ附言して置きたいのは、藝術家はたゞその作物を以つて之を現はすだけだが、宗教家は行爲を以つて實行するといふ論者もあるか知れない。然し、前者の創作は後者の行爲に劣らない實行である。而も、瘦ッこけた山僧や、瀕死の居士が、一小庵室でふざけた眞似をしたとしてそれが何で詩人の一詩に及ばうぞ？ (特に梁川氏の注意を促す。)

僕の自然主義的表象論は、詩に於て初めて實現することが出来よう。まだ人生の極致に觸れない青年時代には、センチメンタルやロマンチックな感情を喜び、人生に倦んだ老年はまた固定したクラシク趣味を以つて満足し易い。どちらにしろ、人は多く感情と思想とを

區別して前者を燃やすことがあつても、後者を熱せしめることを知らない。大作家持の歌に、左の如きがある。

うらく／＼に照れる春日に雲雀あがり、

こゝろ悲しも獨りし思へば。

この歌が本邦古典にあつて、一頭地を抜いて居るのは、センチメンタル（純情的）な點である。然し、それだけでは、歐洲十九世紀の文學で、ゲーテの『エルテルの憂』にしか接近して居ない、而も歐洲では、純情派がロマンチック派となり、寫實主義が自然主義に進んだ。今や思想の情化が表象詩に最も必要な條件となつて來た。僕の悲劇『燐の舌』（新小説掲載）並に『斧の福松』（文藝俱樂部）は、離分之を適用して見たのだ。それには、マラルメの歌つた様に、『痛ましき裸形もて』……『徳なくて』……『飽くまでも溺れ行き』『海妖の胎内の兒』となる勇氣と熱心とが必要である。（マラルメの詩は次の論文で説明する。）

(八)

表象派の傾向を有するものは、佛蘭西以外、諾にイブセンあり、獨にハウプトマンあり、露にゴルキイあり、以にダンヌンチオあり、白にメタリンクの外にエルハールンあり、いづれも好く研究して見ると、意外に自然主義の道筋を脱して居るものがあるかも知れないが、かう云ふ派中でも、イブセンとマラルメとが精神に於て、また身體に於て、最も健全であつたらしい。渠等が病的と攻撃されることがあれば、それは考へがあつての上だから。中世的宗教家など呼ばれるよりは、寧ろ結構である。近代的文藝が段々神經過敏になるのは、決して恐るゝに足りない。宗教よりも一歩進んで行くのだ。もつと神經が鋭敏になつて、思想の根底まで焼けて行かないと、中途で段々落後者が出來て、自然主義的表象が横道へそれてしまう。誰のであつたか、今その作者の名を忘れたのは甚だ残念だが、獨逸の大家の、矢張りベクリンの奇怪な畫風を一層烈しくした畫で、二人の紳士が酒に酔ひ、片手におの／＼酒の瓶を以つて相抱き、森林中を醉歌して歩くのがあつた。周囲の樹はみ

なうねく動いて来て、その枝や節々が人か悪魔の顔に見えて居た。それが諷刺畫であつたにしろ、なかつたにしろ、そこまで突ツ込むだけの勇氣はよみすべしだ。

人生は醉生夢死でいい、どうせ悟つたと澄まして居る者も、裏面から見ると、不自然な醉生夢死である。醉ッばらひの方が却つて神経は過敏である。過敏な神経が何よりも生命だ

——人生は悲惨だ、人間は痛苦だ。樂天だとか、厭世だとかいふ餘地もないのだ。たゞ生命の活現する刹那的自覺が痛切で、深刻で、また熱烈でありさへすれば、その瞬間の詩人は、その瞬間を離れた時、大僧正であらうが、大帝王であらうが、また見すばらしい乞食であらうが、少しも違ひはないのである。詩人が創作の瞬間は、天上天下一歩もまた何物にも譲るべき時でない。不斷は獸的、肉的、また靈的な自然主義に立つて居て、表象的感想の動く時が、乃ち、最上の詩人である。マラルメの詩篇は、此點に於て、永久に捨て難いのだ。印度並に西洋の舊式表象主義は、無意識中の意識があつた。近代、それが自覺の域に進んで、表象主義その物が執烈な意識となつて現はれて來た。わが國は之と反對で、古代にそれが盛んに發揮されて居たのが、その後、他の消極的、架空的、形式的思想に壓迫されて、殆ど忘れられて居たのである。僕は奇を好んでこんな事を云ふのではない、假定のない、僭越のない、而も敏感な人間その物が幻像でもあり、また糧食でもある自然主義的表象の生活は、既に僕等の祖先がやつて居たのだから、今度は、この現代に於て、之を詩に實現しようよと云ふのである。よしんば、之から新宗教が出ると假定しても、まだ一時機が早いのだ。僕等が充分の材料と生命とを興へた後でなければならぬ。

幽玄で偉大、純朴で熱烈、わが古代の思想は、その表象の死骸として各所に白木の社を残した。僕等はこれから、現代に於て、表象詩を傳へるのである。青葉村といふ人が本邦古代の美術(讀賣)を論じて、日本畫の描線寫想は獨特のもので、不熟なのはまた半異邦的だからだが、時代と共に外來の要素はすべて融化してしまつたと云はれたのは、誠に實際に相違ない。僕等の自然表象主義も、他日は外來の耶穌教的分子を去つて、本邦古代の思想に醇化し、わが國の表象主義として、世界に新生面を開く時が來るであらう。この種の詩は大いに技巧を貴ぶが、言葉があつて概念が出來たのではないと同様、技巧があつて思想が出來るのではないから、先づ思想のリズムと構成とを論じて來たのだ。かの『明星』記者が純技巧的見

地から——これはボードレールなどの主義を聞きかじつてのことだらうが——僕を初め、自然主義的傾向のあるものを技巧反對者として頻りに攻撃するが、これは自家の無思想を豫防するにあらざれば、的のないのに矢を放つ様なもので、僕等に決して反相的自然主義または藝術利用主義から、技巧を排するのではない。思想の熟したのは、技巧の熟したものである域に達してこそ、初めて完全無缺のものが出来よう——然し、これは理想であつて、表象派の本尊とも云はれる、マラルメの失敗もそこに起因したのだ。この理想を急進的に實行して失敗するか、または之に成るべく接近するを努める外、神ならぬ僕等の行き方はないのである。わが國では、泣菫氏のは随分之に遠いところがある様だし、有明氏のはまだ足りないところがある、僕のも『泡鳴詩集』に收めたものでは、ロマンチクな分子が多いので満足出来ない。

沈溺せよ、痛恨せよ、寧ろ裸體となつて、その裸體を裸體にせよ。(明治四十年二月十日作。早稻田文學掲載)

佛蘭西の表象詩派

Le suggestif, voilà rêve (暗がするは乃る夢なり) — Stéphane Mallarmé.

(一)

佛蘭西表象派中、先驅の一人とも云へるジュエラールドネルブルであるが、これはアーサー・シモンズが『全世界を失つて、おのれの靈魂を得た者』と稱した人で、ジュエラール自身も、『われは力を得て、わが身邊に自分の宇宙を創造し、わが夢を統御して、之を堪へて居るのに代へたい』と云つた。彼は詩を以つて一種の奇跡と見爲して居たから、美の讃歌でもない、美の説明でもない、また美を映す鏡でもない。美その物で、想像された花の色香と美観とが、紙背に再び現出するのであるとした。心靈再権化の夢想又は教理は、久遠問題の解釋者等には、随分興味と慰藉とを與へたものだが、ジュエラールには教理と云ふよりも寧ろ夢であつて、而もこれが自分の呼吸よりも一層人間なる物に接近して居たのであ

る。渠にはまだ抵抗し難い未見國の設けがあつて、それを身邊に引きつけようとしてその益のない努力が渠をして一生の悲劇を成立させたのだ。その心持を云つて見ると、過去と未来とは絶えず渠と共にあつたが、肝心な現在は絶えずその足元から逃げて行つて、把握することが出来なかつた。渠の狂氣が出たり静まつたり、また再發したりしたのは、その理由を如何に生理的に解釋するものがあるにしても、つまりは、世間でよく云ひたがる様に空想に走り過ぎた譯ではなく、寧ろまだ夢幻力の根底が薄弱であつたので——シモンズの云ふ様な靈的修練が缺けて居たのではない、自然主義の素養が不足して居たからである。

ジエラールが最後に自殺をした、その時懷中して居た作は、狂人渠自身が書いた一狂人の幻像物語であつた。僕に度々經驗があるが、一詩を物して襟に就くと、暗中に自分の書齋がはつきりと見える、夢ではないから、起きて手を以つて行くと、どの書物でも、ちやんと心に思つたところが開く、さういふことがある翌日に限ぎつて、朝の光も暗い様な氣がして、而も過去と未来とがすつと透明になつた様な氣がする。之と同じ様なことをこの

物語にも云つてある、『時々自分は自分の力と活動とが倍になつたと想像した。自分には、すべての事を知り、すべての事が分つた様になつた』と。或は風癪院の庭に集まる人々の勢力が天の星を動かすと考へて見たり、番人や入院者の談話が神秘的意義を有して居ると聽えたりして、つひには『すべての物は生き、すべての物は運動し、すべての物は符合する』と云つたのは、狂不狂を問はず、一種の哲理には相違ないが、ベームの所謂『印符』、ス井デンボルグの所謂『符合』の教理に過ぎないのであつて、普通傳來の神または絶対の様な超自然物を豫想して居たところに缺點があつたのである。

非リエドリイルアダンの劇『謀叛』は、イブセンの『人形の家』に似て居るところがあるが、現實に觸れるに一種の輕侮を以つてしてあつて、美な點はあるが、練熟な點が少かつたらしい。シモンズはこの作者を貴族的イブセンと呼んだ。非リエは唯物論者や寫實主義家の間に育つて、それらの思想の愚鈍なるに激したからでもあらう『生活に關しては、自分らの奴婢が自分らの爲めに之をやつて呉れる』と云つて、『アキセル』といふ靈的又繪畫的な劇を作つた。この中には、宗教的理想、神秘的理想、現世的理想、情熱的理想など、種

を作つた。その詩の初句に、左の如きことを云つてある。

A noir, Et Blanc, I range. U vert, O bleu, voyelles,
Je dirai quelque jour vos naissances latentes.

(エイ黒、イー白、アイ赤、ユツ緑、オー藍の母音よ、
われはいつか汝等の隠れたる始めを語らん)

ノルダウは狂人の悪戯と見爲したこの技巧的理論をルネイギルと云ふ人などは眞面目に思考して、たゞに各母音の音色ばかりでなく、樂器に適用し、立琴は白、井オロンは藍、喇叭は赤、笛は黄、オルガンは黒の色音があると論じた。フランシスボアクトワンは、藍は戀より死に、またトルコ藍から印度藍になるのは、最も内氣な方から最後の荒廢に進む心持だといふ様な色感を教へた。バルベドールギリなどは、手紙を書くに一語中の文字をそれ〴〵適當だと思ふ色を選んで色取つたものだ。表象派もから獨斷的になつて來ると、ヤルに黄色であつた笛は Hoffman には緋、ラムバウに黒に見えた A は他の人々には藍であつたといふ様な反對が出るのも尤もだが、米國現代の詩人ヘンリワンダイクが、この發明

を利用して、左の如く歌つたなどは面白いではないか？

So when I see the rainbow's arc

Spanning the showery sky, far-off I hear

Music, and every colour sings.

(斯くて、われ、虹のゆみ形の

急雨の御空に渡るを見る時、遙かに聴くは

音樂にして、色みな歌ふなり。)

ラムバウがこの様な新式の物云ひを工風したのは、博學の藝術家だからではない、心が燃えて云はねば濟まないからであつた。故西郷従道侯が、その甥の洋行を本船まで送つて行つた歸りに、向ふの船から合圖をするのを見て、こちらの小蒸氣船の窓を明けようとしても開かないので、がらす戸をたゞき毀して、ハンケチを振つたといふ話がある。ラムバウはこの勢を藝術に用ゐたので——感興の涌いて來るところ、如何なる形式をも關門をもうち毀して、直接にその精神と行爲とに野蠻主義を實行したのだ。一度、文明に對して反

の所謂『官能 に半可通のカソリック主義』であつた。こんな所があるので、トルストイ老爺をして、デカダン詩の難解誇張を非議する上に、更らに又別様の悪感を懐かしめて、渠れを呼ぶにも、『最も不精巧な羅馬カトリカの偶像崇拜』者と云はしめたのだらう。

エルレインの改宗は前に云つた美少年事件で這入つた獄中の出来事で——シャルルモリスに『不朽兒の靈』と云はれた渠は、敏感な上に純朴であつたから、肉と罪とに對する悔悟の念も、全心全力を注いで、なかく、熱烈なものであつた。然し人性を脱して神性を抱合したと云ふ様なとは渠に對する宗教的偏見者流の解釋であつて、渠は世の所謂經驗から何物をも得なかつたと云はれる、それ以上に又宗教の固定的影響を受けなかつたことは、シモンズも云つて居る。渠自身も亦持前の眞摯な態度を以つて辨明したが、『自分は信する、して思想に於て罪を犯すは、行爲に於けると同様だ。……自分は信する、してその瞬間はい、信徒である。自分は信する、して直ぐ跡は悪い信徒である』と。而して一たび酔うてその孤獨を感じて來ると、堪らなくなつて、或賤婦の懷に身を投じてすゝり泣きをした。これだけを讀むと、そこらあたりの耶蘇會堂の祈禱會で、涙を振るつて懺悔をしながら、

その夜直ぐ同じ惡魔の淫賣婦にくつつく、青年の態度の様に思ふものもあるだらうが、『罪の記憶、希望、革新は自分を滿悦さして、悔恨のある時とない時とある、また時に依ると、罪その物の形を帯びて、すべてその自然の結果に圍まれて居る。更らに屢々——それ程強力で、それ程自然で、また動物的なもので、肉と血とはあるが——丁度、どの肉慾的自由思想家とも同じ工合だ。……自分等は之を、短言せば、文學の形にさし向け、すべて宗思想的觀念を忘れ、或は又その觀念の一つをも自分等に逸せしめない。何者か良い信仰を以つて自分等を詩人として罪し得ようか？ 百度も否だ』と云ふに至つて、最も近代的煩悶の要領を盡して居る。クラシク又はロマンチック神秘家なるスキデンボルグなどが神を見たとか、天國や地獄へ行つて天使や惡魔と話しをして來たとか云ふのと違つて、こゝが、詩に於てまでもすゝり泣きを歌つたエルレインの新らしい天才であるところだ。ボードレイルは『詩は……科學または道德と同化することが出来ない』と云つて、盛んに醜物、病毒、罪人、賤業婦などを歌つたのはいゝが、カントの藝術無關心説に迷つたか、あまり高踏無感覺を遂行して、ノルダウの所謂『玻璃と錫との風景』を現じた缺點があるのだ。

それから見ると、エルレインの技巧は比較的融通無碍である。

トルストイは、その『藝術とは何ぞや』の書に於て、デカダン藝術を『悪化』と見爲し、第一に宗教的題材の空乏、第二に形美の虚飾朦朧、第三に人工的不自然となつたと非難した（序ながら、この書の最初の日本譯『藝術論』には、題材云々のところにインスピレーションといふ語がある、これは別にそんな語の這入つて居る原本があるのか知れないが、この語はもう舊式の詩論家に限つて云爲する口實である。僕等はそんな迷信的、否、惰眠的詩境を退けたのである。）而して、その第一結果のたゞ新らしい快樂ばかりを追ふらしく見えるのは、却つて絶大の苦痛を表白して居るのだし、第二結果の虚飾朦朧らしいのは、現今の語法を以つてはこの新思想と痛感とを發表し難いところがあるからで、第三結果の人工的に見えるのは、在來の形式を破つて、自家天真の發揮を必要とするからである。ゴレンはその論文『佛蘭西表象派』のうちで、之を『われなる物がシヨースアンモルテル（不朽の物）の胎内に歸るのだ』と説明した。成る程、表象派中でも、心理學的なるよりは、寧ろ形而上學的の小説を書いたと云はれるモーリスバレスなどには、すべて見ゆべき物は表象

で、それが代表的職務をその一刹那に終はつてしまふと、アンコンシオン（無意識）になる。之を不朽だとも云へようが、僕から見れば、それは表象を死物視するので、表象はいつも表象を呼び起して居るやうにならなければ、新文藝の價値は疑はれるのである。だからエルレインの様に理論を持たないで、『初めも、終りも、また全體が、その人』であつた者は、不朽の物に歸ると云ふよりは、寧ろ之を藝術に據つて自分の身に體現して居たのだ。渠は僕の所謂『刹那主義』の人で、一刹那にその全價値を與へ、その各刹那からその刹那の與ふるものを領收したのである。『渠には、物的視覚と靈的幻像とは、その頭腦の或不思議な鍊金術的作用に由つて、同一であつた。』また、その聽覺と視覚とは、殆ど相交換することが出來た程で、前に引用したワングイクの詩句の様に、渠は音響を以て、色彩を施し、その描線と大氣とは直ちに音樂に變化することが出來た。渠には、見ゆべき世界は幻像として存在して居たので、渠は自分の官能を通じて之を吸收したのは、丁度古代の神秘家が神美を吸收したと同じ工合であつた。渠の反省は全く徒勞で、その詩は理性の言葉ではない、心靈その物の言葉であつて、之と同時にまた目の言葉であつた。

叙情詩の本體は乃ちこれであらう。事物に對する深遠な自覺が、かの僕等のまはりにあつて、而も僕等の出て來た、また僕等のそこに歸り行くと云はれる、神秘なる物の聲となつて居るのである。シモンズも之を、舊式の思想に従つて、『無意識』の状態と評したが、なほ満足でなかつたから、『賢明で機敏』と云ふ形容詞を附して居る。エルハーレンの言に據れば、エルレインは『その特性を深く美に融和したので、渠は新らしい、且それ故に不朽の態勢をその上に印した』のだ。

(三)

佛蘭西の詩は、エルレインまでは、修辭學の拘束を受けて居た。『言語を牛馬視した』とは、野口米二郎氏の言だ。又上田敏氏の云はれた通り、『由來佛蘭西の抒情詩は典麗優雅の餘り熱烈放逸の氣慨に乏しかりしが（泡鳴曰く之はわが國の短歌も、昌子の出るまでは、同じ状態であつたと思ふ）ユッゴオ出で、之に激越の調を加へ、續いてポドレルの詩に奇抜幽麗の措辭を見るに至つた。修辭學なくして、佛詩の書けるのを教へたのはエルレイ

ンである。わが國在來の短歌的ところはユゴ、ポドレル、また、ルコントドリイを主導者としたバルナシャン派（これからエルレインも出て來た）にもまだ残つて居たが、その達辯な修辭中に隠れて居た自然その物が、エルレインの一功績である詩の『解放』に由つて、更らに痛切になると共に、新生面を開いたのである。眞や美に對して修辭の拘束がある間は、その聽者や讀者の判斷を待つて居るので、まだその思想と情感とは全くの獨立をして居ないのだ。然し渠になると、ロムプロゾーやノルダウはその頭腦の大不調和を以つて病衰者の適例としたが、その顔面に一線の美なるところもない代り、顔全體がその性格を表し、睡氣と火山的火焰が充滿して居た様に、その詩は一言一句に至るまで鋭敏な電氣が通つて居た。渠に取りては、その詩は一刻も失ふべからざる生命であつて、その言葉はまた刹那に起滅する呼吸であつた。思想は乃ち技巧で、技巧は乃ち活思想であつた。トルストイは外形的宗教に重きを置いて、この點を悟り得なかつたので、たゞ餘り新らしい行き方を見て、直ちに之を人工的と評し去つたのであらう。表象派に官能的要素を吹き入れたボードレルは、人工美を以つて最上の物としたのだから、之はまた別問

叙情詩の本體は乃ちこれであらう。事物に對する深遠な自覺が、かの僕等のまはりにあつて、而も僕等の出て來た、また僕等のそこに歸り行くと云はれる、神秘なる物の聲となつて居るのである。シモンズも之を、舊式の思想に従つて、『無意識』の状態と評したが、なほ満足でなかつたから、『賢明で機敏』と云ふ形容詞を附して居る。エルハーレンの言に據れば、エルレインは『その特性を深く美に融和したので、渠は新らしい、且それ故に不朽の態勢をその上に印した』のだ。

(三)

佛蘭西の詩は、エルレインまでは、修辭學の拘束を受けて居た。『言語を牛馬視した』とは、野口米二郎氏の言だ。又上田敏氏の云はれた通り、『由來佛蘭西の抒情詩は典麗優雅の餘り熱烈放逸の氣概に乏しかりしが（泡鳴曰く之はわが國の短歌も、昌子の出るまでは、同じ状態であつたと思ふ）ユツゴオ出で、之に激越の調を加へ、續いてポドレエルの詩に奇抜幽麗の措辭を見るに至』つた。修辭學なくして、佛詩の書けるのを教へたのはエルレイ

ンである。わが國在來の短歌的ところはユゴ、ポドレイル、また、ルコントドリルを主導者としたバルナシヤン派（これからエルレインも出て來た）にもまだ残つて居たが、その達辯な修辭中に隠れて居た自然その物が、エルレインの一功績である詩の『解放』に由つて、更らに痛切になると共に、新生面を開いたのである。眞や美に對して修辭の拘束がある間は、その聽者や讀者の判斷を待つて居るので、まだその思想と情感とは全くの獨立をして居ないのだ。然し渠になると、ロムプロゾーやノルダウはその頭腦の大不調和を以つて病衰者の適例としたが、その顔面に一線の美なるところもない代り、顔全體がその性格を表し、睡氣と火山的火焰が充滿して居た様に、その詩は一言一句に至るまで鋭敏な電氣が通つて居た。渠に取りては、その詩は一刻も失ふべからざる生命であつて、その言葉はまた刹那に起滅する呼吸であつた。思想は乃ち技巧で、技巧は乃ち活思想であつた。トルストイは外形的宗教に重きを置いて、この點を悟り得なかつたので、たゞ餘り新らしい行き方を見て、直ちに之を人工的と評し去つたのであらう。表象派に官能的要素を吹き入れたポドレイルは、人工美を以つて最上の物としたのだから、之はまた別問

だ。

わが國現今の新音楽家等は、矢張りその方の修辭に拘泥して、而もその初步なるタイムヤリズムのことばかりを心配し、多少素養のある人々もまた漸くクラシカル頭腦を持つて來たに過ぎない。渠等に附隨して、或識者等は既に調子の上に定見と熟練とを持つて居るものがある新體詩界の状態を知らないで、或は我田引水的に合點をして、『音乐的』でないと言ふ語を楯に取つて、新體詩を非議する其意味の音樂的とは違ふが——エルレインの詩はその性質から云つて音樂的にならずには居られなかつた。言葉は乃ち刹那に飛び行く思想であつて、その瀏亮たる靈響は官能を溶化して、人間自然の生命を赤裸々に流出せしめた。渠の技巧は『詩を小鳥の歌に囀する』と云つたのは、實に全くのことだ。エルレインの詩に用語があるのは、鳥がその肉聲を用ゐる様なもので、又、その用語の意味が相互に溶化流合して、殆ど歌辭として聽えないのは、器樂的である。フイंकといふ人の音樂史論に、ベンチャミンキツドの言を引いて、然が夜森よるの中で鳴いて居る聲を形容してあるが、之が、やがてエルレインの詩である。『満ち足りてゆたかに、流るゝ様な聲が、樂しげに長

く曳いて、次第に低くなる、その末は空氣を震動し、銀線の打たれた様に、この孤獨な唱歌者は、最後の發聲の強烈な感情に堪へ兼て、『氣息も殆ど絶えるばかりだ』と。その詩にあらはれて居る肉靈の苦闘は、そのまま、熱烈なエネルギーとなつて、宇宙の法則を表象して居る様に聞えるのである。

かうなると、バイロンの淺薄なロマンチック詩や、ラルヅラルスの貧弱な自然詩は、もう厭になつてしまふではないか？修辭と教理とは、詩に生命を與ふるものではない。

捨て果て、身は無きものと思へども、

雪の降る日は寒くこそあれ、

花の降る日は浮かれこそすれ。

と、芭蕉が讃した西行上人は、わが國の歌人中、最も特色のある者で、法師にして法師にあらず、洒脱にして而もその心に執着の念が強烈であつた。渠が、世の所謂インスピレーションの様に外部から待ち受けるのではなく、もつと敏感な、またすつと切實な自分の意識を以つて、靈肉一躰を根底から震動さす神經電氣を傳へたなら、恐らく佛蘭西表象派の一大

人詩になれたらうに。』いつの世に長き眠りの夢さめて、驚くことのあらんとすらん』と云ひ、『心のみをぞ世にあらせける』と歌つて、渠はまだ靈肉合牝の自然的幻像界を攫み得なかつたのだ。エルレインになると、渾身これ詩で、自分^は幻^像で^ある、幻^像は^また^自分^だと云ふ自覺の域に達して居たから、その言語と氣質との純樸はホイスラーの畫にも似て、『一刹那の眞摯と印象とは文字にまでも附き従つて居た。』トルストイは之を餘りに主觀的(換言せば肉^的)だと云つたが、エルレインは、その詩、ゴレンが羽根ある忠告と云つた『アールポエチク』(詩術)に於て、『われらの欲望するところは影なり』(Nous voulons la nuance)と叫んで左の如く歌つて居る。

De la musique encor et toujours!

(音楽なり、更らに、また絶えず！)

Que ton vers soit la chose envolée,

(汝の詩も飛び行く物たれ！)

Qu'on sent qui fuit d'une âme en allée,

(そは、われらは感ず、失せたる靈を逃れ行く物と、)

Vers d'autres cieux à d'autres amours!

(他の空に、他の愛に！)

Que ton vers soit la bonne aventure

(汝の詩もよきめぐり合せなれ！)

Éparse au vent crispé du matin,

(朝のゆらめく風に散りばひ！)

Qui va fleurant la menthe et le thym……

(薫りて出づるぞ薄荷と芳草——)

Et tout le reste est littérature.

(餘はすべて文學のみ。)

最後の一句は上田氏も『何等の冷罵ぞ』と云つて讃成せられた。この冷罵は寧ろ形式弊

術に對する痛罵熱罵であつた。今、自然主義的表象派の代表詩ともすれば出来る渠の「シン
ヤンンドロートン」(秋の歌)を譯して見よう。

秋の非オロン

長く呻き、

寂し疲勞は

胸を痛む。

(Les sanglots longs

Des violons

De l'automne

Blessent mon coeur

D'une langueur

Monotone.)

切に息づか、

色青なめ、

われは過ぎし日

思ひ歎く。

(Tout suffoquant

Et b'ême grand

Sonne l'heure

Je me sourens

Des jours anciens

Et je pleure.)

病める伊吹き、

散りし行きて、

こゝに かしこに
われは 朽ち葉

(Et je m'en vais

Au vent mauvais

Qui m' emporte

Dejà delà

Pareil à la

Feuille morte.)

この簡結にして力ある詩は、ガートリユードホルの英譯の方が、原文よりも却つてその意味のよく現はれて居るところがある。それは長谷川天溪氏が『表象主義の文學』(太陽)に引用してあるから、讀者は僕の譯と對照して味つて見給へ。ホールは第一節の秋の呻きを『木の葉散らす息吹きが非オロンの如く低き悲鳴を擧ぐる』と譯し、ジョングレイ(であつたかと思ふ)の譯には、第二節の『全く息つまり』(原文)のところ、わざと

鐘の音を持つて來てある。その他、蒲原有明氏の『春鳥集』、上田敏氏の『海潮音』に、各三篇づゝ短篇の譯がある。また一つ、トルストイが難解不當の空文字と攻撃した小アリヤを譯して見よう。

廣野 の 上を

倦んじぞ 果しなく、

消やすき 雪は

砂とも 照らす なり。

(Dans l' interminable

Ennui de la plaine,

La neige incertaine

Tuit comme du sable.)

赤がね の 空

つゆしも 光なし。

思へば、月の

生き死ぬ ながめ かや。

(Le ciel est de cuivre,

Sans lueur aucune.

On croirait voir vivre

Et mourir la lune.)

そばなる 森の

檜の木、雲の如、

灰色 には浮ぶ

その影 濃霧 の うらみ。

(Comme des nuées,

Flottent gris les chênes

Des forêts prochaines

Parmi les brèves.)

赤がねの 空

つゆしも 光なし。

思へば、月の

生き死ぬ ながめ かや。

(Le ciel est de cuivre,

Sans lueur aucune.

On croirait voir vivre

Et mourir la lune.)

息詰む からす、

瘦たる 狼よ、

この 北風に

なが身は 破れぬべし。

(Corneille poussive

Et vous, les loups maigres,

Par ces bises aigres

Quoi donc vous arrive ?)

廣野の上を

倦んじぞ 果しなく、

消^りやすき 雪は

砂とも 照らす なり。

(Dans l'interminable

Ennui de la plaine,

La neige incertaine

Luit comme du sable.)

トルストイは、雪が『砂とも照らす』ことはない、また、光の鈍い『赤がねの空』に、

月が『生き死ぬ』やうに見えようぞと罵倒したが、前者は慣れ來つた煩悶苦惱を以つて廣野の雪に向ふと、雪は光があつても、無限にくづれて自分の心の平らかならぬことを表し、

後者は之と相應じて、寒さうに悲しい曇天を『キヅル』(鋼)に譬へ、そのおもてに見える月に、人生は生死以上の悲痛が感じられることを現はして居るのだ。第三節の『シェーヌ』

(橙の木)の影は、この悲痛中にも、ほのかに自分の心に浮んで來る幻影であるかの様に見え、第五節には、この幻影を追ふて、鳥や狼はその身が破れてしまふまでも、自分は烈

しいこの北風を忍んで、而もなほあこがれて居るものがあるのを示めして居る。こんな空漠寒寂な大風景からでも、すべて以上の感想が一つになると、何となく僕等に非常に暖い

物が感じ得られるのは、たゞ乾からびて居る禪僧などの詩歌と違つて、頗る現代的な、また敏感的な作者の特長である。ノルダウは、作者が同じ語又は句を無意義に反覆する癖があるから、これは心的勞衰のしるしだと攻撃したが、さう一概に無意義だと云つてしまへるものではない。

エルレインは、困苦と不運と災難とに堪へ、初めは飲酒に、後には病氣に溺れ、而も人生に戀々として、生慾を斷ち得なかつたのは、却つて大詩人の資性を備へて居たところである。その漂泊的生涯は所謂ボヘミヤ人（放浪する人の意）の隊長であつた。表象詩も渠の作ぐらゐになると、わが國今日の詩人が眞似ようとして失敗する難句難解には落ちて居ないではないか？ 僕は思つて居る、自然派（自然主義派ではない）の河井醉茗氏もツと近代的思潮に浴し、その温雅平明な詩風に拾倍の神經電氣を通じたら、エルレインの全體ではないが、その隱約な點だけは得られるだらう。

(四)

『詩には常に謎語があるを要す』（これはエマソンの文章非平易説と同主義だ）と云つて、微妙な歡樂を傳へる神秘が完全に含有されるのは、表象にあると説いたステファンマラルメは、トルストイもデカダン派中『最も著大な者』と許し、ゴレンが『詩人の表象的人物』と評した詩人で、餘程學者肌の人物だ。近代の表象詩は、エルレインの様な純樸な人のにしる、すべて哲理的根底があるのだが、奇跡はいつも起るものであるから、詩に一奇跡（舊思想のインスピレーション）の來たるを待つて居る必要はないと云つた位で——渠は『理論をマラルメに遺して置いた。』マラルメは文學を餘り愛し過ぎたので、之を完全にしよう、完全にしようと思つて、却つてたゞその斷片ばかりを書いたものだ。その精神が既に省略的であつたから、愛詩家の智力を信ずることが多きに過ぎ、普通人の考へでは分らぬ程、感想の連鎖を無視してしまつた。渠は、神秘家と云ふよりも、寧ろ一種の思索家であつて、その非常に伶俐な精神を以つて、常に明確な而も通俗ではない問題を解釋したのだ。表象はすべての文學に初めからあつて、たゞその不明確なのは、僕等の言葉その物と同じであつたのが、今や全く自覺の域に進んで、僕等の思想が多方面に束縛されて居るのを解放し

て呉れる様になつたのだ。渠の詩を讀むと、言葉は普通の外形的論理では發見されない位置に据わつて居るが、その間に見認められるのは裏面の調樂であつて、それが震動して、事物の中心に進んで入るのだ。

渠の證明に據れば、言葉は乃ち精靈の自由呼吸を符徴に取つたもので、渠の撰んだ言葉は自由を興へる原理だから、之が爲めに精神は物質より引き出され、新たに受け取つた形は乃ち世の所謂『不死』である。近代的文學はかうならなければ、たゞ生命のない死骸に過ぎなからう。『名狀するは破滅することである、暗示するは創造することである。』之が渠の主義で——エルレインの敏感よりも進歩して、マラルメは『心的感覺』とも云ふべき力が盛んであつたのだ。前者が夢寐縹渺たるうちに、熱烈な感想を寄せてゐるのは、大いにラムバウの影響であるが、後者の音律が確實にして、句々悉く寶玉の様な意味のあるのは之をジェラルルより受けたのである。然し、ジェラルルに純幻像であつたものが、マラルメには、沈思黙考の論理的歸結であつた。また、エルレインの詩が小鳥の瀏亮婉轉たる響きであつたに對して、マラルメのは宇宙を振動する大オーケストラの聲にならうとした。

歐洲の音樂界は、渠と同時代者のワグネル以前は、甘ツたるい協和音ばかりに支配されて居たと云つてもいい——丁度、わが國の新體詩界が甘ツたるい七五調のみを口調がいいと持て囃した時代と同様だ。然しワグネルが出て來て、不協和音を使ふことが多くなつてから、音樂なるものは、不用意な耳には随分聴き苦しくなつた代り、全體として之を聴き味ふと、意外に深遠微妙な効果を奏する様になつた。然し、この大樂劇家は、まだロマンチック要素を脱却することが出来なかつたから、たとへ音樂なる物の性質上、名狀することはなかつたにしろ、その暗示は空想的に高かつたらうが、實質的に深い點が少かつたらしい。マラルメの失敗はワグネルと同じ立場に満足して居られなかつたからで——實にワグネルを大成し、ワグネル以上の物を興へようと努めて居たのだ。言葉を靈化して音樂的に爲し、その音樂を以つて理性と意志と情緒とを自然化しようとしたのだ。物靈兩界の『永久符合』を云爲するのは、この詩人並に諸論者が勝手に其習慣を適用したのに過ぎない。然し、詩は詩として取り扱ふ充分の價值があるので、言語を以つて音樂を奏せしめようとは、かのワルター・ペーターの『諸藝術は絶えず音樂の方則に向ふ』といふのと同じく、藝術全體の共

通點からひねり出した考へであつて、若し詩を以つて音楽の代用とし、音楽を以つて詩の代理とするものがあつたら、滑稽と云はねばならない。『マラルメの『ラミュジクエレット』(音楽と文字)』といふ大學講演も、或程度以上に至れば、たゞ愉快な空想であらう。マラルメ自身も云つた通り、『事物の冥想、事物に由つて惹起する夢想から飛び出る想像』が歌となるので――パルナシヤン派は事物その物を示してしまふから、神秘的要素を缺き、心裏に鳴動する微妙な歡樂の響きを存じて呉れなかつた。これ詩の興味を四分の三減殺するものである。かう云ふ考へであるから、渠は詩を餘り奔放に作らなかつた、その數は比較的にななかつた。然し渠は僕の云ふ自然主義の方に一步を進めた神であつた。渠の主義と詩とを讀むと、僕にはわが古代の神々の痛苦と生活とが聯想される。渠はエルレインの様に天才肌ではない、然し自己の天才を壓服した大天才であつたらしい。『詩は危急存亡機の言語である』と云つたマラルメ自身の詩も、悉く過ぎ行く大歡喜を喚起して、之をその迅速な飛行中に捕へて居る。その歡喜の聲はたゞ情的本能の作用ではない、ルコントドリイルなどのパルナシヤン一派の叫んだ單純な喜悅や悲哀ではない。その聲には、實

に、重疊壓迫の力に満ち満ちた雰圍氣中で、心的情緒と心的感覺を連搬して居たのである。微妙な情緒、魔的風景、糢糊たる表象、これらの物が自然に相交叉して、純美の詩篇が成り立つて居る。

渠の事は、野口氏が『太陽』に於て可なり詳しく紹介してあるから、讀者はそれをも參考し給へ。若しエルレインを西行に引き下せば、マラルメは乃ちそれに對する芭蕉庵桃青である。後者の比較は野口氏も雑誌『卯杖』で論じたことがある。

愛き我を寂しがらせよ、閑古鳥。

故郷や臍の緒に泣く歳の暮。

蝸壺やはかなき夢を夏の月。

の作者は、心中確乎たる自覺的格調を有して居た詩人である。『三井寺の『夏草や』また『荒海や』の様なものは名吟ではあらう、然しクラシク風なものであるが、談林一派の中堅を突いて、新派の正風體を創設し得たのは、餘程マラルメの位置と似て居るところがある。幽玄である、雄寂である、而してその詩風は寂しい歡樂を追ふて居る。たゞその思想と感

情との上に於て、近代的面目を施して居なかつたのは、時勢上西行と同じく止むを得ないことだ。マラルメは、あまり凝り性であつたので、エルレインの様に自生自發のところがない。然し、次に引用するのを見ても分る通り、その作は殆ど完全融化の心理學である。有明氏の難解と云はれる作數篇は、随分この佛詩人の風格を追ふて居て、氏には渠と似通ふ資性も備つて居るのだから、その方面をもツと發展して、渠だけの集中情化力を持たして貰ひたいと思はれる——氏は首肯するか、どうだか？

(五)

マラルメの作にして、かの有名な『スービル』(嗟嘆)、並に『如何なる絹か時の薫り以て』を以つて初まる短曲は、上田氏が一は『海潮音』に、一は雑誌『藝苑』に譯出されたから、僕は今、トルストイが最も難解で翻譯も出来ないと攻撃した短曲を譯して見よう。(この詩と次ぎの詩とは一度二月の新小説に出たが、譯し方を改めたから、さう思つて呉れ給へ。)

痛ましき 裸形 もて、汝

黒大理・溶岩 を 出で、

角笛 に 奴僕 の 樹魂、

徳 なくて ただ 響く のみ。

(A la nue accablante tu

Baisse de basalte et de lavas,

A même les échos esclaves

Par une trompe sans vertu)

空洞 の 破船 かや (汝、

泡よ、そを 知れど、泡立つ)

最果 の 一破滅物、

抜かれたる 帆柱 を 去る。

(Quel sepuleral naufrage—in

Le sais, écume, mais y baves —
 Suprême une entre eies epires,
 Abolit le mât dévêtu)

或は、これ、憤怒の落ち度、
 いや高きほろびの影の
 空しくや淵となりけん。

(On cela que furiband faute
 De quelque perdition haute
 Tout l'abime vain employé)

曳く髪の中、
 他くまでも溺れ行きけん

海妖の胎内の兒は。

(Dans le si blanc cloveu qui traine
 Avarement aura noyé
 Le flanc enfant d'une sirène.)

『海妖』とは、以太利附近の一孤島に住んで居て、妖魔の樂音を以つて船人を引きつけたと想像されるサイレンである。昔、オヂセウスはその船子の耳に蠟を詰め、その迷はしの危険を避けしめ、自分はその魔音を聴いたが、身を帆柱に結びつけて居たから、無難に通り過ぎることが出来た。マラルメは之をその詩中に聯想して居るのだらうが、希臘的武勇を材料にしないで、却つてデカダン詩の本色を歌つたのである。『エイキユム』(泡)が題であるらしい。黒大理、溶岩、角笛を以つてこの音樂島を呼び起し、『痛ましき裸形』または『僕の樹魂』とは、自我を制限せず、妖音に應じてぶくついて居る泡の姿で、『徳なくて』云々は、その泡が歡樂の涌くがまゝに、極度まで本能性の發展して居るのを云ふのだ。『セブルクラルノウフラジ』(空洞の破船)、これは溶岩などの洞穴中の響きと肉的破滅の機とを一緒

に捉へて來た感想で、泡は之を知つて居ながら、尙盛んにぶくぶく云つて居るが（泡を擬人法で見たから、原文に『バーク』〔垂涎する〕とあるが、その實、矢張り泡立つことだ）、破滅物中の最後に残つた物、乃ち『マーデゼイツ』〔抜かれたる帆柱〕までを取り去つてしまつた。この取り去られた帆柱の句は、泡の有する『痛ましき裸形』と相對して、最も力ある句ではないか？ 第三節で、或はこれは、何かアウト（高尚）なペルダシオン（ほろび）の怒り狂つた落ち度が、空しい影を残して、この『ラビウム』〔深淵または地獄〕となつたのだらう。第四節、『曳く髮の白き』は、泡立つ海と海妖の女性的魔力とを想像して居るので、本能性がわれを忘れた靈の如く消えて、『飽くまでも溺れ行きけん』も、その實消えたのではない、泡と同じく、われなる物は海妖の『フランカンファン』〔胎兒〕であつて、その寂しい心境内によく付いて居るのであると云ふのだ。僕が『女護海島』で歌つた南風に孕むといふ感想も、自然に之から浮んで來る様な氣がして、非常に愉快に讀めたのだ。

僕が佛語の智識では、この詩を譯するのは非常な骨折であつた。普通の語法に據つて居ないのは、僕等の新詩よりも尙ひどひか知れない。この様な詩は、讀む人によりて解釋が

違ふかも知れない（また違へても取れるだらう）から、豫め斷つて置く。今一つ『ルシーニユ』〔鶴〕といふ短曲を譯して見よう。これもなかく六ヶしいので、譯するのに、困難なことは困難であつた。

きよらの 美なる 日は、醉へる 羽振きに、
うち碎かん とすや 撃き 湖水を――
その 忘れの 面を 霜に 馴染むは、
飛びても これ 飛ばぬ 無色の 氷河。

(Le vierge, le vivace et le bel aujourd'hui

Va-t-il nous déchirer avec un coup d'aile ivre

Ce lac dur oublié que hante sous le givre

Le transparent glacier des vols qui n'ont pas fui ?)

偉大や、昨の鶴、それとし知れど、――

歌はぬ 爲めに——身を その 住まひ より
免るゝ 望み なし、嗟、寒き冬 の
實らぬ 倦じ あり、そが 照らす 時ぞ。

(Un cygne d'autrefois se souvient que c'est lui,
Magnifique; mais qui sans espoir se délivre
Pour n'avoir pas chanté la région où vivot
Quand du sterile hiver a resplendi Pennui.)

鳥とし 忍む 域に 負はせられたる
真白の もたえ こそ、頸、ふり拂へ、
然らじ、翼 捕る 國 の「威嚇」は。

(Tout son col secouera cette blanche agonie
Par l'espace infligée à l'oiseau qui le nie,

Mais non l'horreur du soleil le plumage est pris.)

無垢なる 美を こゝに 興ふる 御靈
輕侮の 夢を 着て 鶴は 冷やか、
身づから 現すなり——無益の 配所。

(L'autome qu'a ce lieu son pur éclat assigne,
Il s'immobilise ou songe froide de mépris
Que vêt parmi l'exile inutile le cygne.)

嚴寒の空、晴れて麗はしい今日だ。この日は『酔へる羽振き』を以つて、この『堅き湖水』をうち砕いて呉れるだらうか？長くウーブリエイ、忘れられて居た表面には『霜に』（スールギヅル）『馴染む』（アント、屢々往來する）無色透明の『グラシエ』（氷河）があつて、まだ『飛んだことのない飛躍』（原文）を持つて居る。第二節、白鳥は身づからその氷河だと知つては居るが、身をその境遇から免れさす望みのない物だ。『不毛の冬の倦んじ』（原文）

とは、形ある鳥の境遇を客観的に見たので、それが『アラスプランチ』(照らしたる)とは氷河といふ思ひ付きと相對して、愉快な感じを呼び起すではないか？ 第三節、鳥その物は好まないが境遇上止むを得ず受くる『アゴニイ』(もたえ)が『ブランシュ』(白い)といふは、よく表象派の用ゐる形容詞であつて、之を頸だけではふり拂ふが、根本の飛躍力は土地の『ローア』(威嚇)に捕らへられて居るから、第一節の『飛びてもこれ飛ばぬ』の意味を明にして居る。第四節、實に『ファントーム』(靈または幻像)としては、『無垢なるエクラ』(美または輝き)をアシーヌ(指定)するが、今のところ、白鳥が『輕侮の冷やかなる夢』(原文)に現じて居るのは、丁度罪なくして配所の月を見る様で、主観的には、『レクシイルイニユチイル』(無益の謫居)である。以上は詩人の境遇を歌つたもので、鶴の鳥は一種透明な光輝を放つて、その悲痛な状態から、靈か肉かの幻像界を實現して居るではないか？ 第二節の『歌はぬ爲めに』は、或は、マラルメ自身を辯解して居るのではあるまいかと思はれる。渠は一時まるでその詩を發表しなかつたので、口で云ふだけのことを實際に作り得ないのだと攻撃されたこともあるのだ。

この詩にしる、前詩にしる、かうなると、一種の深い心理學の様で、本當の詩と云へるか、どうだか分らない位である。

(六)

ジュエラールは一八五五年に、ギリエは一八八九年に、エルレイン、ランバウ、マラルメは一八九六、七、八年に死んでしまつた。所謂『フアンドシエクル』(世紀末)の時代に於て佛蘭西表象派の中堅となつて居たのは、最後の三名だが、今一人忘れてならないのは、一八八七年に二十七歳で早世したジュールラフォルグである。渠も近代不安の生活をよく體現して居た詩人で、その藝術は、シモンズに従へば、『神經の藝術』で、その詩の一脚一音に至るまでも作者自身の大膽が現はれて居るから、『その詩調と統一とは、『ゴレンに據れば、『音節的であるよりは、寧ろ、心靈的であつた。』ペルトランの後、ボードレイルに依つて創設された散文詩は、近代文藝の一様式となつて、マラルメも書いたし、ランバウも書いたが、このラフォルグも亦巧みなものであつたのだ。拾九世紀の末葉には、佛蘭西は諸主義

の爲めに惱まされて居た。ゾラ一流の自然主義は勿論、ボードレイルの悪魔主義やルコントドリイルの高踏主義もあつた。然しボードレイルにつき纏つて居た形式的宗教思想は、エルレインが之を打ち破り、ルコントドリイルの感想を云ひ切つてしまふ傾向は、マラルメが之を一掃してしまつたのである。兎に角、自然主義的表象主義に近いものが影響を及ぼしたことが最も多いのだ。表象専門派はたゞエルレインやマラルメの餘弊踏襲者流だ。

そこで、表象派の勢力が佛蘭西に認められる様になつたのは、一八八五年頃からであつて、その頃には、種々の小雑誌が亂出して居て、盛んに新語法、新熟語、古語復活、並に言葉の彫鑿、洗練、調和などを叫んで居たが、いづれも讀者の少いのと、資本金の不足とで倒れてしまつたのだ。そこへエルレインの第四詩集『ローマンヌサンパロール』(言葉なき歌)——これは、ランバウを携へて英國や自耳義を浮れて居た時の作——並にマラルメの第三著書『ラブレミヂエヌフォース』(牧神の午後)が出たので、こゝに初めて表象派の運動が一定の形を帯びて來たのである。ところで、序だから加へて見たい——小雑誌の亂出は、その當時、頭腦の堅いアングロサクソン人にも及んで、之を眞似して現はれたのに、

英國では、『エローブック』(黄表紙)、『ササザイ』(甘藍)、『ザドーム』(圓閣)などがあり。米國では、『ザチャブブック』(草紙)、『ザラーク』(雲雀)、『ザファイリスチン』(ファイリスチャ人)などがあつた。英の『ササザイ』はアーサーシモンズが關係して居たし、米の『ザラーク』は野口米二郎氏が編輯者の一人であつた。後者の雑誌などは、稀有の爲めに、今あれば一部八弗ぐらゐもするさうだ。かう云ふ雑誌は、もう、一二の外、なくなつてしまつたが、一時は米國だけで五百種も出たのだ。それも尤もなことであつて、詩人がその獨特を發揮し得る様になれば、そんな狭い範圍内で、費用の分擔までして引つ込んで居るにも及ばなからうし、また、わが國でもある様に、内輪のそねみ合などして、いちめられて居るにも及ばないからであらう。

兎に角、マラルメとエルレインとは、表象主義派の建物に於て、ゴレンの所謂『一對の礎石』であつた。エルレインは英國に行つて、困つたあげくに、シモンズの厄介になつて居たこともあつて、今度わが國の米國大使館へ書記官として來たホイラーといふアメリカ詩人も、その頃龍動で渠に面會したさうだが、實に漂泊と悲惨と病氣とが渠の境遇を包んで

居たに反して、マラルメの生涯は平穩無事であつたのだ。英國へ行つても、オックスフォ
 ルド大學の人々に頼まれて、前に擧げた『音樂と文字』といふ講演などをやつた。渠が超
 然として隱遁的態度を取り、その著を公にすることも少く、巴里の新聞紙上で時々盛んに
 なる争論にも、關與しなくなつても、新詩人一派の主領、發端者の位置を占めて居た。難
 解なのは、英國にもブラウニングの例があることで——或英國人が腦病で病院に這入つて
 居て、もう、直つたと云はれた頃、ブラウニングの初期の作を讀み、一向分らないので、
 醫者の言を疑ひ、友人にそれを讀ませて見ると、矢ッ張り分らない。それでは、自分の頭の
 悪いせいではなからうと云つて退院することに決めた。この話が世評にのぼつてから、ブ
 ラウニングの詩が有名になつたと同じ様な點が、マラルメにもある。然し、『マラルメを精
 密に解して呉れい』とは云はないが、然し渠を聽かないなら、それは諸君の落ち度、損失で
 あるだらう。渠は一大學の英語教師をして、文學的勞働以外に生活の道を立て、巴里市中
 の閑靜な町に住んで居たから、少しもあせることはしなかつた。且、生來、オルガンとバレ
 イ(踊)とを嗜好し、また、野口氏が太陽で云はれた通り、愉快な談話家であつたのはシモン

ズも云つてあつて、毎週、渠の所へ集つて、いろんな人がいろんな詩談をしたものだ。

談話は表象派末流の殊に好んでやつて居たもので——巴里の或珈琲店で毎日會談した事
 が此派の始まりである。初めはそこに集ふ者が、身づからヒドロバス(無意義の造語)と稱
 して居たが、ジャンモレアスやシャルルモリスなどが這入つてから、デカダンといふ非難の
 語をわざと標榜することになつた。間もなく、モレアスがサンボリスト(表象派)といふ
 語を發明し、またゾルレインが之を一八八五年に主張し、『バルナシャン派並に大抵のロマ
 ンチック派は、或意味に於て、表象を缺いて居た』と云つてから、同派の人々はこの名を
 以て知られることになつた。然し、同類中には、無能、無職——これはまだいゝが——無
 學文盲な青年が多かつたので、談ずるところは、多く關係のない先進者を頭から罵倒して
 自分等の未熟な意氣込みを示めしたり、またおのが崇拜するものなら、つまらない舉動を
 見ても、さすがは詩人だとか、なんとか云つて感服したり、とてもお話しにはならなかつ
 たらしい。だから仲間のうちで比較的に博學であつたモリスは、『この青年輩のうちで、宗
 教または哲學の教説を少しでも正確に知つて居るものは、甚だ少い。……數名はスเปน

サー、ミル、ショーペンハウエル、コムト、ダルキンから、僅かの術語を覚えて居た』と云つて居る。大抵はモレアスやマラルメから聞いた話で、天下の知識を學得したかの様に速断して居たらしい。たまたに自分等のことが巴里の新聞にでも載ると、その冷罵は讃められた程嬉しかったのだ。それがやがて威喝と手段とを以つて、諸新聞にかれ是れ云はす様になつたので、渠等の名聲は外國までも響き渡る事になつたが、木ッ葉武者は矢張り木ッ葉武者で、天才氣取りの懶け者等はどうかつてしまつたか、今はすべてその名も知れて居ない。

表象派の系統は、却つて早く死んだジェラールや非リエから傳つて来て、エルレインとマラルメとが最後の勝利者であつた。この二大詩人の作だけは、多少の取捨をすれば、僕の云ふ自然主義的表象詩の思想の境域に持つて來ることが出来るのである。第一、不必要なカトリカ趣味のあるのは、ロマンチック分子の混入して居るのであつて、餘程注意をして嚙み分けなければならぬところだし、また、この派の詩人を通じて、^{オビジビブル}visibility(可見物)と^{アンビジビブル}invisibility(不可見物)との二元的傾向がある。これが思索力不足の人々には、舊式の表象

主義に墮落する誘惑になるから、餘程危険である。僕等が便利の爲め物と心、肉と靈とを分けて云ふ時がある、その時の様ならかまはないが、それが一轉すると、淺薄な唯物主義にならないまでも、乾滅枯死の唯心主義にはなり易いのだ。ホイスマンズやメタリックが乃ちそれに落ちてしまつたことは、早稻田文學四月號に出した『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』に於て云つてある通りである。

(エルレインとマラルメとに關して、更らに材料を取り寄せて置いたから、他日また詳論するつもりである。)

明治四十年二月十日作、新小説掲載

メレジコウスキのトルストイ論を讀む

僕は全體トルストイは讀まず嫌ひであつた。渠をわが國に紹介した『國民之友』に、例の非戰論の書翰が載つた時は、僕も一時その説に動かされた結果、長篇の叙事詩で、非戰主義『市街戰』といふのを作つたこともあるが、それは發表せずに捨て、しまつた。それは、僕が信じて居た耶蘇教なるものは、却つて人の精神を殺してしまふものだと思つたからで——耶蘇教は、わが國の舊劇の様に、一定の型が出来て居て、その型に填るには、人の思想と感情とを不自然に矯めて行かなければならない、して、トルストイの博愛主義や非戰論は、この型を最も極端に引き緊めたに過ぎない。渠は偽善の骨頂に達して居るのだ。と、かう云ふ考が僕にはあつたが、これ迄渠を云爲するものは、孰れもこの方面を讚めそやして居るのだ。ところが、今度、丸で違つた方面を紹介して居る者に出會つた。それはメレジコウスキの『トルストイ、アズ、マン、アンド、アーチスト』である。

僕が近著『半獸主義』を校正して居る時、友人が之を見て、メレジコウスキのトルスト

イ論にも、僕の思想と似たものがあるから讀んで見よと忠告して呉れた。それで拙著が出来上ると、間もなく避暑旅行に出たので、借りて來たトルストイ論を氣が向くまゝに讀んで見たを幸ひ、たゞ感じたことを述べて見たいのである。

この書の最初の數章は、トルストイの人物を四方八方から觀察した人々の引用だらけであつて——この氣儘老爺の鼻屎から爪の垢までをほじくり出して、何とか、かんとか勿體をつける有様は、丸で第二のボスウエリズムで、冗長緩漫、到底、天才の筆とは合點が出来なかつた。且、トルストイが上には百姓の常服を着して居ても下には立派なシャツを着て、巴里第一等の香水をにははせて居る、之が一つのシムボルだと云ふが如き——尤も嗅覺美の問題から來て居るにしても、さう表象なるものを亂用されては困るではないか？そんなことを云へば、わが國最初のハイカラ黨の一人、故光妙寺三郎が、身にはほひのいゝ香水を絶やさないうで、藝者の出て居る席で、わが國固有の今様節を清吟したのは、なほ更ら表象的ところがあつた。然し、第一篇の七章位から第二篇に這入つては、論者もなかく馬鹿にならんことが分かつて來た。それで、トルストイを論ずるに、殆んど至る所、

之れと正反對のドストイェフスキを参照に持つて來てあるが、前者は靈までを肉化しようとしたし、後者は肉までを靈化しようとしたと云つてある。トルストイは現在と肉とに偏したが、ドストイェフスキは未來と靈とに傾いて居た。トルストイの作には、主人公も性格もないから、悲劇に必要な苦悶が出て居ないが、ドストイェフスキのには、希臘に起つた悲劇が成り立つて居た。現今の宗教家、偽善者が見て居るトルストイとしては、この比較は却つて異様に聽えやうが、論者は渠を「センス(官能)の人、半ば異教、半ば耶蘇教で、どちらも充分になつて居ない」と云つてある。但し、目の覺めない耶蘇教國では、異教と云へば、直ちに野蠻の意だ。然し、今日の歐洲文明の如く、何事も文弱になつて來た世には、野蠻は結構である。僕の『半獸主義』はこの方面を大いに主張したのだ。トルストイは人間を非難して、『神の姿』を、獸の姿に引き下だし、その肉感、疾病、出産、死亡などを、時によると、刻薄な程に精寫した。渠の肉感上の經驗は、何百年も生き長らへて、幾度も人間や獸類になつて見たかと思はれる程だ。例へば、初めて舞踏會に臨まうとする娘を、その筆は眞ッ裸にしてまで見せる。だから、ドストイェフスキの様に、肉體や動物性

から離れた靈性をよく描寫する事に出來ないが、自分の達し得られる範圍内、乃ち、純粹の自然人を描く點に於ては、論者に従ふと、世界の藝術家だ。別派の藝術では、以太利復興期の畫家や、希臘古代の彫刻家は、トルストイよりも更らに完全に肉體人を描いたが、渠の様に、自然人を寫して、驚くべき程眞理で、また赤裸々な者は、古今東西一人もないさうである。

之を見ても、トルストイは、宗教家輩の考へて居る様な人物とは違つて、別に餘程面白い所がある。然し、メレヅコウスキのは重にその創作(小説)の上から見て來たのであるが、今では、トルストイ自身はその作物を嫌忌して、自分で成して來た名を自分でうら消さうとして居る。之は面白い矛盾だ。第一、貧者に數コペクを與へようとした時、慈善とはそんな物でないと悟つて、全財産を棄捨しようとしたが、細君に故障を云はれてから、之れを全く細君に委してしまひ、自分の出版物は公衆の所有だから、版權を取らないといふ主義も、後には細君にうち破られて、それからすんすん財源を得て居る。どん百姓の友だと云ひながら、うはべばかりその様子をして、自分は立派な書齋に立て籠つて著作に餘

念がないと、細君はそばからその清書や校正をして居る。そこまでは面白いが、その極端暗愚な博愛論や非戦論を稱道するに至つては、かの内村氏が自分にも出来ない事を人に強いて、その言論で飯を食つて居ると或論者から云はれたと同じで、たゞ老いぼれ翁の放言であつて、——耶蘇教の型、乃ち、偽善を今一層極端に持つて行つたに過ぎないと、僕は思ふのである。若し渠がわが國に生れて、わが國純粹の教育を受けたなら、そんな馬鹿者にはならなかつたであらう。メレジコウスキは、現代の露國は、貴族から下民に至るまですべて宗教的思考を以つて苦悶して居ると云つたが、わが國でも亦各人各個、固有の想念と生命とを辿つて、悶絶苦悶して居るのである。特に日露戦争以來、その内的活動は烈しくなつた。たゞ、耶蘇教國の様に、淺薄な形式を衣服にして居ないだけだ。それに、徳富蘆花氏の様に、すでに文界の一部に名を得た人が、如何に宗教上の疑惑があるにしろ、わざ／＼ヤスナヤポリヤナ下りまで、トルストイ巡禮をするのは我國民に對する愚劣な反逆だ。然し、トルストイがえらからうが、なからうが、それは僕の論文の目的ではない。之から、論者メレジコウスキ其人の説を論じて見やう。トルストイの小説には、神よりも人、

人體よりも獸體を描いてあるので、官能の働きが敏活に現れて居るから、嗅覺などの問題が云つてある。トルストイは藝術を攻撃して居る。——之は例の博愛論的放言であつて、獸的も、若し僕の『半獸主義』の様に、日本的教養の結果から出て居るなら、藝術の眞意は知れただらうに。——だから、進んでデカゲン藝術を非常に罵倒して居るが、官能的描寫は、渠と同様、デカゲン派の好んでやるものだ。トルストイの小説は、ドストイエフスキのとは反對で、人物の性格が精神から見えて来る對話に重きを置かないで、寧ろその獸性からして靈性をも吸収してしまう官能的説明に、最も深い根據があると云はれる程ではないか？だから、その對話の所は殆んど看過する様にしても、その間に挿つて居る身體上の説明、刹那の歎聲や破笑、また沈黙などに、無限の意味が現はれて居るのだ。それも人間前、乃ち、自然人、獸の状態に分解してからの地だから、五官の力が非常に神秘的な物になつて居るのだ。

古代の希臘人や羅馬人は勿論、全く十八世紀の人々でも、トルストイ程には感覺が鋭敏でなかつたらう。プーシキンなら、たゞ接吻をしたと書く所を、トルストイでは、ソニ

アとロストフの場合の如き、接吻の感じに黒焦くろこげのコルクの臭ひを持つて來てある。これで假裝會で輕裝騎兵の附け鬚をして居る女の狀態が明確に受け取れる。また、馬蹄の響を透明に聽いたり、出た御馳走が人の顔つきを反映したり、人のけはひに圓感を興へたりするのは、神經の鈍い古典派から見れば、藝術の墮落、病的だと云ふに定つてゐるが、渠等なほはまだ深い官能的描寫がどれだけ人間の感想を強烈にするか知らないのだ。現今の心理學でさへ、既に、知情意の區別を不確實だと見爲す様になつて來た。五官の働きも、それが別々に働いた所で、肉と靈とにどれ程の價値があらう。古典派最古の詩聖ホメーロスは、原始の世界に組織を興へた大人物で、且、その作中の神にも人性があるし、人にもまた神性が備つて居る——換言すれば、詩聖は單純素朴の夢想中に、神人の合一を實現して居たのである。然し、『イリヤッド』や『オデシー』中の勇者は僕等よりも確かに感覺は痴鈍である。詩聖身づからも——古代の日本人が藍色の空を青空と云つた様に——海の色を形容するに青と黒藍とを混同した個處がある。然し、僕等の子孫になれば、僕等が十八九世紀の人に對する様に、僕等を神經痴鈍と罵つて、僕等の感覺にのほらかなかつたものを見たり、聽い

たり、嗅ぎつけたりする様になるであらう。官能の進化は確かに事實だが、然しそれが、人間の全體としては、論者の思ふ様に、完全な覺醒——乃ち、救濟——に達する道ではない。たゞ古代詩人の夢想を一層深刻にして、振おくべからざる獸性にまでも接觸して、別樣の夢を見るに過ぎないのである。僕の『半獸主義』で云つた通り、宇宙は到底不可解である、人生は極度まで神秘である。科學や哲學は、出山釋迦と同じくミイラのお化けで、けちりも靈活肉熱の趣きがない、世の覺醒者はすべて無意味の行者である。この感想をまとめて行くのが僕の論文の趣意だ。

トルストイは非常な孤獨癖があつて、而も例の現世的思想に閉ぢ籠つて居るので、死といふ物を恐れる事が強烈で、また深刻だ。その作物では、死の光が外部から生を照らして生の色と形とを分離させ、痴鈍にさせて、遂には物質上の原素に達してしまふ傾きがある。渠には人生は生と死との永久對抗だが、ドストイエフスキにはこれが永久の一體であつた。前者は、人生といふ家の内から、死を見るに現世の眼を以つてし、後者は靈外の眼を以つて、人生にのぞむに、その立ち場は現世の人には死と思はれた。人はどちらを取ら

か？使徒パウロ——之は耶蘇の教を狭小偏固にしたもの、隊長だが——人間の存在をアレキサンドリヤ學派の哲學を借りて來て、三級に分けた。物質的、心靈的、自然的ので、最後の等級は、前二者のつなぎであつて、肉が完うされて靈が始まる、さかひ目の瓢箪といふ状態で——之を精神物理学の語で云へば、物理精神的存在である。トルストイはこの物理精神的といふ靈肉煩悶の神秘界を、自然人に描寫した大家だ。そこでトルストイの様な思想が更らに墮落して行くと、論者に據ると、神より人、人より獸、獸より植物、植物から雲となつて、空に融けて、段々段々の静寂が最後の静寂に歸する。』之は、僕の所謂『自然即心靈』の行き方と同じで、表象としては、物が如何に變はつても、『然し、それでも無にはならない、而も生命の始めである。新天地の發出である。』

論者の云ふには、聖書にも『わが肉を食ひ、わが血を飲むものは永遠の生命を得』とあつて、肉體をそのまゝ、靈化するのが、矢張りトルストイの主旨だ。耶蘇は水を葡萄酒に、葡萄酒をまた血に變はらす力があつたと傳へられて居るが、耶蘇の虚偽なる精進退隱主義は、之と反對に、『血を葡萄酒に、葡萄酒を冷水に、神聖なる身體を身體なき神聖に、靈あ

る肉を肉なき靈に、肉體の復活を肉體の死滅に更へて』しまつた。『トルストイが人間に體を求めるのは、その獸體を神化する爲めだ。』然し、渠の神化力はその根底に於てまだ不足の點がある、之を補ふには、ドストイェフスキを持つて來ねばならない。ドストイェフスキの作物を見ると、人の性格は——トルストイの様に、原素に分解されるに反して——有機的個性の極端まで描かれ、暗憊たる動物根元から發展して、靈性の最終最高の發光點に達して居る。トルストイもドストイェフスキも共に刻薄な所があるらしいが、前者のは深刻で、後者のは熱刻である。『最も抽象的思想は最も實際的だ』とエマソンが云つたと同じ流儀で、論者は『最も抽象的思想は同時に亦最も熱烈だ』と云つてある。ドストイェフスキは——過去のロマンチック詩人等が、たとへば沙翁の『ハムレット』に於けるが如く、情熱は描寫する事が出來ても、心熱（知熱、意熱、情熱）を缺いて居たのとは違つて——燃ゆる思索力を以て其筆を走らしたらしい。僕の所謂『知力と意力との集中情化』をやつて居たのだ。ドストイェフスキの筆には、情熱の論理があるが、亦その論理に情熱があつた。つまり深く考へたから深く感じたので、この氷を火にした様な熱想（パッショネート）をト

ルストイの深刻なる苦痛に加へたなら、將來の世界的新宗教が出来るといふのである。現代程宗教心の喚發して居る時はない。たとへ老朽の、神學的又は形而上學的獨斷の覆面は、すべて智識の批判で引き破られてしまつたが、その獨斷の顛覆は、論者によると、更らに眞正なる宗教の可能を證明して居る。『宗教的、形而上學的夢想はその實在を失なつたが、おのづから、醒めて、夢想の様な實在になる』のだ。此間の波浪にたゞよつて苦しんだものが、或はニイチエの様に狂氣となり、トルストイの様に獸的となり、ワグネル、ベクリン、イブセン、その他すべてデカダン派の様に病的となつた。中世的又は古典的傳説に更らに何物かを加へて、之を神秘的な所へ持つて行つたに過ぎないドストイエフスキさへ、現代の活動に附隨して、空想的は乃ち宗教的だとも云ひ切つたのである。だから、深刻な自然主義や病的と云はれるデカダン思想は、現代人の生命に殆ど缺くべからざる物となつて居るのだ。自然主義も深くなると、たとへば空氣を壓迫して流動物としたと同様、その物は實際にないが、而も偽るべからざる實在である。之を病的とか、不健全とか云ふのは、云ふ人が却つてどこか不健全な個處を持つて居るからである。渠等が若し傳來の形式を棄て、赤裸々の勇氣を持つて來たら、病的や不健全はなくなつてしまふのだ。

そこで、論者によると、現代の歐洲人は三つの道に迷つて居る。第一は、此病根を脱して、元の神念を回復するのだが、それでは現今の苦悶が無意味に終る。第二の道は、もう仕方がないから、たゞ神を撲滅すると同時に、ニイチエの様に自分も狂ひ死んでしまふのだ。第三は、最終の的一致、大表象たる新宗教を建設するのだ。ドストイエフスキは、この第三道を充分自覺はして居なかつたが、謎語としては之を残して置いた。そこで先づ、藝術と宗教との問題だが——美といふ物は、奉事されるのを好きだが、また奉事するのも好きだ。我國の萬葉時代や、希臘のホメロス時代には、神人の差別觀が確然でなかつただけに、美の奉事、被奉事の問題は殆ど見えなかつた。然し、日吉神社に巫女をあげきりにしたり、アガメムノーンが娘イフィゲニヤを死せざる者に献じたりする考が起つてからは、藝術家は時々美を力あるもの、犠牲とした。わが國演劇の起原もさうだが、希臘の悲劇も初めは宗教上のお勤めであつた。劇場は半ば神殿であつた。羅馬人が神々をパンテオンや諸博物館に押し籠めてから、藝術と宗教との連鎖が絶えて、初めて美を説き出し、藝術の

爲めの藝術』乃ち、身づから獨立した藝術が起つた。中世のゴチク伽藍が一時また兩者をつないだが、以太利の文藝復興で、またこの連鎖は亡ぼされた。然し、實際は變形したので、當時のレオナードやミケランジェロは、藝術中に現在の宗教ではない、當來のを發表して居たのだ。渠等は人物があまり大き過ぎて、『藝術の爲めの藝術』範圍には這入り切れなかつた。然し、ラファエルになると、再び自分の小範圍に立て籠つて宗教の爲めではない、宗教としての藝術乃ち、『藝術の爲めの藝術』主義の勇將となつて居る。

今、トルストイとドストイエフスキとを見るに、二個の特性があつて、復興期の大導師等と接近して居る。第一、兩者の藝術は宗教と關聯して居るが、その宗教は現在のでなく當來のである。第二に、兩者はおのづから宗教として甘んずる純藝術の範圍以外に喰み出して居る。トルストイの缺點は、藝術家以上にならうとして、却つてそれ以下になつたこと。ドストイエフスキの弱所は、純美派を満足させないと同時に、また、その反對なる美利用主義者に刻薄な天才と見えることである。然し、トルストイには、まだ實現されないうが純藝術的よりも更らに深遠な、更らに宗教的な藝術主義の可能力が現はれて居るし、

ドストイエフスキにはまた、一新宗教が可なり實現されて居て、自分はその豫言者たる要地に立つて居る。

そこで、論者はかう思つて居るらしい。トルストイ側の肉想とドストイエフスキ側の靈想とは、極の兩端だから、前にも云つた僕の『自然即心靈』の行き方の様に、いつかめぐり會つて國民的大火を引き起すに相違ない。現代は、どの國民も、苟も眠つて居ない限りは、神の觀念が破れて、五里霧中に彷徨して居るのだ。露國でも、もう神の代人たるピーター大帝では満足が出来なくなつて、別に其典型を求めなければならなくなつた。この時に當つて、同じプーシキンから出た兩文豪が、各々別方面の新福音を宣傳したのだから、國人の意氣込みから云つても、論者が之を合一して、歐洲ばかりか、全世界に新局面を開かうとするのは當前なことだ。それで、ニイチエは『神があるとすれば、自分がその神でないと思つて居られようか』と云つたが、ドストイエフスキはその作中の虚無黨キリロフに云はせて、『神がないと認め、之れと同時に汝身づから神になつたと認めないのは、愚である、然らざれば、汝は必らず自殺するのだ』とある。この世界の進歩は、ゴッラから人

間、人間から神の撲滅に、それから人間神である。僕の半獸主義では宗教に對する考が違ふから、その代りに『悲痛の靈』となつて居る。兎に角、論者に據ると、露國最近の大文豪に依つて導き出される人間神教が、未來の世界教になる。トルストイとドストイエフスキとの一致燃焼を體現した露西亞人に於て、『人間神』は西洋諸國に、『神人』は初めて東洋に示され、二は即ち一となるといふのである。

メレヅコウスキの藝術宗教論は、大體さういふのであつて、トルストイ巡禮をする人や耶蘇教より脱し掛けの人々では、之を讀んで有難なみだに暮れるだらうが、僕等は甚だ不徹底だと感ずるのだ。第一、不愉快なのは、東洋には先づ神人の方を示めすとある。『神人』とは耶蘇の事であるから、僕等には直ちに『人間神』——耶蘇教の筆法で、再來の耶蘇——は分らないといふ意だ。こゝになると、歐洲人には、異教徒は野蠻人だといふ頭腦があるのだから、宗教問題は人類問題になり、進んで亦國家存立の問題となる。腰の弱い政府は、日露戦争の間に、外國の同情を得ようとして、わが國が耶蘇國であるかの様な態度や説明をした。これは、淺學暗愚な政治家等の一政略と見て看過してもいいが、國民は

歐洲人の偏見に恐れないうで、益々固有の熱烈な感想を詩歌や評論で發表して、外教徒の上に出るべき時期に達して居るのである。外國文に翻譯されないのをい、鹽に、由断して居るべき時ではない。人間神教の如き、その精神は、わが國の歴史と現状とに照らして、却つて僕等から稱道する便利と自由とがあるのだ。だから、肉靈合一の人間神といふ思想は、僕にも——この書を讀めと忠告して呉れた友人の言の如く——面白く受取れたが、メレヅコウスキはまだ舊來のユンゲンション、形式を脱して居ない。わが國では、既に破棄した『彌陀の再來』といふ型に落ちて居る。わが國に宗教がないと云ふのは間違ひで、僕等が宗教の型を打破して、その束縛を脱したのが、歐洲人よりも更らに更らに早かつたのである。論者は肉靈の合一を云つて居ながら、まだ死と生とを分けて居る、苦痛と安樂とを離して居る、藝術と宗教とを別物に見て居る。だから、苦痛を苦痛として描き通すトルストイには、悲劇の要素がないが、個性の解脱を教ゆるドストイエフスキには、却つて眞正の悲劇を成立して居ると云つた。解脱が出来たと思はせるのが既に滑稽だとは、僕が『半獸主義』中の新悲劇論で云つて置いたが、實に人間は愚か、草木國土、一切救濟の道はない。

〇〇〇〇
のである。

メレジコウスキの様な思想を以つて居る者は、誰れでも、藝術を小い型に入れてしまふと同時に、宗教をも亦別な型に入れなければ満足出来ないので。新宗教の建設は差支へなからうが、それが何の役に立つのか？ 釋迦の哲學、耶蘇の宗教、マホメトの政略、どれもこれもその組織の出来た時は死んで居たのではないか？ 幅の狭い錦につままれて生命のないよりは、襤褸にくるまつてももがき苦しんで居る方がいゝ。どうせ人間神が出現しても不完全は不完全である。キリロフの様に、それでは『自殺するのだ』といふものは自殺するがいゝ。『大苦痛のみが心靈最後の解放者だ』とニイチエが云つたのは、それで安樂淨土に行けるといふ譯ではない。死んだと思ふのは、別な表象になつて、同じ苦みをするのだとは、『半獸主義』の思想である。どうせ、人生の最終最始は、渾沌でないか？ その終始をつないで居る状態も渾沌ではないか？ この間に活動するものは、メレジコウスキの所謂『人間神』から、耶蘇教傳來の形式を取り去つて、解脱を求めず、救済を呼ばず、轉々苦悶に堪ゆる人間、乃ち、『悲痛の靈』でなければならぬ。解脱は自分以外に何物かを見認め

て居るのだ、自分が神なら、救済を求める譯はない。久遠の生命は苦痛で、最も個人的のものである。宗教又は哲學に組織する餘地を許さない。

この境地は、宗教でも哲學でも達し得られないから、僕は最も自由な藝術を取るのだ。然し、僕は『藝術の爲めの藝術』主義は採用しない。半獸主義から出る自然主義は、一言で云へば、悲痛の靈を體現すればいゝのだ。トルストイも、ドストイエフスキも、この點に於ては、刻薄だと云はれる程、自然主義であるらしい。メレジコウスキがこの兩者を捕へて、世界教を云爲することが出来るだけ、露國も大きい所がある。わが國の過去と現在とを探して、國民性の喚發から考へて、それだけの材料が又ないことはあるまい。恐らく現代に於て評論の筆を揮ふものが覺醒して居ないのは、第一、外國ばかりを標準にして、自國の事情を輕視するのと、メレジコウスキの如く頭腦が該博、明晰でないのと、自分でまだ充分國民性に觸れて居ないので、今一つは刺撃がないからであらう。

然し、さう云つた所で、メレジコウスキのこの書に現はした宗教論を斬新だとも、結構だとも讚める譯ではない。且、最初に感じた冗漫な點が、終りに至るまで抜けなかつた

のは、まだ立派な天才の筆とは云へないのである。もつとも、これから直ぐ同じ人の『レオナード』を讀むつもりだから、それに移つて見れば、どう考が變はるか、それは今から受け合はれないのである。(明治三十九年七月三十日作、早稻田文學掲載)

藤岡博士の『新體詩論』

二三年前、殆ど同時に、坪内、田中、芳賀三博士の新體詩に關する談片が出たので、僕は直ぐ之を批評して見たが、その評論は僕の『半獸主義』の附録に編入してある。それには世の識者等の『尙詳しく詩論に接する時の來たるのを楽しんで居る』と書いて置いた。その後、また新體詩の議論を見たのは、何かの雑誌に出た夏目漱石氏の談片の外には、今月の帝國文學に載つて居る、藤岡博士の『新體詩論』である。この間に、中央公論は新體詩の價値に就て諸方に質問を發し、僕も之に答へた一人であつたが、詩人側の眞面目な答への外は一も見るに足るものはなかつた。わが國の詩は乳臭い青年ばかりが作つて居るかの様に思つて居る者もあつたし、自分等のやつて居る仕事ばかりが——然も根ツから下らんに——えらいことの様澄まして居るものもあつた。兎に角、現今多少の見識を以つて、廣い意味の文學に關係のあるもの等が、詩といふ物を、どんな種類のに限らず、深く味はふだけの素養と趣味とを以つて居ないのは明かである。また、實際、今の詩を讀んで居な

いのだ。そんな人に向つて、専門家が議論をするのは、大人げない様だが、餘り黙つて居るのも、意氣地なしばかりが揃つて居る様に思はれるだらうから、詩界の進歩の爲めに、云つて置きたいこともある。

夏目氏のは、今よく覺えて居ないが、新體詩は見ないが、つまらないと云ふのであつた。『見ない』と斷言出来るなら、初めから何も云はないで、お得意のだらうとした寫生文の小説を書いて、世間を茶化して居る方がお爲めになつたのだ。然もその道を取らないで、俳句でもひねくる様に、出たら目の評言を下だし、その上、詩人か何だか知れて居なかつた人の作例を擧げて、まア、こんな物だとは失禮極まるではないか？ 僕等新體詩人は、氏の學堂で教へて居る様な人々ばかりだと思つたら間違つて居る。僕が氏の所に行く人からあの議論は何だとなじつて貰つたら、なアに出たら目をしやべつたのだとは、餘り不用意な傳言ではないか？ 僕はその時何か書かうと思つたが、それを控へて居たのは、けふの様な折を待つて居たのである。

藤岡博士のは、その文章にもなかく苦心してある跡が見えて、多少用意のあつたこと

が察しられる。十頁餘りの論文、随分花やかに延びては居るが、要するに、『現代は過渡の時代なり、社會の理想は定まらず、趣味に統一なく、文體に規律なき時』であるので、『感情を専らとし、格調に生くる詩歌は、いかにしてかその物質的事業に伴うて、駸々として進歩すべき』と云ふにあるらしい。わが國現今の情態は、世界文化の渦中に投じ、時勢の變化が急激であるので、趣味に一定の標準がないのは新聞の記事を見ても知れるし、國民理想の歸するところがないので、懷疑は爲たり顔にその暴威を逞くし、その上『現代は餘りに快樂多く、希望に満ち』て居るので、『空想の花は現實の嵐に荒されて開くに由なく、神祕の夢は繁劇の晝の務に忘れられて、思考の外に置かる』『平家物語の口調だ。』社會は現代を體現する青年の感情に同情しない。こんなことを頻りに云つて居られるが、これは詩人に邪魔になるところか、却つて乘すべき機會を與へることが多いのである。

感懷を詠じようとして出て來たものが、こんな形勢だから、その術を試みても、期待の結果を得ないので、頻々として他の方面に轉ずるのを見て、博士は何か重大事件の様に思つて居られるのが、これは當り前のことで、意志の弱い、手腕のない文人詩客が、それに

相當な職業を見付けるのに過ぎない。そんなものが最も純粹純潔な詩界に住し得られよう筈はないのだ。そんなものには宗教と哲學とを教へて、俗務に安んせしめる必要があらう。苟も詩人として立つて來たものには、古來の傳習的思想は壞れても差支へはない、またその方が却つて便利なのだ。一定の標準がなければ困るのは、俗吏と宗教信者と獨立心のない學者との事であつて、詩人は標準その物を與へてかゝるのである。十九世紀の文化が世界を通じて詩歌の運命を下り阪に向けたとは、たゞ外部の状態であつて、詩界その物は、範圍を縮小したには相違なからうが、いよゝ深遠に、ますます熱烈になつて來たのだ。物質的煩悶も、極端な個人主義も、『詩歌の進路を妨げ』ないで、却つて自家藥籠中の物になつて居る。ロセチ一派の詩人はまだまごついて居た點もあつたにしろ、エルレインやマラルメの佛蘭西表象派になると、現代の悲運(或は幸運)を利用して、心理的詩歌の凱歌を奏して居るではないか？わが國の現代詩人中にも、決して之に劣らない用意をして居るものがあるのだ。決して『精緻の分析を許すところの小説か、客觀の描寫を用ふる劇詩』が現代の繁劇な存在に堪へるばかりではない。博士は自家の狹隘な標準に照らして、叙情詩

人の天職を規定しようとするのである。

第一、『叙情詩は概するに普遍性の美を直寫するに適すれども、衆に外れ世と伴はざる特性を描くが如きは、その能くするところにあらず』とは、事實に相違して居るではないか？博士は叙情の情といふことに拘泥して居るらしい。『詩歌は……唯感情をその對象とするのみ、智識の一分も水晶の上の塵とは、概括的分類を好む美學者や、陳腐な和歌をひねくつて居る人々には、成る程尤もな解釋であらう。然し近代の詩歌(博士もその一部を論じたのだ)は、イブセンやメタリンクの劇、ホイスマンズダンヌンチオ、ゴルキイの小説と共に、博士の所謂現代世相の『傾向を思索し、その心裡を分析して、精緻の筆を揮はゞ、特別な病的情態も、紙上に活躍すべき』様になつて居るので、たゞに情意ばかりではない、智力までも燃焼流和させようと努めて居るのである。エルレインの感覺は熱鐵の様に燃えて流れて居たし、マラルメの理性は熱石の如く焼けて赤くなつて居た。自然主義的表象派の傾向は、すべて衆に外れもしようし、世の進歩するまでまどろっこしくも待つて居られない。かういふ詩人の作は『説明を加ふれば散文となり、加へざれば謎語となる』時

があるのは、珍らしくない。この見地と趣味とに達し得ないものだが、如何に不可解を叫んでも、どうせ之を解する頭脳と神経とを持つて居ない時勢後れの人々だから、僕等は決して齒牙に懸ける必要はないのである。博士は現代詩人の立つて居る境遇を而も外部から論じたのであつて、こんな時代にも奮勵勇起その生命を豊富に吸収して居る、詩人の作物の内容を云爲したものでないことが知れよう。博士の言を借りて云へば「趣味の缺けたる人に詩歌は解すべからず」否、趣味はあつても、その程度の低い人には、進歩した詩歌は到底解し得らるべきものでない。

次に『既に哲學なく、宗教なし、かゝるところにまたいかなる詩歌があるべき』と云はれて居る。哲學や、宗教は、例の概括的哲學者に従つた博士の分類に、ると、重に知力や意志に基づいて居るのだから、純感情を主張する前項の引用とは、多少衝突して居る様だが、文學歴史の専門家に向つて、そんな鹿つめらしいあげ足取りの議論は省略することゝして、博士は宗教や哲學があつて、初めて詩歌を導くものと思つて居られるらしい。この點は一言打破して置かなければならない。外國宣教師が、傳道會社からその借家賃を拂つ

て貰ふ西洋建住家のガラス窓から、日本の状態を見て、之に自家傳習の教理を當て填めようとすると同様、時代の真相に觸れたこともなくつて、高見の見物的に歌ひ出した、これまでの、穩かな、平凡な和歌俳句などを連想して居るなら、純感情的といふのは、最も奇麗で、最も上品な作風に思はれるだらう。然し、僕には、之と同時に、かういふ考への歌讀みや畫工の『あなたは學者、あなたは御出家、私共は何も存じませんので（その辯平凡な歌や畫を無上と知る）かういふ方々のお話を聴くのは、大變爲めになります』底の口吻が連想される。一言で云へば、クラシク主義の文學が博士の腦髓に固着して居るのである。短歌がたつた三十一文字で、誰れにでも出來易かつたので、この種の主義を以つて文名を知られたものは、古今人數の上から、外國よりもわが國の歌人の方が多からう。雨後の竹の子の様に、たゞ多數といふデモクラト的勢力に依つて、僕等同胞の趣味がその發達を壓へられて居るとは少々どころではないのである。

西行や景樹を讀んで、アルツアルスやテニスンに行け——クラシク趣味もそこまで發展すれば、もう、充分ではないか？アルツアルスはその傳習の神や不死の觀念を木の葉や雲

らうか？ 理性的保證が附いて健全に見える趣味は、之を古典に求めるがい。その古典といふのも時代の苦が附くに從つて、研究家が一定の型に填めて解釋する様になつたのであつて——さうなつた時は、もう、『古き衣』である。之を着て立たうとするクラシク主義は、文學歴史研究家の片手間に成つた詩歌によく出て来る奴で、わが國で例ふれば眞淵や宣長の文學的方面、悪く云へば因循姑息、よく云つても、小成に安んじた商家の御隠居のお目出たさ加減である。クラシクなる語には、多少の新らしい解釋を試みたもの（たとへばニューマンやマシウアーノルド）がないではないが、どうせ自然主義とは相容れない退歩的傾向であるから、苟も清新と敏感と生命とを尊ぶ詩人に取りては、折衷を許さない鐵槌を以つて、之をうち碎かなければならない。英國古典中の一大遺物『失樂園』——これが出來た當時、政治上宗教上にまだ勢力が残つて居た清教徒的理想と趣味とにすら（だから反對黨の社會には尙更ら）本統には分らなかつた程非クラシク、博士の所謂不健全であつたが、それさへ餘り退歩的傾向があつたので、今は殆ど廢れてしまつた。プラトーン、シエキスピヤ、ゲーテなどをよく振り廻してあるエマソンの全集にすら、ミルトンの名はたつた一二ヶ處しか出て居ない。不健全であるからではない、その本質が餘りクラシクだからだ。

博士は云はれた、『詩歌は唯健全なる趣味の標準の定まれる時にのみ榮ゆべし』と。成る程デモクラト黨の云ひさうな言葉だ。『花や紅葉に對する從來の形容は、陳腐の一言に斥けられ、莖や百合など代りて用ひらるれども、これらはいかなる明確の印象具體の聯想を世人に與ふるか、作者も讀者と共に言外の感興の淺きに慊焉たらざるを得ざらん』と。博士は僕等の主義どころか、まだ、素養の薄弱なものが乗り氣になつて居る、ロマンチックな趣味さへ解することが出來なからう。よしんば之を尤もの事としても、尙博士身づから明確でない爲めに迷つて居る星や莖の時代は、僕等には既に一時期を劃してしまつたのである。之を見ても、世人一般の趣味や理想の發達を待つ甲斐のないのが分らうではないか？ 僕等は時々刻々の進歩的活動を詩歌に體現して行くのである。趣味も理想も、此活動の渦中に一緒に鍛鍊されて居るのだ。この兩者の指導——と云はれ、ば——は別に他から受て来る必要はない。叙情詩の眞價は、乃ち、こゝにあるのだ。厭な星莖派の名を以つて、漸く現代

一般の識者無識者に、新體詩なる物が知られたと同じ様に、現今の僕等の實際の趣味と理想と内容とが、一般に解せられる標準を一定する時が来るだらう。して、その標準に據つて歌ふものが歌ひ、味はふものが味ふのは、僕等の苦心が開いた道を行くので、極平易であるから、詩歌の産出と觀賞とは盛んになるだらう。之を文學史上から見れば、その表面は面白い形勢だが、然し、この『榮ゆる』のは僕等の詩歌の形骸であつて、常識的には流行しようが、退歩的傾向のクラシク趣味になつてしまふから、僕等の詩歌——真正の叙情詩——その物の死である。博士はこの意味に於ても尙『健全』といふ語を澄まして使ふつもりだらうか？『趣味の固定はやがて沈滞を促がし、典型の暴君われは顔に壓制を逞しくして、後進者の摸擬を迫る』維新以前の文藝の宿弊を知つて居ながら、博士の頭腦はこゝにも文學歴史家の頭腦に過ぎない。その平安文學史も、さぞ、テインの英文學史の様に、數百貫目の大轉石に壓殺されて、その平垣になつた表面では、特色ある天才が泣いて居るだらう。

博士は新詩の振興しない理由を二つ挙げられた。現代趣味の尨雜、辭句用語の紛亂。第一のは、クラシク風が盛んにならない理由であつて、既に僕の言で分る通り、寧ろ退

歩を望んで居られるのだ。第二の理由に『辭句に規律なく、用語の雅俗を過まること』は規律があつても古風な行き方を避け、雅俗を過まるのではない、新らしい語をも使用しなければならぬ様になつて來たのである。之れがいかないなら、博士の今度の文章も——無規律、雅俗混合であるから——いけない譯になる。雜駁な文章でさへ其必要を感じて來たなら、之を感じる心狀に最も近く觸れなければならない詩歌には、猶更らることではないか？詩歌は上品にしろといふ意が這入つて居るのだらうが、最近心理體の詩歌には、その題材に姦通や、殺人や、賤業婦をまでも取ることがあるから、その用語などもわざ／＼それ相應なのを撰擇する位だ。雅なのがあるのは、また雅な點の這入るべき個所だからである『七七、五五、八七等の句、六行、八行等の章など、作家が勝手に試みざるなしと雖も、いまだ一般に世に許されたるものあるを見ず』とあるが、作家が自分で實例を示す外誰れが許す権利があらう？

それに付いて思ひ出すのは、度々、御歌會詠進撰歌を非難する舊歌人、海上胤平氏が昨日また諷刺に出された議論である。『松かさと言ふも俗語なるべし、雅言にあらざれば我國の

正しき歌とは云へからず』とか、『としく』とあるは俗調なり、茲に年毎にと云ふべし』とか、『歌の詞は……古へより定まれる詞あり』とか、博士もおしまひにはこんなみじめなことになるてしまひはしないかと、僕は陰ながら心配して居るのだ。『天才は時勢を改造す。かれは……直ちに自家の趣味を立て、文體を定むれば、社會はその膝下に伏して、一家の風はやがて社會の風となる』と云つたり、『新體詩の必要と價值とは改めて説くまでもなし、これを斥くるは、明治の時代を斥くるなり、これを呪ふは文學を呪ふなり』と云つたり、なか／＼分つて居る様な言を立てられたが、夏目氏の胡麻化し口實と同様、矢張り、『今大家と稱せらるゝ人、特色ありと傳へらるゝ人の作品を一々通讀せず』(實は多少通讀してか知れない)と逃げて居る。通讀したとて、あの論の行き方では、分らないのも尤である。博士などは、まア、僕等の事業が終つて、例の歴殺的筆法で、明治文學史を編み得るまでは、官學的に豊富な材料が得られる西行論でもして、弱い者いぢめをして居る方がよからうと思はれる。僕の議論の不言の部分は、今度早稻田文學に出る『日本古代思想より表象主義を論ず』を見て貰ひたい。

僕は文學博士大塚保治氏の『日本文明の將來』(哲學雜誌掲載)の演説を見て、哲學(者と

云はず) 研究家等の思索力はまだ／＼こなれて居ないのが、益々感じられた。こゝ暫くはまだ日本の人物らしいものは、學問の上から、法學界、醫學界の専有であらう。實業主義の道德化といふなど、尤もらしいところはあるが、その全體が淺薄で、不斷の用意の足りないものである。それから見ると、藤岡博士の如きは、その専門上材料と實例とは、居ながらにして集まる根據を以つて居るのだから、その頭腦を清新にして、外國人などの筆法を超脱し、更らに古風な傳習を破碎し、早く日本獨特の史見を開いたらよからうではないか？ 詩人等の意氣込みは既に外國の潮流以上を行かうとして居るのである。そこへ行くと大塚氏にしろ、夏目氏にしろ、藤岡氏にしろ、外國を見て來たのが、却つて駁々として進む日本の文明に後れて居る所以だ。

終りに望んで一言して置く。『新しい酒は新しい袋』だ。僕等は必らずしも薄弱な「藝術の爲めの藝術」主義を取るのではない、然し、哲學や宗教の爲めの詩歌は歌はないのだ。架空の理想や愚昧な信仰を打破して、更らに深くわが國語を自然と神經との根底に結びつけるのである。(明治四十年二月、讀賣新聞)

自然主義的表象詩論

僕は帝國大學には關係がない。然し若し強いて關係を付けると、大學出の人々に依つて建設されて居る哲學會の一員である。そこから毎月發行される哲學雜誌は、それが哲學會雜誌と云はれて、四六形の薄ッぺらなものであつた、ずつと古い號からして讀んで居た。また、諸君の文學會から發刊される帝國文學も、初號からして見て居たものである。その帝國文學の出る帝國文學會の大會席上に於て、兎も角も演説をすることになつたのは、僕の光榮とするところである。

一二日前、小山内薫君からお手紙が來て、藤岡博士も御出席だから、新體詩の話を用意して來て呉れるとのことであつたが、それが演説をしろといふのか、または博士に會つた折、自然に、先日僕が讀賣新聞で博士の新體詩論を駁撃した、その餘談があるだらうから、その覺悟をして來いと云ふのか、そこらの意味が分らなかつたので、至急ハガキで問ひ合せると、今日丁度宅を出ようとする時に、演説を頼むといふ電報が來た。多少用意はし

て置いたし、近頃は文章や演説で以つて新體詩論をする機會が多いので、新體詩論の一手販賣の様に思はれて居るついでだから、暫く諸君の清聽を煩はして、これでもう其の方の商賣はやめに致すつもりである。たゞ藤岡博士が御出席になつて居られないのを残念に思ふ。

僕は新體詩の『新體』だけは取つてしまひたい。『詩』で充分なのである。以前は井上巽軒博士などは國詩と云ふがいいと云はれたが、これは外國の詩に對して云ふ時には最も適當な名稱であらう。たゞ困るのは、詩に對して舊思想を懷いて居る人々があるので——藤岡博士などはその代表者であるが——さう云ふ人に向つては、たゞ詩と云ふよりも、まだ新の字を加へて、『新詩』と云つて區別する必要があるだらう。そこで、この新詩に反對——とまでは行かないまでも 冷遇——するものが多い。これは、僕等は刊行物で逢遇するのは勿論、これまで世の所謂識者等の坐談に於てよく聽かされて、もう僕等の耳は蝸の様になつて居るのだ。さういふ反對または冷遇の意見——寧ろ無意見——を研究して、その理由のあるところを総合して見ると、三つばかりの根據がある。第一に實利主義からの反對である。わが國ほど詩人の多い國はない、故ハーン氏もひやかしたが、これは本當に事實

である。飛び跳ねるお嬢さんであれ、苦もない良家の細君であれ、漸くにきびの附き出した男子であれ、學者、番頭、床屋の主人に至るまでが、昔から短歌や俳句をひねくつて居る。更らに、外國で云へば羅旬詩に當る漢詩は、暇のあるお役人ともまでが稽古して居るのだ。つまらないことは分り切つて居るではないか？この習慣は現代の青年にも及んで居て、何の苦悶も修養も經たことのないものでも、字足を揃へて珍らしい言葉を並べると、直ぐ立派な詩が出来たつもりになる。さういふ青年には、學校でも落第すると、それが乃ち社會の迫害である。小便臭い娘ツ子と鳥渡喧嘩でもすると、それが直ぐ失戀である。詩才と詩的閱歷のないものが詩を作るのは、外國では之を最も耻づべきことにして居る程社會が進歩して居るが、わが國ではまだドゲル(拙詩)を作つて、而も得意がるものは諸方面に満ち満ちて居る。自分の娘や子息が詩才のない詩人となつて、満足して居るのを見れば、『詩を作るより田を作れ』のお箱を出すのは、實利主義の老爺としてさもあるべき忠告であらう。然し之を以つて僕等規せんとするのは、詩人の苦心と意氣と影響との如何なるものであるかを知らない嘆語である。

第二に、文學玩弄主義の反對だ。舊來の短歌や俳句の様な出鱈目——は語弊があるが、つまり餘り詩的良心と自覺とがない作風に馴れて居て、さういふのが詩歌だと思つてゐるものが多い。生命ある詩人としての奮發はしないで、たゞこれまで傳つて來た用語と思想とを以つて、人に面白く讀める様に云ひまはすことを骨折る。さういふ詩人の必らず訴へるのは感情である。それも煮え切つて居るのならいゝが、いつも煮え切れない感情だ。歌に讀み入れる感情であつて、詩人その物を體現する感情ではない。兎角すべての物を人工的に區別する哲學者の編み出した審美學なるものにも、かういふ種類の感情をいい氣になつて材料にして居るのだから、眞正の詩人から見ると、下らん學説だと云はなければならぬ。充分腕を振へば振ふことが出来る長大な詩形のある外國でさへ、そんな學説に迷はされる傾きがあるのだから、わが國の歌人俳人の様に、たわいのない三十一文字や十七字の小詩形をいぢくり慣れて居ると、知らず識らず傳習的感情——學者の所謂美の根據——に満足して、徒らに文學門外漢の玩弄物になつてしまふのを悟らない馬鹿者が多いのは、尤もなことであるのだらう。之をよしとする作者や論者に限つて、民謠や端唄の様な詩が欲し

いと要求する。成る程民謡や端唄は感情が流露して居て、クラシクな短歌などよりも更らに面白いが、渠等はさういふものばかりを詩と心得て居るのだ。山路愛山氏が曾て『坂は照るく、鈴鹿は曇る』の例を擧げて、これでなければならぬ様なことを云はれたし、大槻氏は中央公論の都々一論で、老人に相當な酔ひがめぐつて居たのか、呂律のまはらない都々一讀をやられた。かういふ説の根底には、藝術を玩弄視する心持ちが籠つて居るので、詩を教育の用に供するダイダクチックポエト（教訓詩人）に比べて、此の種の論者はいい取り組みである。僕等は重々承知の上、渠等のお讃めを避けて居るのだ。

第三に、時代の相違から来る反對である。新體詩は味はつて見ようと努めても、一向に分らないと云ふ人々がある。これは文學玩弄主義者のうちで、多少新詩に同情を持つてゐるものに多い。自分は世の識者でもあり、また文學趣味を解して居るから、若し理解出来る詩なら、世人よりもよく分る筈だのと思つて、讀んで見ても、語法が違つて居る、云ひまはしがひねくれてゐる、期待する意味が出て來ない。外國詩でさへそんなことはないのと思ひ出す。それでは渠等の標準とするその外國詩はどんなものと尋ねて見ると、ロ

ングフエロウやラルヅラルスやユゴ、甘く行つてゲータ、シエキスビヤなど、すべて一種舊式の型に依つて解釋出來る詩人ので、そんな詩にはクラシクな西行や芭蕉を豫期して讀むことが出來よう。然しゼルレインやマラルメ、ロセチヤスキンパンなどになると、矢張り僕等のが分らない様に分らないのだ。その分らないのは、何も學識が足りないのでもなく、文學趣味がない譯でもない。僕等の發表する新思想と新趣味とが分らないのだ。僕は藤岡博士を攻撃したが、これは博士ばかりに當つたのではない、惰眠の覺めないすべてのクラシク論者に當つたのだ。渠等自身の愚鈍な感覺は棚に上げて置いて、僕等に朦朧呼ばはりをするのは、餘程蟲のいゝ話である。かうなると、もう、時代の相違であつて――舊思想と新思想との入れ變り、舊人と新人との更替である。詩は最も靈活鋭敏なものであるから、萬事に先立つて、舊時代の死と新時代の出産とを感じ得てゐるので、詩人が世に對する地位は預言者の地位であるのだ。

今、時代變遷の例を英國の詩に照らして考へて見給へ。拾八世紀の初期には、ジエームスタムソンの『四季の歌』の様なもの歓迎された。あの花の匂ひがいゝ、この果物は味が

ある、あの山の紅葉は赤い絹の様だ、この川には甘さうな魚が住んで居るといふ工合に——これはわが國でも、現在こんな風な短歌を讀んで喜んで居るものがあるが——その自然に對する興味はたゞ表面的官能の働きに過ぎなかつた。それが拾九世紀の初めになつて、ヲルヅアルスの様な自然觀でなければ満足出来なくなつた。虹を見て靈魂の不死を歌つたり、木の葉のそよぐに神の聲を聴いたり、自然の觀かたが餘程變つて來た。然し渠の宗敎的傾向は、豊富な自然を貧弱な抽象觀念の犠牲にしてしまつたので、キイツやロセチが出て、再び官能的方面を開拓した。だが、タムソンの見た花鳥風月とは違つて、自然は詩人の神經に溶入つて、そこに思想と融和する様な風になつた。殊にロセチの如きには、佛蘭西（ポリスト 表象派）に似てふこゝが出来て、淫逸と奴隷の念とが互に似た様な特色があつた。バイロンは人物として面白いが、その詩は殆ど自覺がないし、テニスンの作は流暢で、奇麗で、上品であつたから、桂冠詩人——わが國では、御歌所などの詩人——には最も適當だが、多く嫁入り前の娘が愛讀して、是れが一たび結婚して多少世の辛酸を嘗めて來ると、厭になつた。といふ當時の事實を見ても分る通り、到底深い自然と人間とを描く

ことが出来なかつたのだ。今日の様に進歩した時代には、もう、ヲルヅアルスもバイロンもテニスンも大したものではなくなつた。英國現代の詩界では、ロセチやボードレイルの流を汲んで居るスキンパン、それから大いにサンボリストを以つて標榜するエーツやシモンズの傾向が、最も新しいのであらう。

佛蘭西では、拾九世紀の後半から、殆ど時を同じうして種々の主義が出て來た。ゾラの自然主義は云ふまでもないが、詩界ではルコントドリイルの虛無主義、ボードレイルの惡魔主義、エルレインやマラルメの表象主義、メタリンクの神秘主義、或はバルナシヤン高踏派と云ひ、或はデカダン派と云ひ、或はマジ派と云ひ、それがまた英國に及んでオスカ一ワイルドのエスチート（耽美派）ともなつた。耽美主義はルコントドリイルやボードレイルやの自然を侮蔑する詩風を英國に發展させたが、佛蘭西の表象派は、ボードレイルが官能と思想とをその深い根底に於て同一視した方面——これは僕の『半獸主義』の行き方だ——を取つて進み、ルコントドリイルの高踏派並にその他のロマンチック派には表象（ジンボル）と云ふ程の物が無い、また考へを淺薄に云ひ切つてしまふ弊があると稱して、サジエ

スチオン乃ち暗示の必要なことを唱へた。この暗示主義、表象主義の詩などは、もがいてもがいて、もがいたあげくに出来たものであるから、それだけの閱歴を持つて居る、また持つだけの資格があるものでなければ、解することの出来ないのは當前であらう。少しでも煩悶があると、直ぐその逃げ道を宗教や哲學に求める詩人、學校でをそはつた審美學說に満足して居る批評家、舊趣味を以つて大平樂を唱へて居る國文學者などの標準は、全くお話にならないのであつて、丁度物指しを以つて物の重量を計らうとする様なものだ。エドレーンやマラルメの詩には、ホイスマンズやメタリックの死んだ表象主義と違つて、僕が是から説明する自然主義的表象主義が生きて居る様に思はれる。ゾラは表象派に哲學がないと評したが、それは誤見であつて、少くともこの二大詩人には深い哲理的基礎があつて、渠等はその上に確乎として立つて居たのである。たゞその哲理が普通の形式として現はれないで、獨特の空氣となつて、詩人の呼吸をつないで居た。かういふ新詩を適評するのは、おなじ新思想を有する人々に限るから、同派から出て來たシャルルモリスやジャンモレアスの書いたものが、最も當を得て居るらしい。

この詩風は多少わが國にも這入つて居るし、これからますます發展するだらう。こゝに云つて置く必要があるのは、自然派と自然主義派との區別である。前者は萬事をクラシカルに見て居るので、自然に對して、古典の興へた趣味と素養以上には、自己の努力を用ゐない傾きがある。後者は何等の舊慣にも依らないで、自己の努力ばかりが自然をありのままに捉へようとするのだから、おのづから神經が鋭敏になつて、詩の生命なるイリュージョン(幻像)はそれから起るやうになるのだ。河井醉茗君の作は作者自身も自然派を以つて許して居る風がある。薄田泣菫君も自然派と見なければならぬ。同君の技巧は如何にも當今第一と云はれてゐるが、それは自然主義派に入る條件とはならない。自然主義の詩なら、おのづから表象を呼び起すやうになるべきものだが、同君の詩中に表象らしく見えて居るのは、一種の傳習的見地に安んじて、比喻をやつて居るに過ぎないやうだ。今日この席へ招かれて僕と一緒に立つて來られた蒲原有明君——同君の作には表象的なのが見えるが、これはまた寄せ集めた様で、突飛なところがあるから、もつとかきりその幻像が當て填るやうになればよからうと思ふ。つまり、もつと自然主義に近づいたらいいのだ。僕

のは、『泡鳴詩集』までののは、ロマンチック要素が餘り多くなつて来て、自然主義の根底に觸れなくなりはいかないかといふ氣がするので、近來大分變つて来た。

これからの傾向は自然主義的表象主義で行かなければなるまい。少くとも僕はさうなるつもりだ。これは何も外國の眞似をする譯ではない、佛蘭西を例に取つたのは分り易い爲めである。わが國古代の神々には、この主義が生活となつて現はれて居た。この點は四月

一日發刊の早稲田文學に、『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』といふ題で述べて置いた。この思想的な生活は、儒教が這入り、佛教が這入るに従つて、消極的思想の爲めに壓服され、忘却されてしまつて、今ではたゞ白木の社として諸方に残つて居るばかりだ。耶蘇教が這入つて來てから、忘却に更らに又忘却の輪を懸けてしまつた。然し幸ひにして、現代は宗教的、社會的、また國家的傳習の破れてしまつた時代で——たゞ皇室の尊嚴以外に、何等のコンセンションも僕等を拘束するものはない。藤岡博士は、こんな時代にいい詩人は出ないと云はれたが、そのよしあしは別問題として、この現代の大詩人となるべきものは大懷疑、大煩悶、大生慾を生命として、この自然主義的表象詩を發展すべきである。前に

云つた新詩反對者の理由三ヶ條の如きは、かうなると尙更ら輕んじられる様になるので、そんな愚鈍蒙昧な識者無識者に頓着せず、僕等は勇猛直進、各々それ相當の天職に努めるから、新思想はますます新思想となり、新らしい詩は段々に新らしい時代を創設して行くのである。

一概に新體詩と云つても、藤村晩翠の時代はもう過ぎ去つてしまつた。今日御臨席の島崎藤村君の作は、うはすべりはしたが、大抵七五調であつたから、兎に角調子がよかつた。

この點はテニス——と云へば、只今さんぐ悪口を云つたが——それに似て居た。またその詩風を云へばセンチメンタリズムであつて、ゲーテで例へれば『エルトルの煩ひ』にしか達して居なかつた。同君が、去年、小説『破戒』を公にせられた、あの新らしい主義で以つて再び詩を作れば別問題だが、先づ同君の効績は過去のものとなつた。土井晩翠君の作は、新體詩に修辭學を教へて呉れたのであつて、その與へた智識はいつまでも残らうが、詩風は藤村君のよりも古かつた。米野口君が曾て同君を拾八世紀の詩人と評したが、これはわが國でそんなに後れて居るといふのではない、英國詩界に持つて行けば、丁度キ

ヤンペルの様な風だらうと推定したのだと、僕も推定するのだ。醉茗、泣蕪、兩君の様な自然派は、詩のある國にはいつもある詩風で、殊について行き易い詩風であるから、技巧さへよければ、愛讀者、むしろ模倣者の多いものだ。僕は藤村以前から——殆ど湖處子時代から——つづいて来て、もう老いばれであらう。然し幸ひにいろんな時代と苦悶とを経て来たので、今では新らしい自然主義に向いて居る。有明君も方向は僕とおなじらしい。それに、小山内薫君は近頃あまり詩をお作りにはならないが、その感想録的のものをみると、矢張り新らしい方向である。それから、まだ他の人々の作に就てもお話すれば面白いが、それまでの用意はして来なかつたので、残念に思ふ。

そこで、これから益々發展すべき詩風を個條書きにして見ると、

(一) 宗教的形式の脱却。これには哲學的教訓的形式の脱却も含めてあるので、云つて見れば、すべて傳習的思想の打破である。かういふ思想があると、いつも生靈の自由活動を妨げるのだ。自然主義は一點の彌縫をも許さない。赤裸々の生命を捉へるのである。エルレインやマラルメでも、まだ傳習不脱の點があつた。ホイスマンズやメタリンクにな

ると、その表象は宗教上の抽象的觀念になつてしまつた。或論者はイブセンを以つて破壊ばかりをやつたと非難したが、よしんばそれにしても、その破壊が渠の自然な活現であつたのだ。

(二) 懷疑と煩悶。之を恐れる様では、自然主義は貫徹されない。傳習的思想家に限つて、鳥渡でも疑ひがあり、鳥渡でも苦みがあると、病人が醫者を呼ぶ様に、直ぐ宗教や哲學に訴へる。すると、教學はしたり顔にその得意の架空不自然な混世物を持つて来て、それを藥に飲まして、一時の氣休めにさす。そんなことで安心出来る病人なら幸福なもので、人生は大した苦もなく通れるだらうが、僕等は不幸にして渠等より重病である。一回の氣休めは却つて百回の苦みを増すわけになるので、寧ろこの煩悶を——止めるのではなく——堪へて行くのを真相だとして、他くまでも個人の自覺を呼吸するのである。劇が若し解脱で終るなら、僕等には、悟つたつもりで澄まして居る坊さんを見た様な滑稽であるから、それは悲劇でなく、一種の喜劇であるとは、僕の新説だ。自然主義の悲劇は個人即苦悶即呼吸の自覺である。

(三) 神経と自然との燃焼流化。眞摯な自然主義を追行すると、おのづから神経が敏活になる。敏活な神経が自然と燃え合ひ、流れ合つて、自然に感じがあるのが神経、神経に形が現はれるのが自然、僕等は自然の裏に活物を認めるのでなく、自然その物が神経的活物となつて見えるのだ。それが乃ち自然のイリュージョンであつて、つまりは自己その物の影であるから、その作物が作者と共に生命を保つことが出来るのである。

(四) 刹那的生慾の發現。前項の如くなると、そこに人間の生慾が一刹那の餘裕もなく、存在の危機を守つて居る状態であるから、博愛や慈善を説いたり、『神は愛なり』など歌つたり、そんなのんきなことはして居る餘地がない。そんな餘地が一分出来れば、一分だけ自己の眞摯をゆるめたことになる。自己生存の大危機に臨んで、他を救ふと云ふ様な考が出ると思ふのは、偽善でなければ、心の蘊の抜けたものであらう。酒精に水を入れると稀薄になる、眞摯な作物に非個人主義の要素が這入るに従つて、熱烈の度が不足になつて行くのだ。

(五) 心熱。自己が最も眞摯になつて居る時は、自己の一部くでない、全體が一

つに燃えて居るのだから、その時の作物に感情の熱ばかり現はれる筈はない。知情意一體の心熱が現はれるのだ。云ひ換へれば、熱想的自覺である。かうなると、宗教は知力、哲學は知力、藝術は情で行くといふ様な區別は、誰れにでも幼稚なことが知れよう。

(六) 新語法と新用語。ネオロジズム(新語法)を叫ぶのは、新思想の出来た時代には必らず止むを得ないことだ。在來の用語、云ひまはし、語法などでは、なか／＼云ひ現はされない思想があると同時に、また技巧上の工風が進んで來るので、古い頭脳には之が間違つて居るとか、然らざれば、分らないといふ非難となるのは、どこの國でも一時代後れた老人または若年寄の居る證據である。

(七) 思想と技巧との純化。思想ばかりで作は出來ず、さりとて技巧のみでは無意義に終はつてしまはう。現代の詩や小説は後者の勝ち過ぎたのが多い。ポードレイルの技巧説を楯にして、全く思想を輕んずる者もあるが、その原詩を讀んで見れば、決して技巧ばかりでないのが知れるのだ。一方には、またホイトマンの様な詩風もあつて、技巧は始と駄目だと云はれたが、その質普通一般の標準を飛び抜けて、『草詩の科學的研究序論』の著

者マークリデルの云つた通り、『この放縦な詩才に適するやうに、』その思想動機が甘くリズムを成立させて居た。人によりて兩者いづれかに偏することはあるにしろ、その詩才の特色に従つて、思想は乃ち技巧、技巧は乃ち思想である域に達してこそ、初めて理想通りになるのだらう。

(八) 新リズム。前項までの個條は詩に限つたものでない。ダンヌンチオやメタリックやイブセンなどもこの方向を取つて居るのだ。それが詩に纏まるには、リズムに刻まれなければならぬ。リズム問題に就ては、僕、日本新聞紙上で、一昨日から四五回に渡り、佐々醒雪君に當つて居るが、こゝでさういふ方面に及ぶのは、長くなるから致さないとして、兎に角新時代の新思想に對し、それ相應な新リズムが出て来るもので、神經の敏活なるにつれて、リズムも亦敏活になつて行かなければならぬ。エルレインがその一詩集を『言葉なき歌』と名づけたのは、このリズムの力を自覺して居たからである。去年の十月頃、露國のマツキ嬢が明治音樂會でピアノを弾じた。嬢は新派のピアニストで、外國でも有數な人であつた。藝風は非常に艶麗であつて、而もその彈奏の輕妙なことと云つたら、コード

のことなどを考へさす暇もなく、その色彩と光澤とに由つて聽衆を酔はしめたのだ。東京音樂學校のピアニスト、古典的趣味を持つて居るケーベル博士が之を聴きに行つて居たが、餘り甘つたるいのに堪へ兼ねて逃げ出したといふ記事は、新聞社が事實を載せたのか、または兩者の相違を諷じたのか、どちらか、僕は知らないが、ケーベル氏のを一中節とすれば、マツキ嬢のは清元の様なものであつた。この清元的ピアニストには、リズムは奏法と融化して、色彩となり、光澤となつて居たのだ。先日、或婦人が萬國漫遊から歸つて來ての話に、外國の音樂を聴くと、跡までいゝ心持ちが残るが、わが國のはさう行かないと云つた。すると、或人が之を解釋して、それはリズムが耳に残つて居るので、邦樂はリズムが複雑だから、甘く残らないのだ。外國樂でも、ワグネル物はさうは行かない、聴いた跡で何だかうつしい天氣が自分の頭を壓迫する様な氣になると答へた。リズムの輕妙、複雑、重烈なのは、それ〴〵巧みに使用されなければなるまい。

要するに、僕の所謂自然主義的表象詩は、以上の如く發展して行くべきものだ。大抵は拙著『半獸主義』で云つたことだ。舊思想、舊形式の人々が分らないとて、何も憂へる

には足りない。云ひ換へれば、サイエロジカルポエトリー（心理的詩歌）である。これは必らずしも佛蘭西のサンボリストに習へと云ふのではない、たゞわが國古代の神々の生活を僕等は、今日、詩で實行するのである。審美學では愉快を興へ、解決を興へるものを美とするが、それと反對に、不快や無解決が美でないから、之を詩の材料にすることを許さないと云ふ學說なら、僕等は再び顧るに及ばないのだ。もつとも不快、無解決、醜、罪惡なども、美となる様に使ひさへすればいゝのだと云ふのが一般だが、それなら初めから美だけを舉げて來ないで、美醜、快不快、善惡など、すべて自然のまゝに心理的詩歌の材料になる。何度も云ふ通り、生存の危機一髪といふ時に當つてのん氣にも美醜の考へはあるまい。眞摯、熱烈、刹那的表象のイリュージョン——これがリリック、乃ち、叙情詩の本領である。

カントの藝術無關心論にしろ、シルレルの遊戲動機説にしろ、ハルトマンの美的假象論にしろ——審美學専攻の學士深田康算君の居る前ではあるが——僕等にはたわいがなくつて無意義も同前である。耶蘇教の三位一體は遠に棄てられた。心理學の三位一體、知情意も

近代の學者はその區別に餘り重きを置かなくなつた。哲學上の三位一體、眞善美もプラトーン的思想の舊形を追ふに過ぎなくなつた。そこで、人間の上の三位一體、詩人哲人宗教家も、僕等詩人からはその類別を許さないのである。僕等は宗教の爲め、哲學の爲めに詩は作らない、然し自然主義的表象主義を以つて、宗教としての、また哲學として詩を歌ふつもりである。自由な藝術でなければ、この主義は實行出來ないからである。

終りに臨みて、僕の如き者の演説を、諸君に辛抱して聽いてもらつたのを感謝して置きたいのである。（明治四十年三月帝國文學會春期大會演説、帝國文學掲載）

イブセン論私見

今月のイブセン會例會は、會員に種々の差支へがあつたので、集つたのはたつた三名、柳田國男君と長谷川天溪君と僕とであつた。張り合がないので、食事を済ましてから、玉突をやつて別れてしまつた。その節、僕が云はうとしたのは、古い『コンテムポラリーレビュー』に載つたメーナードバトラーといふ人のイブセン論である。苟もイブセンの様な新藝術を論ずる位の意氣込みがあるなら、もつと斬新な、自由不羈な見地に立つて居さうなものなのに、この論者は平凡で、而もクラシク傾向を脱し得ない行き方をして居る。僕等は、之をかれこれ云ふには及ばないのだが、わが國人にも先人の偏見があると同時に、外國の評論家が傳習的に喋々することを直ぐいゝ事の様に呑み込んでしまふものが多い世の中——君、一概にさうした譯のものではないぞ、といふところを示して置くのも、新文藝、新作家の前途に對して、無益なことではなからうと思ふのである。

第一に、論者バトラーは「マスコシグカイト (Muscosigkait) 誇張は藝術ではない」、そ

の意を別言せば、『形式は藝術でない』といふことを述べた。これは『藝術の爲めの藝術』を否定したので、別に取り立て、反對するまでもないが、しかし、それが生真面目な、眞正面論であつて、佛蘭西惡魔主義派のボードレールなどが實行した、反動的詩論の様などころがイブセンにもあるのを知らなかつたのは滑稽である。渠、諾威の劇作者が、劇の約束からして、技巧に過ぎたところは随分ないではないが、全体としての行き方から云へば、確かに自然主義派の一人である。たゞその主義を極端に追行したのが——論者も云つた通り、『北方は諸極端の陸』だ——平穩なクラシク主義の眼に誇張と見え、不自然と見えたのであらう。

『ブランド』はいまだ観客をして忘我の域に至らしめまいとある。この『忘我』といふのが既に一種の傳習である。考へても見給へ、趣味と閱歷とを異にするものが、その異なる事件や境遇に向つて、何で同情同感を起こすことが出来よう？ 人情には一致するところがあるから、その一致點に當ればいゝのだと答へるだらうが、そこにはシエキスピヤや近松が出て來て、必らず淺薄な表情を以つて満足しなければならなくなるのだ。『人形の家』は、

『自由の誤用に對して起つた反語』だとある。然し、ノラが夫や子供を棄て、去るのは、イブセンに於ては、ノラの自覺が目的であつて、之が無情殘酷に見えるまで最も眞面目に描寫してあるのだ。また、『亡靈』に於けるアルギング夫人の自己排棄を、『莊嚴な自己排棄』としてあつて、よしんば之が論者の云つた通り製造物に過ぎないにしても、この排棄思想その物が既に一傳習——亡靈の一つ——になつて居るのだから、作者イブセンに於ては、アルギング夫人の最も免れ難い傳習が、『ロズメルスホルム』の思想の様に、全く破れて行くところに却つて莊嚴な點があるのである。作者の最も卑しんだ傳習思想の自己排棄を、論者は自己の傳習に據つて却つて重大視して居たから、『亂暴者に類する主張で健全な人は之から心を背ける』と云つたのだらう。

次に、イブセンは技巧家で、決して創造者ではないといふ見解を固執して、レシングがその兄弟カールに與へた忠告——『おのれの性格を發展せよ。然らざれば、余はよき劇作者を心に畫くことは出来ない』——を引用し、作物には作者の人格全部が深い印跡を残すべき筈なのに、『イブセンは自己の一部を押へて居た』から、その押へた部分がまた大作

者と成る能力をも押へてしまつたと云つてある。『渠はその同類者と一つになるを避け、好んで外部に立つて同類を嘲弄したから高いところにおける地位を占めることが出来ない』——これは古今を通じて然りで、『エウリビデースはソフォクレスより、佛のザルテイルは以のダンテより、モリエルはセキスピヤより、スキフトはロバートブラウニングよりも位が低い』と。何たる駄言だ！近頃、エルレインの詩を譯して出版させたアシエモアキングトといふ人——これも常識とクラシク趣味を脱し得られないアングロサクソンだ——がエルレインに對して、矢つ張り同じ様なことを云つて居る。『エルレインが大詩人中の最も小さいものよりも以上になるのを妨げる缺點は第一に大詩題を缺いて居ることだ。——第二に、不幸な缺點は人生問題の解釋を缺いて居ることだ』と。第一は、ホメーロス、ダンテ、ミルトン、テニソンの如く、有名な（而も玩弄物の様な）史詩がないといふこと、第二はブラウニング、ヤルヅヤルス、マシウアーノルドの如く、嚴格な（而も虚偽平凡な）お宗旨がないといふことだ。こんな物の分らない、頑迷な詩論家が佛蘭西や、諾威や、その他諸國の新藝術を論ずる仲間にもあるのかと思へば、何事も外人の言を信用し易いわが國人の

現状を振り返り見て、一種の悲觀を催さないでもない。キングゲートが鋭敏なエルレインを神經の鈍いアナクレオンに譬へた様に、バトラーは悲痛淋漓なイブセンを滑稽諷刺の作者に擬した。よしんば之が事實であるにしたところが、その性質に由つては、大詩人の大なる地位を與へれば與へられる、ましてイブセンの諷刺は、サカレイや夏目漱石氏の無邪氣または表面的なものは違つて、寧ろ深刻な破壊であるをやた。

然るに、論者バトラーは、クラシクな觀察から、イブセンの劇、『ブランド』以後十六種を以つて諷刺的喜劇とした。一体、悲喜兩劇の根底には、互ひに共通な點があつて、見合によつては、喜劇も悲劇に、悲劇も喜劇に見られないでもない。然し、論者がイブセンの作を以つて喜劇と見爲した裏面には、之と反對の悲劇に對する美學者從來の偏見がつき纏つて居たのを看破しなければならぬ。僕がもう何度も云つた通り、從來の宗教家または哲學者の所謂死や解脱を以つて、苦悶と葛藤とを解決し得たと思ふのは、人生を離れた心靈の永久（而も架空な）存在を假定してあるのであつて、決してそれが新悲劇を構成する條件にはならない。そりやア、小供がおもちやの人形で満足して居る様なシエキスピヤの

時代や、また近代でも、小煩悶を免れて小安心で満足して居る宗教家輩の仲間では、そんな假定の追行を以て大悲壯な事件と思ふかも知れないが、僕等の様に苟も深い自然主義が個性にまでも染み込んで來たものから見ると、渠等の所謂悲劇は一種の淺薄な喜劇としか思はれないのである。イブセンの作は傳習的解決が興へてないから、悲劇と見爲されないといふ様なたわ言は、僕等の一笑にも償しないのだ。僕等は舊審美學その物の根底からして轉覆するのを望み、且、努めて居るのである。

現代人の本性は、從來の解決と慰安とに満足出來ない程、熱して來たのだ。この熱心で餘裕がない程の眞面目が、無限絶大の煩悶苦悶となつて現はれて居る。新派の悲劇は、之を、從來の宗教的、哲學的偏見を脱して、ありのままに描寫するのである。これはイブセンの後輩、同じスキヤンデナビヤ半島の人、ストリンドベルヒの劇にもやつてあるところだ。すべてかういふ風の劇には、解決を興へないで苦悶を活現さすから、それが深刻になればなる程、表面は激烈な破壊に見えるものだ。然し、人間のからだでさへ時々刻々破壊して居るのであつて、若しこの力がなければ、國家も宇宙も沈滞して、清新な生命を失ふ

ので、僕等の生存する価値がなくなるだらう。イブセンはかういふ破壊力を體現したのである。破壊はイブセンの生命であつた。論者の所謂『創造者』は、星霧説も進化論も出て来ない以前の神を模倣する者を云ふので、またその『技巧家』は却つて美學の舊套を脱して自己獨特の面目を發揮した者を指すのだと思つて居ればよからう。イブセンは『自己の一部を押へて居た』どころか、その同類に對する嘲弄をも、諷刺をも、石榴がその實を吐き出す様に吐き出して、其作は至る所、その人全体の印跡を帶て居る。『渠の偉大は乃ちそこにあるのである。早い話が、論者も聞て居た通り、此大作家は廿五年乃至卅年間、その創作を諾威語で書くと同時に、獨逸語にも直して行つた。して、また、後者の語脈は作家の母方から傳つたので、その獨譯には作家自身の特色がそのまゝ印せられて居て、他人のやつた英譯よりも、作中の事物に關して、『研究者は最も、反映を得る』と云つてあるではないか？普通の技巧家の作なら、その作家自身が之を他國語に譯したとて、決してさう甘く特色が残つて居る譯には行かないのだ。

以上はバトラの重なる論旨に對する僕の抗議であるが、論者はまた諾威文學は亞米利加

合衆國のよりも年が若くて、未熟だと云ふことを述べた。それはさうから知れない。一八一四年、キール條約調印の年に初まつて、今日でもまだ百年位にしかならない。名のある人物と云つても、イブセンを除けば、すつと劣等なヨルゲンモー（叙情詩人）、アーノルドエルゲランド（愛國的詩人）、ヨナスライ（小説家）、ヤコビナコレト（傳奇作者）位を出したに過ぎない。二千年來、立派な文學を持つて居るわが國とは丸で比べ物にならないが、兎に角、諾威文學がイブセンに於て新時代、新文藝の自覺を得たのは事實である。『わが時代一等の評論家セイントボヴが、その評價を絶する文章をイブセンに加へても僅かであつた』のは、バトラの推察した様に、加へるに足りないと思つた譯か、どうか、また他に理由があつたか、どうか、僕は今之を論ずることが出来ない。然し、『他人が刈る爲めに種を播くのは、先驅者ヨハネ以來人間の運命であつた』といふ、その運命はイブセンから舊來の傳習悲劇作者を出すのではない、必らず渠以上の新悲劇家が出るといふ意味に解して貰はなければならぬのである。

今一つわが國の批評家、紹介者等に注意して置きたいのは、如何に僕等が馬鹿にして居

ても、アングロサクソンにはアングロサクソンの見識がある。バトラーは『ロズメルスホルム』中の女主人公レベカエストを以つて、サカレイの小説『バニチイフエア』中のレベカシャープの『微力な摸倣』と見爲した。それが當つて居ないにしたところが、自己の屬する國民または種族の文學に、外國の作物を對比して來る覺悟は、僕がメレヅコウスキのトルストイ論を批評した時に云つた通り、大いに服膺すべきところだ。三好博士の植物學に於ける、北里緒方兩博士の醫學に於ける、田中博士の音樂論に於ける、すべて外國人が來つて之に聽く時代だ。航海業にさへ、歐洲航路に好成績を收めた船長村井氏、大野氏などが出來て來た。どこから見ても、日本は文化の中心になつて來る形勢だ。近松を以つてシエクスピアを論じ、西行を以つてアルツァルスを説き、一休を以つてスキフトを評するの何の遠慮も氣後れもあつたものではない。たゞ國粹的評論をやる間に、僕等は舊文藝の功過と新文藝の發展とを混同してはならない。前者の功過に於て、國民の素養に、諾威の様なたつた百年ばかりのものではない、二千年以上の根底があるのを知り、後者の發展に於て、それが世界的新時代の要求に對して、如何に面目を一新して行くかを覺るべしだ。

今、論者が『バニチイフエア』のベツキイシャープを持ち出したのを調べて見るに、成程『ロズメルスホルム』のエスト嬢に似た點もある。前者は美術家を父に、オペラの女優を母にした孤兒であつて、六歳から大人の苦勞をしたと身づから云つて居る位で、永らく世話になつて居た女塾を去る時、老婦の塾主に紀念として貰つた字引を馬車の上からはうり投げる様な思ひ切つたことをする女だ。それが一週間程セドレイ家のお客になつて居る間に、同家の娘で自分の學友であつた者の、兄を引き込まうとして失敗し、今度は或準男爵家に入り込み、先づ小供からなつて置いて、甘く主人を籠絡し、その夫人が亡くなると同時に、主人が自分に結婚を申し込んだのを、末にまだ大野心があるので、拒絶して見せるなど、頗る伶俐で而も無情な女に描かれて居る。イブセンのレベカも半身不隨の苛酷な養父に育てられた女で、世の辛慘を嘗て居るから、利口で、また自分の意志を以つて情を制することが出來た。自分の自由思想を傳へようとして、諾威の貴族とも云ふべきロズメル家に入り込み、主人と相親しむに従つて、その高潔な——然し、傳習的思想には纏はれて居た——精神に眷戀の情を生じ、その家の夫人を遠ざけて、遂には之を自殺さす

に至つた。然し、主人からいよく結婚を申し込まれて、始めに之を拒絶したのは、なほ
 伶俐な智力と自由な意志とが残つて居たからである。

論者は、シャープ嬢の方がエスト嬢よりも利口であり、また望みが高い上に、前者は愛
 嬌の性に富み、後者は滑稽の趣味に乏しいと云つた。こんな比較は、イブセンを以つて、
 サカレイと同じく喜劇を書いた者と見爲すから出て来るのだらうが、僕は之を反對に辯
 解することが出来る。エスト嬢は、北方にあり勝ちの子宮病を自から壓服して居る三十歳
 の年増で、シャープ嬢はアングロサクソン特有の軽快な氣性を有する十八九歳の花娘であ
 る。だから、後者は、チリイ（唐辛の實）を發音上冷い（矢張りチリイな）物と豫想して口
 に入れ、熱い程辛かつたので閉口する場合の様に、無邪氣で滑稽な性格が顯はれて居るが。
 前者になると、結婚承諾が終に精神上また身體上の心中となる工合に、眞摯で而も有意識
 の最後を遂げて居る。この最後は必らずしも事件と煩悶とに對する解決ではない。僕が『半
 獸主義』で云つた 人○生○の○無○目○的○と○刹○那○的○自○覺○とを描寫してあるのだ。これが最近自然主
 義の藝術の真相である。サカレイは到底普通の喜劇作者に過ぎない、イブセンは深刻で

而も嶄新な悲劇家である。

わが國に於ても、サカレイに當るものを見付けたり、またイブセンに越えるものが出來
 たりするのには、現代評論家の態度如何が半ば與つて力あることであらう。（明治四十年五月
 六日作、讀賣新聞）

早稻田文學並に時事新報の記者に答ふ

今月の早稻田文學の社論に、『所謂自然主義的表象派の努力に於いて、吾等は詩それ自からの根本に横たはれる一個の疑問に觸れ來たるを覺える』とある。自然主義的表象派の詩とは、僕がわが國古代の思想を参照し、それに佛蘭西のゾルレインやマラルメ一派の長所を引例して、僕の二三の論文——『藤岡博士の新体詩論を評す』(讀賣)、『自然主義的表象詩論』(帝國文學)、『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』(早稻田文學)等——に於て、之を論じ、また之れに命名したのであつて、外國ではまだ自然主義的表象派といふ様な名の與へられたものはないのであるから、早稻田文學の社論は直接に僕の意見に當り、また僕の近來の詩風に關係があるものとして見られるのだ。それで、同志の『詩歌の根本疑』(天絃氏)並に『今の文壇と自然主義』(抱月氏)に就いて、少し云つて見たいことがある。

先づ天絃氏の方から云ふと、『自然主義的表象派は、一切の心的活動が渾融して、一時に

其の高熱に達したるの刹那、その瞬間の感味心境をさながらにして、之を一篇の詩歌に表現せんとするもの』と云はれたのは、『神秘的半獸主義』以來僕が既に幾回も證明した通りだ。また、『近代人の複雑鋭敏なる内心の活動は、到底今日の言語を以て、遺憾なく表現し得ざる物がある』ので、その『到底表現し能はざる主觀本體の反應的感味が……貧しき言語を以て歌はれんとした場合に、……結局不可解のものとなるか、但しはまた僅かに……一小部分を現はし得たるに止まるか、何れにしても表現の努力が不完全の結果に終るべきは、僕等も承知の上であつて、氏の言の通り『已むを得ぬ次第である』のだ。

然し、氏はこれから推察して、『詩歌の存在を否定するの意を含むものではない』が、『唯詩歌の性質に關する考察の一端』として、氏の所謂『詩歌の根本に關する疑ひ』を提出せられた。乃ち、『複雑にして變化無限なる所謂主觀の反應感が、如何にして一定の形式の中に收められ、而してその感味の表現に遺憾なきを得るか』と。これは疑問の方法が違つて居ると思ふ。既に人間の用ゐる言語の不完全を承知する上は、時の古今を問はず、形式の韻文なると散文なるとを論せず、『章句の相即き相離る、微妙の關係より醸し來たる一嘗の

味識に傳へんとしたる反感を彷彿せしむるが極致であらう』ではないか？ 散文にも亦別種な制約があるのであつて、それを以つて韻文と同じ感想を表現するなら、氏の所謂疑問は同じところに達するのである。たゞ散文は、これまでの習慣として、韻文だけ緻密な、隱約な、幽玄な、熱烈な感想を表現しようとしなかつたのが違ふばかりである。

五月二十二日の時事新報文藝週報に、僕の帝國文學會でやつた演説文『自然主義的表象詩論』を評してあつて、その中にも、この問題に及んで居る。僕が『自己生存の大危機に臨んで、他を救ふといふやうな考へが出ると思ふのは偽善でなければ、心の縊の抜けたものであらう』と云つたに對して、『自己生存の大危機に臨んで、心の縊の抜けたものであらう』と云ひ返し、『泡鳴は、措辭や格調に要する技巧は、少しも眞摯熱烈の度に累を及ぼさないと考へて居るのであらうか』と尋ねた。早稻田文學記者並に時事新報文藝記者は、いづれも散文と云へば、直ちに先づ記實や三面記事を聯想するのではあるまいか？ さういふ物には、暗示的なものも表象的なものも入らないから、前者の所謂『漠然たる反感の表現といふこと』もなく、後者の所謂『朦朧晦澁』なところもないにきまつて居る。

然し、自己本位の白熱的刹那の存在と痛苦とは、之を表現するに、どうしても現今の（また將來の）不完全な言語を使用しなければならぬのだから、詩人が之を散文で表するにしろ、また韻文で現はすにしろ、その表現が不完全——諸君の所謂『漠然』または『朦朧』——であるのは當然である。而もその僅かに漠然、朦朧でなければ、表現しられない程、深遠で、痛切で、また熱烈であるのが、平凡な論理を辿る哲學者の議論や、常識と折衷とを能事とする記實家の筆など、違ふところである。且、散文家に一定または窮屈と見える詩形は、詩人に千萬自由な天地であつて、これはその修養ある精神と生命とが自づから流れ出る形だ。散文を書く批評家や、興ざめた詩人には、この形は、『つまづく石』であらうが、苟も精神の振つてる詩人は之を何の苦もなく踏み越えて行くのである。

時事記者は『泡鳴がテニスン流だの、其詩風はセンチメンタリズムであるのと罵倒（泡鳴曰く、罵倒ではなかつた、批評）した島崎藤村の眼識は、遙かに泡鳴以上だ』と云つて、同氏が『詩そのものが措辭とか格調とか云つたやうな外形の技巧に拘束され易き愚を悟つて

未練なく散文にかへつた』のを賞し、『一體、泡鳴は「破戒」に現はれたやうな新主義を、今の長詩で歌ふ事が出来るものと思つて居るのであらうか』と尋ねた。然しこれはたゞ散文であるといふのを見て思ひ付いた議論に過ぎなからう。藤村氏の散文に現はれた外形的技巧は、その實、僕等の詩に見えて居るそれよりも寧ろ甚しいのであつて、それが爲めに渠の自然主義は僅かに平坦なのを以て満足しなければならなくなつて居るのだ。僕等の詩形は寧ろ内容の自由流出に過ぎないのである。早稻田文學記者はさすがにこの消息を知つて居たかして、『詩歌がその音數、音質、音位の何れかに就いて、一定の律に遵はんことを要求するは事實である』が、『斯の如き形式上の制約がその表現せる感味の節奏に伴ふ限り、形式の制約は感味を拘束する手段でない』と云つた。然し、これもたゞ側面的觀察であるので、直ぐ次に、さきに擧げた疑問を提出したのである。

序だから時事文藝記者に云つて置くが、僕が舊來の短歌や俳句の作者を、記者の所謂『漫罵』したのは、詩的良心と自覺とのないものに對してだけだから、これらのあるものまでも『一括』したのではなかつたのだ。然し短歌や俳句をやつて居るものに、詩的自覺のほ

んとにあるものが少いのは事實である。

次に抱月氏の新自然主義の解釋に、第一、寫實的自然主義、第二、哲學的自然主義から進んで、第三、純粹なる自然主義が出て來て、『一切の我意を拆いて沖虛なる心に生ずる事象の中から、おのづからなる別種清新の情味を吸ひ出さんとするが如き態度が此の派の極致であらう』とある。わが國現時の文界では、藤村氏の『破戒』などを指して居るらしい。この派の態度は『消極的』で、『無思念』のうちに、『弱い、優しい、謙遜な感じ』を述べようとする説明したなど、確かに『破戒』をまことにしたのであらう。かういふ風は、田山花袋氏の『露骨なる描寫』以來段々と作家の間に發達して來た態度だが、『破戒』の様ではまだ君の所謂『物我の合體』、『覺めたる刹那の事象』、『動き來たつた瞬間の自然』を見ることは出來まい。何も第二、第一の自然主義に立ち返れといふのではない——然し、消極的に『我れを没し、而して斯くの如き自然の前に無條件の降服をなす』様なことをしなければならぬなら、その新自然主義は、坪内博士の昔の沒理想論も同じことになつて、神や運命や自然を何となく外延的存在物でもあるかの様に見て居たクラシク思想が半ば勢力

を振ふことになるだらう。

早稲田文學の社論は是非を下だしたのではない。然し果してそれが現時の傾向とすれば、僕等は更らに進んで新らしい自然主義を呼號しなければならぬ。曾て讀賣新聞附録で、にぎりめし氏が、クラシクでも、ロマンチクでも、いゝ物さへ作ればいゝのだといふ呑氣なことを云つた。今度、また、演藝書報で、森鷗外氏は『主義は作家に取りては無用なり、固より作家が自から主義を立つべきものに非ず……自己の本領を發揮し得れば十分なり』と云はれた。いゝ物を作つたり、自己の本領を發揮するのに、無方針で行けるわけではない。果してそれで行けると云ふなら、その人は定りきつたクラシク思想で固つた頭を持つて居るからである。僕等の様に下らぬ安心の出來ない、種々な疑問の多い、刹那の存在を争ふものには、主義が乃ち生命である。ペクリンの風景畫を見ると、その神話的な方とは違つて、外延的自然が殊に威力を以て迫つて來て、人間を小さく見せてしまう。メタリンクの描く運命もその風がある。これは渠等の主義から來るのであらうから、その人にはそれが生命である。たゞ僕等はさういふ主義は嫌ひであつて、自然を一刹那の覺醒に壓服さす自然主義的

表象主義を取るのである。

僕は去年『神秘的半獸主義』を公けにして、一種の哲理と文藝觀とを發表した。長文ではあるが、夏目漱石氏の『文藝の哲理的基礎』の様な、冗長な物ではなかつた。その後も絶えずその續論をやつて居る。然し、あたまたが形式論理で固つて居る大學の學者輩には、僕の自由な論法が到底こなし切れなかつたし、素養の少い文學者連には、僕の趣味ある哲理もたゞ乾燥無味な食物であつたらしい。こんな貧弱な現代に、どんな主義を體現するものが出ようとも、之を解するものは十指を以て數ふる位で、跡はたゞ附和雷同の徒に過ぎなからう。それを思ふと、答辯の筆を執るのも厭になるが、兎に角、兩誌とも僕の議論に對して疑問を懸けたのであるから、讀賣紙上を以て取り敢へずこの文を發表することにしたのだ。(明治四十年六月三日作、讀賣新聞)

駁 論

『辻談議』のにぎりめしは、また『文壇の煩悶的分子』を今日の讀賣に書いて、僕に當つた。君とは二三度議論を交換したので、君も僕の立脚地が分つて居ようし、僕も君の立場が分つてしまつた。それ以上互ひに別々なことを云つて居るのはいゝが、一々それに答辯をするまでもないのだ。君は表面の常識を標準として單に批評家として立ち、僕は常識の裏面に立ち入つて、殊に暗鬱たる感想を探る作家たると同時に、その經驗からして得て来た評論の筆を振ふ者である。然し今一度君に簡單に注意して置くことは、君の立ち場ではない、君の思ひ違へ並に不適な點である。

君は、地方に住する他の騷客と同様、東都文壇の消息に通じて居ない。さき『文學は將に死せんとす』といふ外人の所説を、何だか物新らしさうに紹介したのをかきな物だが、本欄に於ける影武者の『小評論』と僕の詩論とを見て、今更らの様に『ふと今の文壇に頗る煩悶的分子のあることを感じた』と云つて居る。然し藤村氏が韻文より散文に轉じたの

もその煩悶の結果であつたし、花袋氏等の小説も古くからこのおかげがほめて居た。少くとも、泡鳴一個に取りては、數年來煩悶苦惱の詩を作つて居たのである。君は、これまで、おもにたゞ明星一流の純クラシクな自然派の傾向ばかりを見て居たのだらう。

君は更に進んで、僕が『熱烈な思想感情を表現するには、これを用うべき言語文字が不完全だと定めて居る』と云つたが、これは君並に他の常識派が兎角云ひたがる難解、朦朧、不自然、語法不熟などの評に對して、これらの要求を満たす時は、やがて、泣望、柳村等の詩風の様な、一面に（長所は長所として）死んだ美容を現はすに過ぎなくなる弊が生ずるのを注意したのだ。君の所謂『泡鳴ほどの詩人を以て任ずるものが、昨今縦横にその思想感情を議論の上に表白しながら、動もすれば、言語文字の不完全を鳴らすといふのは、案ずるに竟に製作難の煩悶であらう、詩形を如何にせんか、章句を如何にせんかの煩悶である』とは、穿ちが違つて居る。僕が詩形問題に苦しんだのは、恐らく藤村と同時代に初まつたのだらうと思ふ。而して、渠は遂に消極的に散文に免れ、僕はまた積極的に『僕等の詩形は寧ろ内容の自由流出に過ぎない』と確言する事が出来るやうになつたのである。

君の所謂『不立文字の淵源』も、『それが微妙の理観情観であることを傳へて居る』のは、たゞ或程度までに限られて居るのであつて、その満足出来る限界が、君等の様な常識的古典派の作家や評家と、僕等の様な非常識デカダン派と、相一致しないのである。『大詩人の使用に應ずるだけの完全^{△△△△}に近き言語文字は今日でも存じて居る』とは、古典派、技巧派の意氣込みとして聽かれやうが、それは渠等にだけ應用すべき言であつて、まだく僕等の意氣込みを満足することは出来ない。『文字の賜』と云つて有難がるのもいゝが、文字は純技巧派の云ふ様に左程大事な物ではない。僕等は僕等の生命となつて居る（而も君等の手段視するのとは違ふ）主義を以て、詩を行ふべきを主張するのだ。たとへば、佛蘭西語の『デカダン』といふ語も君等は表面的に衰頹とか、衰微とか、不健全な意味に解してしまふ傾きがあつても、僕等は却つて之を以て呼ばれるのを喜び、この語の裏面に、他語を以て發表することの出来ない悲痛と生命とを感ずる。それなら、別にそれだけの新意義の附せられた語を探して持つて來たらどうかといふだらうが、そんな古典語を持つて來て當て填めだが最後、形は整つてもその本義を失つてしまふのである。泣菫氏等の詩の缺點は、乃ち

そこにある。また渠等の新しい意義のつもりで使ふ『靈』が、僕等には『肉』を以て現はせるし、僕等の今使ふ『靈』が却つて僕等のかつて卑しんだ『肉』であることもある。かうなると、かの希伯來民族の傳説にあるバベルの塔の故事が思ひ出される。神がその各種族の天まで達しようとする野心を押へて、その高塔絶頂の工事に従事するもの等の言語を相通じない様にしたとは、各種族がその特色と實力とを實際生活の上に現はして來たことを意味したのであらう。純技巧派や古典的自然派は、いづれも自然主義的表象派と根底から詩界の工事を相共にすることは出来ない。

『論が解らなければ解るやうに説いてやれば宜しい、それでも解らぬことはない』とは、流石『予の如き呑氣もの』と自稱する君には云へようが、僕等の様に心中が煮えくり返つて居て、腹わたまでが叫びの聲を擧げようとするもの、言は、いくら解るやうにしてやつても、頭腦の凝結した學者や作家に『解らぬことはない』ことはない。然し、なほ評論の筆を執るのは、僕もまた一家の見を有して居て、君等の様な平俗無爲の詩論を以て、世人をして凝結の上に凝結を固めさせたくないからで、[○]創作家たる時は[○]創作家だが、[○]批評家たる時

△△△△△△△△△△
 は批評家であるから、この時に當つて、『詩人に主義あらば、宜しくその氣魂思想感情をその詩作に表はして、他を感動さすべきものである』などとは、たゞ君の遁辭であらう。僕が君の所謂『自家心中の煩悶をほめかす』のは、『煩悶する勿れ』といふ君から云へば、全く反對であるが、僕は批評家としても殆ど惡魔的に大煩悶、大懷疑を鼓吹して、青年とは云はず、大人君子等の箱庭的美學思想と小康儉安の藝術觀とを打破するのである。これは、さきに云つた通り、詩形や用語の問題ではない、其修養も不足であるのに、小成に安んじて一家の風を帯び易い詩人等を警醒する爲めである。

それなのに、君は却つて『二個の煩悶分子は、わが文壇に存在するやうに思ふ』と云つて、『若し然りとすれば孰れにしても文壇に徒勞となり、青年文人には非修養の風を醸す種となる』と心配した。何たる迂闊な言だらう！現時詩界文壇の下層には、否、上層にも、早熟と非修養の分子が満ち満ちて居るのであつて、わけも分らないのに、たゞ言葉の綾と構案とを巧みにして満足して居るものが多いのだ。直截切實な句が取り柄であつた花外氏の様な詩人でさへ、この頃の作はその方にかぶれて居る位だ。技巧主義でも、ボードレールの

のそれの如きは、その當時の佛國文壇に對する反動の極であつて、人工美をなれば美がない様に主張したが、その根底には、實世間の苦悶を経て來た深い、深い流れを湛へて居たのである。僕も技巧を無視するのではない、生命の流出におのづから技巧を自覺するのを採るのである。君は近頃技巧派の辯護士になつてしまつたが、今の様なことを云ふのを見ると、かういふボードレール以來の消息にはまだ通じて居ない様だ。『二個の煩悶分子』といふ、その一方を代表させた影武者の『小評論』には、思つたことを無暗に描けば好い、それが當るかも知れない、當らないかも知れないとやうに澄まして、諦めて居るやうに『君にも『見える』のだから、まだ主義的自覺の苦悶に達して居ない物としてこゝに僕の關係するまでもない。然し僕の刹那主義、乃ち、煩悶自然主義は、詩即苦悶の生命を人生の無目的實相論から主張し、涅槃とか安住とか云ふ、古典派や宗教臭い者等の後援とする消極架空の虚説を採らないのであるから、永遠に『煩悶に安定の歸局無きは』この主義當然の行き方である。カントは勿論、ショーペンハウエルの様な強情者でも、こんな積極的狀態には堪へ得なかつたのであるから、餘程心力と意力と自我心との強固でまた熱烈

なものでなければ、到底之をその生活と創作とに實現することは出来ない。之を主張し出した僕ぐらゐの者が君に『狂』と云はれ、『狂人』と呼ばれるのは、將來のこの主義者から見れば、何でもないことであらう。

かういふ行き方の生活なり、創作なりは、宗教の假面を被る偽善者や、哲學の形式を脱し得ない輪廓屋や、藝術の舊型を大事がる古典派——君もその一人——の反對を受け易いばかりでなく、渠等の様なデモクラト的意見が、世上の物識り、有識者等の大部分を占領して居るのであるから、かういふ行き方の作家は、その主義を——他派の所謂手段視してもいゝ主義とは違つて——こと更に自覺して居る必要がある。かの『宗教界評論』を出して居る芙蓉道人が、わが國の古代の神々の生々苦悶の自然主義的表象主義の生活（だから、まだその自覺はなかつた）から出て來た神道を論ずるに、この根元的思想に觸れないで、たゞ耶蘇教徒的慣用論法を以つてし、『抽象神、理想神』でなければその宗教思想は非靈物質的だと云つたのも、確かに君の藝術界に於ける十八世紀的傾向と同じだ。で、詩も生命も悔悟も靈感も現在のであつてこそ尊くもあり、深刻でもある所以を自覺して居ないの

である。たとへば、君が同じ日の紙上で紹介した佐藤紅綠氏の『鳴』でさへ、クラシク派の人々が『いゝ物さへ作ればいゝ』と思つて、君の云ふ様な迷信的インスピレーション（インスピレーション）にあらざるを待つて居ては、百年立つても出來る代物ではあるまい。これは矢張り主義の苦悶から出來た産物であるに相違ないのだ。僕等の主義は手段ではない、直ちにそれが生命になつて居るのである。かういふ生命を主張するのに、かの六號活字的輕卒な態度を以て、君は『煩くて堪らない』と云つたが、僕はまだ君の様な『堪らない』人が多いのを見て、なほ更ら堪る様にまで自覺さしてやりたいのである。主義の爲めに苦闘するは批評家の存在條件である。無主義、無方針の批評家は世に存在の必要がないのだ。然し一つ云つて置くが、若し僕の議論を根底から批評するつもりなら、先づ之を説き初めた著書『半獸主義』から云つて呉れ給へ。さうすれば、幾度も輪廓ばかりを渡る様な攻撃し合ひを繰り返さないで、適切に要領を得るだらうから。

終りに臨んで、今一つ云ふことがある。君は『泡鳴の如き自説擁護を空論と認む、自説の擁護は、その論にあらすして、作品にあり』と云つた。之は僕を作家と見てだらうが、苟

も一たび評論の筆を振ふ時は僕も一個の批評家で、自己の作品に對しても第三者の人稱を帯びて居るのだ。『文壇の愛嬌ものとなる莫れ』とは、作家が評家を兼ねるのが珍らしいから出た言葉であらうが、僕の批評は批評で、之を他の作家が却つて僕の創作よりも巧みに其作品に採用したとてかまはないのである。君の様なことを云ふなら、君はまた真正の批評家ではない、たゞ他人の作をかれこれいぢくる弄文者だ。批評は斷然創作の奴隸ではない。且、僕が創作的經驗から得た批評家としての議論が空論なら、創作に經驗のない君等の議論はなほ更ら空論ではなからうか。君の論には、また實際、どツちへも附かない、殆ど無方針で、君自身の所謂『思想界の逡巡派』に類するところが、これまでに多かつたのだ。近頃、技巧派の方に傾いてから、君の詩論に於ても段々明白な道筋がついて來たが、然しそれが僕とは殆んど正反對の常識的古典派の意見に過ぎないとは、枯淡で舊式で、あんまり情けないではないか。君の云ふ様な議論に導かれる青年詩人が若しありとすれば、現代的情趣も心熱も到底歌ひ出すことは出來なからう。

もつと詳しく書きたいのだが、僕は今新体詩の歴史を著述して居るので多忙だから、これ位にして置く。若し君と同じ様な議論が他に出て、もう別に答辯はしないで、これですまして置くつもりだ。

追 加

今日京濱電車のうちで知人に會ふと、時事新報の文藝記者がまた僕に對する議論を出して居ると注意されたので、直ぐ讀んで見ると、成る程出て居た。然し枝葉の議論ばかりで僕の根底に當つて居るところはない。一言にして云ふと、『泡鳴の所謂新思想、新趣味それ自身が直ちに朦朧晦澁なら格別、さもないければあれだけちや解嘲にならない』と云ふのが一つ。これに對しては、普通人を代表する時事新報記者に僕等は思想、趣味が朦朧晦澁と思はれても、それは當然で、敢て之を訂正する必要はない、技巧を巧みにすればする程渠の様な人々には分らなくなるだらうと答へて置く、『朦朧でなければ表現し得られない程深遠で、痛切で、また熱烈』な状態とは、渠が記實の筆で満足する境地とは丸るで違つてゐるから、『山解』に見えるのだらう。

次に、『予と雖も、詩歌の形式の制約は感味を拘束する手段ではない事を認て居る』とあ

る。それでは、何にも僕等詩人の格調問題に口をさし挿む必要はなからうと答へて置く。

次に、僕の著書『神秘的半獸主義』を『曠世の大著述でもあるかのやうに振りまはして』居るといふことだ。僕は無論さうである。現代に於て、この著の様に、現在わが國民と有識者流との沈溺して居る形式的哲學、傳習的宗教、架空の抽象觀念を嬉しがる理想派的美學、古典的藝術ばかりを有難がる思想、等を眞面目に攻撃打破して、新らしい自然主義的傾向を鼓吹した物は他になからう。この點に於て、この著は新文藝の向ふべき方針を定めてやつた物で、殆ど預言者の資格を有して居る。だから、僕の近頃の議論を根底から批評しようとするなら、先づこの著から研究してかゝり給へと云ふのだ。『半獸主義を繰讀すべく、予はそれ程までに罪を作らない積り』なら初めつから僕の議論を評する資格がないではないか？ たゞつまらない、要領を得ない、枝葉の『揚げ足を取るやうな』議論をしたとて、何の役にも立たないから、先づ僕の主義の根底からくつ返すなら、くつ返して見給へると、充分他人の反駁論を——もしあらば聴きたい爲めに、之を引用するのが、何にもかゝら威張りをするのではない、僕の書を僕が引用する程正確なことは他にはない。僕は以上

の考へであるから、僕は『輕薄的態度』や、『不眞面目な調子や上すべつた冷笑』を徒らにして居るのでない。記者にさう見えるのは、記者があまり平俗な常識から割り出して考へるからであることを斷わつて置く。(明治四十年六月二十五日作、讀賣新聞)

駁 駁 々 論

『辻談議』のにぎりめしは、前週と今週との日照附録に渡つて、また僕の『駁論』に當つたが、たゞ僕の言葉を拾つて行くばかりで、その餘は僕の言葉に啓發されて思ひ付くことを附け加へた様な物だ。君はたゞ片々たる斷篇を毎週の本欄に載せて居ればそれで責めがふさげて行くのだらうが、僕は、小冊子ながら、自分のまとまつた説を一篇の書に著はしてある。君が之を讀めば、またまとまつた物ではないと云ふかも知れないが、君の折に觸れて書いた評論を一冊にしたのとはわけが違つて居るのである。これには、僕の十數年來考へて來た哲理、宗教、文藝觀が述べてある。それが幸か不幸か、君等の立ち場とは全く飛び離れて居て、君等の傳習的に宗教と云ひ、哲學と思ふものとは非常に違つて居るらしい。僕は君の様な人萬人を敵とするのは愚かなこと、さういふ人々の後ろ楯となつて居る古今東西の傳習思想に向つて闘つて居るのだ。本紙で云へば、たゞ觀念に過ぎない抽象神を提げて神道を駁したり、卑賤なる道徳教を以てまた之を辯じたりする思想は、みな僕の

敵である。宇宙を有目的または手段と見爲すものも、また僕の敵である。それを何ぞや、その日／＼の斷片的議論に於て、「もつと修養すれば」的の口吻を以つて迎へるに過ぎない？ それ以上の批判を下す素養のないものなら知らず、その口吻に面しても、もつと僕の根底から覆すなら覆して見給へと云つてゐるではないか？

それを、君は梁川一派の舊思想に安んじて、信仰力とか人格とかいふ内容のない（あるにしても、僕等から見れば貧弱な）迷信を楯として、今回もたゞ表面ばかりを渡つて行く御挨拶では、僕が再び之に答へるだけの勇氣も出ないわけであるが、議論の仕方は君の様な風にしては行けないといふ消極的方面を示めす爲め、君の表面的辯解の表面的辯解なる所以を擧げて見るのもよからう。君は第一に僕の著を讀まないで、恰も讀んだかの如く『半獸主義とは名づけ得たるものであらう』などと云つて居る。その口調が如何にも輕薄である。（但し、屁、唾、涎など云ひ出したのを指すにはあらず。）また、藤村氏が詩作的煩悶を逃れて終に散文界に落ちたのを消極的と云ひ、泡鳴が之を堪へて内容の自由流出説を確信するに至つたのを積極的と云ふのは、詩人の態度から見ても、何も『聽えない』とでないではな

いか？君は、僕の詩にけちを附て、此言を打消さうとしたらしいが、態度上の問題と創作上の巧拙とは混同出来ないものである。君は又文藝の型は信仰と人格とから出て来ると云つたが、君等の信仰や人格も一種の型であるから、型が型を拵へるのは、四角な枳があつて四角な壽司が出来るやうな物だ。僕の主義はそんな枳形をぶち破る爲めに出て来たのだから、専ら自由自在な生命の力と香氣と色とを出さうと云ふのだ。その他に何も形式的抽象的傳習物の寄宿、君等に取りては全く主宰するのを許さないのだ。之れに反對するならば、もつと内部的論法を以つて來給へ。

君は、『主義を行ふには、手段方法が必要』と見たが、それは今いふ壽司を拵へようとするからで、僕は手段の必要な主義を唱へて居るのではない。世に、たとへば今月の雑誌『詩人』の六號活字の様に、主義を以つて創作するものは窮屈だと思ふものが多いが、渠等はすべて君と同様『いゝ創作』、『公平な批評』を夢見て居て、いまだ自己の立ち場と生命とを自覺しない古典的、乃ち自己に直接ではない、間接の思想と技巧とに満足して居るか、またしようとする傾向があるのだ。僕の主義は僕自身で、僕自身が直接に手段でもあり、技

巧でもあるのだ。壽司で云へば、壽司身づからが壽司を食ふ表象的生活を主張するのだ。

これは、僕が近頃早稻田文學で説いた通り、また新小説に出て未完である通り、佛蘭西表象派中エルレイン、マラルメ等が多少之に近いし、わが神道の本源（芙蓉道人や水月生の目當とするよりも古くまた切實なるもの）たる諸神、乃ち原人の生活が最もよく之を發揮して居たのだ。之が儒教並に佛敎、近くは耶蘇敎の消極的萎微思想によつて、いよく隠されてしまつて、世人は愚か、神道者流も身づから之を知らなくなつてしまつた。不幸にして、僕といふ表象が自覺の度が足りないなら、その思想も技巧も足りないのであるが、僕よりも大なる自覺者が出て来るまで、さういふ主義に辟易する無修養、無感覺のものが多い間は、鳥なき里の蝙蝠の様に、僕の表象が最も大なる物であるに相違ない。

君はまた『煩悶的分子』と云つたのは、文藝觀の上計りだと辯じたが、文藝觀が人生觀から分て考へられると思ふのも迂濶であるし、若し又其意が創作の形式上にあるとしたならば、僕の詩形上の煩悶はもう通り越して居るのに、之を以つて僕に擬したのは、既に云つ

た通り迂濶である。また、早熟と非修養の分子は『今の文壇ばかりではない、何時でもある』と云ひ換へるなら、尙更ら深い煩悶の経験を興へて、偽天才を淘汰さすべきものなのに、之を抑壓して姑息な彌縫をやらうとするのを『親切』だとは、更らに迂濶のそしりを免れないのである。また君は僕の今までの議論に技巧を無視しないといふことが明示されて居ないと云つた。第一、僕の著を見ないからで、また今年の帝國文學に出た演説並に早稻田文學に出した長論文にも、『思想は乃ち技巧、技巧は乃ち思想の域』に達すべきことを云つてあるが、近頃明星記者が之を見て、渠の派年來の主張だと云つたが、渠等の創作も君と同様手段的技巧を知つて、自由流出的技巧に達しないのである。渠等が花外氏其他の直情派を修辭の上に於てひやかすのもいゝが、渠等自身がたゞ技巧その物に死んで居るのを知らないのだ。渠等は自分の都合のいゝ様に人の言を引用するが、死んだ技巧を罵倒する思想即技巧説が、直ちに渠等の缺點に當つて居るのを覺らないのは憐むべしだ。非技巧、無飾藝術などいふ論者が出るのも、かういふええ技巧派があるからである。君はまた僕が『おのづから技巧』と云つたのを捕へて技巧を意識しない證據としたが、さういふ論

法はたゞ表面的なので、僕の最も退けるところである。僕は君等の云ふ様な方便的技巧を云ふのではないのだ。僕の所謂『自覺した技巧』とは表象的生命の呼吸が『おのづから』發揮するところにあるのだ。わが國古神の生活が、現代に於て創作の上にあらはれるのを云ふのだ。

君が僕の創作を標準にして僕の議論を空論と云ひ、創作と批評とを混同する傾向が見えたから、僕は批評家として前回に於て之を駁し、それなら創作をしない君の論は尙更ら空論だと云つた。それに君は今回平然として『空論と否とは創作に経験のあると否とはは關せず』と云つてかれこれ論ずるのは、寧ろ僕の意見を採用したのであつて、この場に於て何の用もないではないか？ たゞ別に『合理的分子さへ加へれば』云々と附加して、修養がないから、『感情あつて理足らざるもの』と換言した。さう議論があつちへ走り、こつちへぐらつく様では、曾て君があやめ會詩集を評した時の侮辱的態度を、僕に非難されてから、直ぐ寛大にも改めた場合とは違つて、君の所謂常識に據つて常識を超越する批評家の立派な態度とは云へないではないか？ その上、論文なるものが必らずしも合理的法則で固

て行つて、またもとの拘束的古典に歸つてしまふ。君は如何に辨解しても、有識者は皆君を古典的技巧派の一人と見て居る。自分でそれが分らないやうな状態を、僕等は自覺がないと云ふのだ。それで、『批評の公正』を保たうと云ふのは、夢のまた夢である。公正その物は、博愛や慈善と同様、既にあり得べからざるのであるから、僕等は主義の流出にまかせて自在に創作し、評論するより外はない。君も、主義とまで行かないでも、自分の趣味と傾向とを自覺したら、もつとしつかりした議論が出来よう。何も公正、中庸の様な姑息な心配は入らないのである。世には、君もさうだが、天才といふ迷信があるが、天才なる物は最も偉大な主義的自覺者に過ぎないのだ。ところが古典派には、自覺がありとしても直接的でないから、古來この派に天才があつたためしはない。僕のこの派に當る所以はこの點から見ても理由があるのが分らう。

君は僕を以つて『解つたことを解らないやうに理屈で押さうとする』と云つたが、君には何にも僕のいふことが分つて居ないではないか？君は青年詩人等に向つて、『その方途を得よ』と云つたその方途は、たゞ常識を超越して、信仰と人格とを養成せよといふに過ぎ

ない。僕は抽象的觀念の人格や信仰では行けないから、そんな宗教的傳習的思想を打撃して、個人の發展を最も自然な現代的情趣と心熱とを以つて實行しろと論じたのだ。議論の根底はこゝにあるのだが、以上云つて來た通り、君は少しも僕の内容に觸れて居ない。それで、進歩して來た現今の讀者を評論家として満足さすと思つて居るのだらうか？僕の言葉を以つて僕にしつべし返すだけでは、僕は何の痛痒をも感じないばかりではなく、苟も僕を駁すと出て、何の駁するところもない様では、批評家の責任が盡せて居まい。僕のこの議論が矢張表面に傾いてゐるのは、僕の考へが表面的なからではない。初めに斷つて置いた通り、たゞ君の議論の表面的に過ぎないのを指摘するのが目的であつたからだ。

且、また、僕の煩悶即自然、詩即苦悶、人生無目的論に對して、得意然として盲主義、盲滅法、無主義の偶然等の語を用ゐたが、これは寧ろ表面的に僕の意を得たもので、僕は積極的に宇宙と人生との盲目無主義を唱道し、自我の盲目的發展を無主義のうちに實行するのを主義にして、君の様な半可通の常識論者に當つて居るのである。君は之を以つて僕の説を駁したと思つて居るのだらうが、かういふ語を受けてからの堂奥に、まだく潜ん

